サポート的な俺のリリカル介入記

どこかのしんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サポート的な俺のリリカル介入記

【Ｎコード】
Ｎ０６６７Ｐ

【作者名】
どこかのしんちゃん

【あらすじ】
せっかく転生したのにチート能力がないなんて！ちくしょう、神様と出会えないなんて…。仕方ないから生の魔性少女を見るだけでいっかと思っていたのに俺にもリンカーコアが！？あのフェレットよりも魔力が少ない？あ、そうですか、そうですよね。しかし、介入してしまった以上俺もリリカルマジカル頑張ります！サポート的な意味で。

プロローグ　まさか本当に転生するなんてッ！！（前書き）

お初にお目にかかります。しんちゃんです。Ａｒｃａｄｉａ様のほうにも投稿させていただいています。

注意点

1、見切り発進のため見通しが立っていません。

2、オリ主です。なんだかんだ言いながら介入させるつもりです。

3、勢いで書きなぐってます。

4、気分次第でネタを放り込みます。

5、多少オリ設定、オリ魔法が出てくると思われます。

以上です。もし気分を害するような内容になってしまったら申し訳ありません。

一向に構わん！という方はどうぞお読みください。

プロローグ　まさか本当に転生するなんてッ！！

オッス！俺、転生者！

……まぁ待つんだ。思わず回れ右したくなる君たちの気持ちはよぉ～くわかる。でも…しかたないじゃん！しちゃったんだから！俺だってしたかったわけじゃないんだ！憧れてはいたけども！

しかし、考えてみてほしい。ほら、アレだ。転生者ってさ、み～んな、やれチートなり、若しくはそれに類する力を持ってたりするじゃない（誇張あり）？

俺にはそれがないんだよ！

かの有名な転生トラックにも轢かれてないし、神様のミスで死んだわけでもないんだ…。そもそも！力をくれるという神様にも会ってないんだよ…。え？じゃあ死因は何なのかって？そ、それはほらあれだよ。あれ。うんアレに違いない。まぁ気にしないでいこうよ、ね？

こ、こほん！というわけで転生者なわけですよ。してしまったものは仕方がない。俺は確かにザコだ。モブだ。しかし、俺は考えた。なんと！生で魔法少女を見られるのだ！これはチャンスだと考えるね。あの娘たちの生ボイスを聞けることに！あのバトルやこのバトルを見ることができることに！

……ん？待てよ？バトルってほとんど結界の中でやってなかったか？あれ？ってことは…バトルが…見れ…ない？

「こら、いつまで起きてるんだ。早く寝なさい。明日は入学式だろう？寝坊してもしらんぞ。」

「おぉ、これは親父殿。問題ないよ。きっと母上がやさ～しく起こしてくれるから。」

「甘えるんじゃない…って日記か？」

「うん、世の中の理不尽を嘆きつつ書いてるんだ。今日で終わりだけどね。」

「…まぁ、いいが。明日寝坊したら、俺の愛の拳で起こしてやるからな！」

「良い子は早寝早起きが基本だよね！さすが俺の親父だ！憧れるＺＥ☆」

「そうだろう、そうだろう。というわけで寝なさい。」

「ういっす。おやすみ～。」

「おやすみ」

ゴチンッ！！！翌日、俺が目を覚ますと頭にそんな音の衝撃がきました。

「痛い！起き抜けからなんか頭が痛い！！」

「それが愛の痛みというものだ。まったく案の定寝坊したな。」

「あれ？なんかぶっいくなおじさんがいる。全く…夢なら美人だせってんだ。」

ガンッゴンッゴンッ！！寝ぼけた俺のセリフへの親父の返事は愛の拳の三連発だった。

「目は覚めたか？」

「は、はひ…。」

「朝飯もできてるから早く着替えてきなさい。」

親父の愛は痛かったがそれも休みに限った話だ。いつもは美人のお母様が優しく起こしてくれるはずだからな！今日は俺の私立聖祥小学校の入学式だから有給で俺を起こしただけだろう。

ちなみに俺は原作に関わる気はあまりないので遠くから見てるだけの一般人である。ザコである俺が戦闘に介入しても一撃でやられる自信があるからな！

いやぁ俺にも原作に介入しまくって俺Ｔｕｅｅｅｅｅｅｅってやってニコポ、ナデポでウハウハなハーレムを妄想したこともあったよ。知ってたか？ニコポやナデポさせるってチートの一種なんだぜ？普通に考えてフツメン！（↑ここ重要）の俺がそんなことできるわけがないんだよ。

よって一般人らしくリリカルだろうとマジカルだろうと普通に生きていこうと思います。ん～お母様の作った朝食うまうま。

「それで入学式には間に合うのよね？」

「ああ、朝一で部下に書類を届けるだけだからな。いやぁ～晴れてよかった。」

「え、親父一緒に行かないの？」

「昨日書類を渡し忘れてしまったからな。」

「ってことは親父はバイクでその部下さんのとこに行くんだよね？」

「晴れてて助かったよ。」

「よっしゃあぁぁぁぁぁ、お母様、私タンデムで一緒に行きたいでござる！」

「今日はスカートで行こうと思ってたのに、仕方ないわね～。」

「大丈夫！お母様はパンツスタイルでも美人だから！」

「口ばっかりうまくなって。」

両親そろってバイクというかツーリングが趣味でそれがきっかけで出会ったらしい。休日は3人でツーリング行くけど最近は親父の仕事が忙しく行けてなかったのだ。前世では足にしか使ってなかったが両親の影響で今では俺も好きになってきた。くぅ…小学生のこの身がうらめしい…。

「それじゃあ、しっかり捕まってなさいよ。」

「イエス、マム！」

お母様は俺が腰に手をまわし、しっかりと掴まるのを確認とアクセルを回し、小学校に向けて走り出した。

ゴ～ゴ～ゴ～アクセル全開

バイクで爆走～

学校まで爆走～

お～れを～乗せ～て　聖祥へ～行くんだろ～♪

とか歌ってる間に着きました。入学式にバイクで連れてきてもらうなんて俺くらいだろうと思うとちょっと優越感…とか思ってたんだけど…わぁ～高級車がいっぱいだぁ～。

「ふぅ。さ、先にいってらっしゃい。先生に失礼のないようにするのよ。」

「わかってるってちゃんとからかってあげろってことでしょ？」

「全くもう…。」

普通なら保護者と一緒に教室に行くのだが、俺は早く原作少女た

ちを見たかったため、お母様が友人と合流するより先に教室に行くことにしていた。

そして発見…したのだが…そうだった。この時点ではまだ3人は友達じゃなかったんだった…。アリサは、うん、私に近づくな！的なオーラが出てるね。すずかは周囲に怯えてる感じ。なのはは…およ？何か配ってらっしゃる。そして俺のとこにもとことこやってきた。

「はい、家のお店のクッキーだよ。私、高町なのは！これからよろしくね。」

うむ。かわいらしいね。2人と比べると社交的だね。どうかそのままのキミでいてほしい。微笑ましいのでなでなでしてみよう。べ、別にナデポを期待したわけじゃないんだからね！

なでなで

「にゃ、なんで撫でるの？」

「いや、よろしくってことで…」

可愛らしく頷いてとことことまたクッキー配布に戻っていった。まぁ、わかってたさ。初対面でナデポとかありえないよね。うん。所詮俺は男子生徒Aだからね。おっと先生が来たようだ。

「みなさんご入学おめでとうございます。私はみなさんの担任になる大久保千尋です。先生と一緒に頑張っていきましょうね。」

そして自己紹介タイム。そういえば名前順に座ってるけど、アリ

サってどうなるの？アリサで座るの？バニングスで座るの？…あぁバニングスなんだ。

「高町なのはです。今日からよろしくお願いします。」

「つ、月村すずかです…。よろしくお願いします…。」

「アリサ・バニングスよ。よろしく。」

かわいいなぁ～。くそう、俺がイケメンだったら！！！「～くん！あなたの番よ！」…ハッ！もう俺の番だったのか。

「えっと、柳浩樹です。男子生徒Ａですがよろしく。」

しょ～もない自己紹介になってしまった…。しかも自分から男子生徒Ａとか…ｏｒｚ

うん、頑張れ俺！しがない一般人だがリリカルマジカルな世界で頑張って楽しむんだ！

プロローグ　まさか本当に転生するなんてッ！！（後書き）

初心者で稚拙な文章ですが感想等ありましたらよろしくお願いします。

第1話　油断するな！やつはきっと気づいている！（前書き）

まだあまり進んでいませんがストック投下。

第1話　油断するな！やつはきっと気づいている！

改めて自己紹介を。転生者こと男子生徒A…じゃなかった柳浩樹です。聖祥小学校でピッカピカの1年生やってます。入学式からちょいと時間が経ちました。現在原作的なイベントは発生してないようです。私は現在休み時間中の教室にいます。大丈夫。わかってます。原作キャラたちが気になるんですね？実況開始します。

なのはの場合

「うんうん。へぇ～。そうなんだぁ～。」

積極的に会話に参加してるわけではないようです。これはあれかね？迷惑かけないように～ってやつなのかね？まぁ、かわいいからいいか。

すずかの場合

「……ペラッ」

うむ。本を読んでいらっしゃるようです。変化が起きません。周囲と打ち解けるのはもう少し先になるようだ。

アリサの場合

「……」

近づくな！的なオーラがまだ残ってるように感じます。最初は結構ひねくれてたみたいだしな。きっとすずか友達イベントでいろい

ろ解決するよね、うん、そうに決まってる。

いかがだったでしょうか？楽しくなるのはこの3人が仲良くなってからだよ。キミもそう思わないかい？おっと授業がはじまるようだ。次の時間は…算数か。何しよう？そうだ！妄想しよう！小学生には興味がないので大人バージョンでいこう。

柳くんの妄想ストライカーズ

ちゅど～ん

「すごいよ！さすが浩樹くん！」

「こんなのたいした敵じゃないさ、ハハハ。」

「あのね、今、教導うまくできてるか自信がないんだ…そ、それでよければなんだけど夜にいろいろ教えて欲しいの・・・。」

「それはお誘いかな？（キラーン」

「うん、浩樹くんの教導…なのはの体に叩き込んで？」

「なのは！ずるいよ！自分ばっかり！」

「フェイトちゃん！？」

「ねぇ、ヒロキ。なのはより私に教えて欲しいな。ヒロキのよ、夜の教導…」

「おいおい、二人して胸を押し付けてくるなよ。」
「むぅ～フェイトちゃん！私が先に誘ったの！」
「順番なんか関係ないよ！」
「俺の体はひとつしかないんだぜ～ＨＡＨＡＨＡ」
俺は２人の肩を強引に抱き寄せ２人の胸に手を…

ペシッ！

「およ？ここは？俺、これから夜の教導を…」
「柳くん。黒板の問題を解きなさい。」
「え、学校？…ということはあれは…せんせー！！！」
「ど、どうしたの？」
「なんてところで起こすんですか！せっかく…せっかく…これからってところだったのにいいいい！！」

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴って授業は終了。本当にいいところで邪魔されたようだ。本当に惜しいことをしてしまった…。きっとあのまま３人で

チョメチョメできてたはずなのに！！

「柳くん、もう授業中に寝たらいけませんよ！」

「へーい…」

クソ！これが世界の意思というやつか！俺には妄想の自由さえないのか！いいじゃないか妄想でくらいモテモテ展開になったって！俺の妄想ならあそこからの発展してはやてやシグナムもチョメチョメできたのに！

「おーい、元気だせよ、男子生徒Ａ。」

「男子生徒Ａさー、どんな夢みてたんだよー、エッチな夢かー。」

「男子生徒Ａくんって…（ヒソヒソ」

なんかあだ名として定着してしまったようだ…。もう俺ダメかも…くすん。いや、逆に考えるんだ。ただの男子生徒ではなくできる男子生徒Ａなんだ！うん、これでＯＫだ。

そんなこんなで学校も終わり放課後となった。今更小学１年生の授業なんてやらされてもしょがないし、内職でもしないと正直やってられない。ん？なにやら、３人娘がわいわいと何か言い合ってる…ハッ！もしやこれがお友達イベントか！こんなときにはこれだ！

たらららったら～けいたいでんわ～（カメラ機能付き）

パシン！

「痛い？でもね、大事なものを取られたほうはもっと痛いんだよ？」パシャ

「何よ！アンタ！邪魔しないで！」パシャ

「それはすずかちゃんの大切なものだったらどうするの？」

「この子が貸さないからよ！」

「ちゃんと言えばわかってくれるはずだよ。強引に取られたら悲しいよ。」

「〜〜〜！！そ、そんなことわかってるわよ！でもしょうがないじゃない…話したかったんだから！」パシャ

「2人とももうやめて！」パシャ

「「！？」」

「バニングスさん、ありがとう。」パシャ

「どうして、アンタが私にお礼なんて…」

「心配してくれたんだよね？私一人で本ばかり読んでるから…」パシャ

「べ、別にそういうわけじゃないわよ…私も独りだったから…と、友達になれるかもって思って…ボソボソ」パシャ、パシャ、パシャ↑重要だ

ったので2回撮った。

「そっか。だったら友達になろう？そしていっぱいおしゃべりしようよ！もちろん高町さんもね？」

「私も…いいの？」パシャ

「もちろん。だって助けてくれようとしたんだよね？だったら高町さんとも友達になりたいな。」

「なのはだよ！」「アリサよ」パシャ

「え？」

「と、友達なんだからな、名前で呼ぶくらい普通でしょ！」

「にゃはは、なのはもそう思うのです。」

「じゃあ私のこともすずかって呼んでね。」パシャ

「当然でしょ。」「うん、ありがとうすずかちゃん！」パシャ

うんうん。いい話だね。おいちゃん涙が出てきちゃったよ。そしてできるなら動画で収めたかった…。いい場面に出会えてよかった。よし、あとは帰ってデータをパソコンに移して…「ちょっと待ちなさい！」

あ…み、見つかってしまったようです…。

「アンタ、さっきからそこにいたわね？どういうつもり？」

「え？ずっと見てたの…？」

見つかっていた…だと？イヤ、きっとこれはブラフだ。なのはのことも気がついてなかったみたいだし…。

「な、なんのことかな？俺はお母様に今日の夕飯のリクエストをメールで送っていただけなんだけど…」

「とぼけるんじゃないわよ！ずっとパシャパシャ聞こえてたんだから！！」

「そ、そんな馬鹿な！音はちゃんと最小にして…あ…」

「引っかかったわね…」

しまった！カマかけだったのか。ちくしょう、この天才め！どどど、どうしようちゃんと言い訳しないと嫌われてしまう…。というか小学生にカマかけられてまんまと引っかかる俺って…

「どういう…ことかな？ちゃんと説明してくれるんだよね？」

「困ってる女の子を放っておくなんてヒドイの！」

言い訳フェイズ

私、現在小学生の女の子3人の前で正座しています。下がコンクリなので足が痛いです。しかし、そんなことを言おうもんならアリサ様のありがた～いビンタをいただくことになるでしょう。あ、それはそれでアリ…か？

「で？」

「はい、なにぶん女の子の喧嘩のようだったのでどう仲裁に入るべきか悩んでいました！」

「携帯電話でなにしてたのかな？」

「メールをしておりました！」

「もう一度言うよ？携帯電話で何してたのかな？」

「しゃしゃ、写真を撮っておりましたです！！」

お、怒ったすずか…怖いよぉ。でもこれもなかなか…って待て、俺はマゾじゃない。うん。俺は怯えてるだけだな。決してゾクゾクなんてしてないぞ。

「え！？写真撮ってたの！？えーくんひどいよ！」

「え、えーくん？」

「とりあえず、その写真みせてもらえるかな？」

「こちらにございます…」

なのはが何やら俺をAと思い込んでるようだが今は気にしない…というかできない。ところで教室の内向的だったすずかさんはどこにいったのだろうか？

「ほ、ほんとに最初からいたのね…」

若干、頬を染めたアリサがつぶやいた。その姿にニヤニヤしてしまうのは仕方ないよね？

「アンタ、自分の立場わかってるんでしょうね？」

「申し訳ありませんでした！」

プライドなんて気にしな～い。ここのに正座させられてる時点でそんなものはどこかに旅に出たよ。

「うん、この写真を全部私に送ってくれたら許してあげようかな？」

「すずか！？」「すずかちゃん！？」

「アリサちゃんと喧嘩して仲直りして、なのはちゃんも助けてくれて、おかげで友達になれたんだもん。その場面が写真に残ってるんだったら記念にしておきたいな。」

あれ？なんか勝手に解決に向かってる。客観的に見たら俺、喧嘩の場面を写真に収めた不謹慎な最低野郎でしかないのに…。

「だったら、なのはもほしい～。ねぇえーくん。私にも送ってくれる？」

「なのはまで！？だ、だったら私ももらうわよ！これで勘弁してあげるから感謝しなさい！」

「い、イエス、マム！」

こうして俺の言い訳は無駄に終わり、原因のはずの写真を送ることでなんとか許してもらえるようだ。あ～一時はどうなることかと思った。介入しないにしても嫌われるのは困りますよ。ふぅ、さて帰るとしますか。

「あ、えーくんも私たちの友達になってくれるよね？」

「そうね。放っておくと今度はなにするかわからないし。」

「えーくん。なのはって呼んでね！」

……え？

第2話　まほうしょうじょ　ririかるなのは　が　あらわれた（前書き）

一気に無印開始まで飛びます。

第2話　まほうしょうじょ　りりかるなのは　が　あらわれた

まさか、あそこで友達になってくれといわれるとは思わなかった。これって介入かな？いやいや、あの3人にだってほかにも友達はいるはず。俺はその一人になったにすぎない。モブはモブらしく身の程をわきまえなければ…。

「バス通学やめて正解だったな～。自転車ってのもいいもんだ。」

あれから時は過ぎ現在聖祥小学校3年生となった。俺は誕生日を機にバス通学をやめてプレゼントにもらったＭＴＢで登校するようになった。身長がないぶん小型のものになってしまったがだいぶスペックの高いものを買ってもらった。さて、そろそろ原作開始時期。もうジュエルシードってこの町にあるのかね？

「おはよ～。」

「あ、えーくんおはよ～」

「なのは…いい加減えーくんはやめない？」

「えーくんはえーくんだもん。」

「もう諦めたほうがいいんじゃないかな？」

「だったらすずかはやめてくれる？」

「だぁ～め。だってこれもあの時の罰だもん。」

「反省は…反省はしてるんだよ。」

「残念ながら反省だけじゃ足りないのよ、男子生徒。」

「男子生徒は勘弁してぇぇぇ！！」

いまやなのはもすずかもそしてアリサまでも本名で呼んでくれない。男子生徒Aというのが気に入ってしまった？ようでお願いしてもこれは直してくれない。クラスでも”えー”と呼び始める始末。あげく先生までも…

「Aくん…じゃなかった柳君、次を読んでください。」

せんせー、俺が不登校になったらどうするんだい？柳浩樹ってそんなに地味な名前かなぁ？

「この前調べてもらったようにこの町にもたくさんのお店がありましたね。」

ん…まだ授業終わってないのか。変なとこで目を覚ましてしまった。きょろきょろ…お？アリサが何やら落書きをしている。似顔絵か？よし、消してなければあとで写真を撮っておこう。

キーンコーンカーンコーン

「将来かぁ…」

そうなのはが昼休み屋上でつぶやいた。おや？俺は何故ここにいるんだ？ここってもう原作じゃない？さすがにね、１０年近く経つといろいろ忘れてるんですよ。もう仕方ないし、学校では介入しちゃおっか？うん、こっちは危険がないはずだよね。…ん？それ俺がここにいることと関係ないよね？

「俺ってなんでここにいるんだっけ？」

「ぼーっとしてたみたいだから私が引っ張ってきたの。で、将来がどうしたのよ？」

「うん、アリサちゃんたちってもう将来のこととか考えてる？」

「私はパパの仕事を継ごうってって考えてるからそれに関係あることをしていこうって思ってるけど。」

「私は機械が好きだから工学系の専門職って考えてるよ。」

「小学生で考えることじゃないよね？」

「えーくんはちょっと黙ってようね？それでなのはちゃんは何かあるの？」

「2人ともすごいね。私は翠屋も将来のヴィジョンの一つだけど…まだやりたいことがはっきりしてるわけじゃないの。」

「だから小学生がヴィジョンとか言葉のチョイスおかし「黙ってって言ったよね？」……はい…」

なんですずかは俺に対してこんなに強気なんだ？もしかしてまだ

根に持ってる！？何かしてご機嫌を取っておかねば…。

「私は2人みたいに特技も取り柄もないし…。」

「バカちーん！理数の成績私よりもいいくせにそんなこと言うんじゃないわよ！」

「そうだよ。なのはちゃん、なのはちゃんにしかできないこと。きっと見つかるよ。」

「ヒロキ！アンタもなにか言ってやりなさい。」

「え？でもすずかが黙ってろって…「えーくん？」あ、えっとだな。そもそも、小学生でそんな難しく考えなくていいんだよ。」

「でも、アリサちゃんとすずかちゃんは…」

「2人は近くにそういう風に強く意識させる人がいるからだろ？アリサのパパさんは社長さんだし、すずかの家にはあのお姉さんがいる。なのはだって家が喫茶店だからヴィジョンの一つになってるんだから。」

「うんうん。」

「たまにはいいこと言うじゃない。」

「それにな。なのははみんなに好かれてるんだぞ？」

ここで俺は携帯電話を取り出す。すずかのご機嫌取りに使う予定だったが仕方ない。ここでこのカードを切ったほうが好感度が上が

る気がする。

「ほら、これ見てみろ。」

「あ、これ私の絵？えーくんが描いたの？」

「私の絵もあるね。なんだか気恥ずかしいな。」

「な、な、な、」

うろたえてるやつがいるが気にしない。むしろそれも目的の一つだったし。俺が見せたのはアリサが授業中に描いたなのはとすずかの似顔絵だった。

「こんなものいつの間に撮ったのよ！！！？？」

「天からの贈り物さ。」

「え、これアリサちゃんが描いたの？えへへ、うれしいなぁ～。」

「えーくん。私の携帯に送っておいてね？」

「あ、なのはも！」

ふぅ…さすがは俺だな。見事解決だぜ！

「あああ、あんた、かかかか、覚悟はできてるんでしょうねぇ？」

「待ってくれ！ほら、なのはもちゃんと好かれてるんでよってことがわかったわけだし！」

「うるさい、うるさい、うるさい！このバカ犬ぅぅぅ！！！」

俺はアリサに引っ叩かれながら思った。録音しておけばよかったあぁぁぁぁ〜〜〜

なのはｓｉｄｅ

私は家で携帯電話を眺めながらご機嫌でした。その理由はアリサちゃんが描いた似顔絵の写真を見ていたからでした。

「うれしいな〜。えへへ。」

塾のあともアリサちゃんは恥ずかしそうにしてたけど私には照れているんだとわかったの。えーくんいい仕事してくれるなぁ〜と考えていると私は塾に行く途中で見つけた怪我をしたフェレットさんのことを思い出した。

「あのフェレットさん大丈夫かな…。うちで預かれることになったのはよかったんだけど心配だなぁ。」

とそんな心配をしてるときだった。

（聞こえますか？ボクの声が聞こえますか？）

時間がない助けて、その声は聞き覚えのあるもので私はよくわからなかったけど助けたいという感情に身を任せてすぐに着替えて家

を飛び出した。
無意識ながら私はおかしな気配をたどり、走っていくとたどりついたのはフェレットさんを預けた槙原動物病院でした。禍々しい空気に怯えていると大きな音が聞こえてフェレットさんと黒い塊が飛び出てきました。
「え？え？な、なんなのあれ！？」
「来てくれたんですか…」
「フェレットがしゃべった！？」
驚きの連続だったのですが私はとりあえずその場からフェレットをつれて逃げ出しました。
Ｓｉｄｅｏｕｔ

「あ～風呂上りの牛乳はいいねぇ～。」
そういえば原作っていつ始まるんだろう？フェイトあたりはもう近くにいると思うけど。ケガしたユーノは見つけたのかな。
「案外、窓開けたらなのはがユーノつれて逃げてたりして……ゴシゴシ……チラッ」
お、思わず二度見してしまった。え、マジで？今日なの？聞いてないんだけど…いや、だからって教えてくれる人がいるわけでもないんだけど…。

「とととと、とりあえず、どどどうしよう。携帯と自転車の鍵と…もうこれだけでいいや！」

そのまま家を飛び出した。そう俺は”そのまま”飛び出した。

「リリカルマジカル・ジュエルシード封印！」

となのはのそんな声が聞こえた。これは！シャッターチャンス！パシャパシャ

「リリカルマジカル・ジュエルシードシリアル21封印！ふぅ…」パシャパシャ

「……」

「……あ」

まほうしょうじょりりかるなのはがあらわれた。

にげる！

しかしまわりこまれてしまった。

「えーくん…何してるのかな？かな？」

「ちょ、ちょっと夜景の撮影に…とりあえずここを離れない？なんかすごいことになってるし…」

「そ、そうだね、ってにゃぁぁぁえーくんどうしてズボン穿いて穿いてはいの！？」

「え？……しまった！そのまま飛び出してきたんだった！」

うん、なんていうか…無理そうだね。原作キャラと恋愛なんて…。チートとか関係なく俺のキャラも問題だったらしい。あれ？おかしいな。目から汗が…

第3話　戦闘の基本、それはたいあたりである。（前書き）

とりあえず介入初戦闘。

第3話　戦闘の基本、それはたいあたりである。

とりあえず、そこから近い俺の家まで行き何よりも先に俺はズボンを穿いた。最重要項目だ。ジュエルシード？そんなもんより先に男の沽券を…

というわけでなのはを自宅に連れ込みました。何のためか？やだなぁさっきも言ったじゃないズボンを穿くためだ！

「で、えーくんはあそこで何してたの？」

「夜景を撮りに…って冗談だから！風呂上りに牛乳飲んでたんだけどさ、窓の外見るとなのはが何かかかえてあわてて走ってるように見えてさ。何だろうって思ってそのまま飛び出しちゃったんだ。」

「それで、私が怖い思いしてるときにパシャパシャやってたんだね。」

「いやいやいや、俺が着いたときにはもう封印してるとこだったんだってば！ほ、ほら！」

何やらまずい方向にいっているのを修正するために俺は証拠として撮った写真を見せた。

「……」

「ね？さすがに俺はそこまでひどいやつじゃないよ？」

まぁ戦ってる最中だったとしても見てることしかできなかっただ

ろうけど…。

「とりあえず信じてあげるの…」

「ん…あれ？ここは…」

「あ、ユーノくん。ケガ大丈夫？」

「え？ふぇ、フェレットがしゃべっておられる…」

「あ、あの…こ、これは！」

なのはがなんかあわててるけど…うわ～なんか変な気分。声帯とかどうなってるんだろう？

「まずは、あの、ありがとうございました。ボクはユーノ・スクライア。別の世界からやってきました。」

俺がいるにも関わらず説明し始めたおしゃべりフェレット。ここから魔法の説明にはいるんだろう？俺がいちゃダメじゃね？俺はだいたいが知ってる内容だったのでおしゃべりフェレットを観察している。

「というわけです。せめて時空管理局の人がこちらにくるまでで構いませんから、どうかボクに二人の力を貸してもらえないでしょうか？」

「うん、もちろんだよ。自分の町なんだもん。私にその力があるんだったら手伝うよ。」

「は？２人？」

「はい…ボクとしてあまり現地の人を巻き込みたくはないのですが、さすがに女の子一人に手伝わせるのは気が引けるので…」

このフェレットは何をおっしゃっていらっしゃるんだろうか？やばい頭の処理が追いつかない…

「俺、ただのパンピーなんだけど…」

「えええ！？じゃあなんであの場に？」

「なんでも何もこんな時間に知り合いの女の子を窓の外から見かけて気になって追いかけただけなんだけど。」

「そんな…リンカーコアだってあるのに…」

今、なんて言った？俺にリンカーコアがあるだと？おいおい、そんなこと言われると期待しちゃうじゃないか。

「それはなのはを手伝えるほどの力があるのか？」

「そ、それは…でも一人でよりもきっと心強いです。万が一なのはさん…「なのはだよ。」…え？」

「なのはって呼んで。あと堅苦しい話し方も禁止！」

「そうだな。これから仲間になるんだからそういう堅苦しいのはなしだ。よろしくユーノ。」

え？モロに原作介入だろう！って？いくら予想してなかったとはいえこの空気で断ったらなのはに嫌われるかもしれないだろう？それにユーノの必死な様をみてたらおいちゃん応援したくなちゃったよ。

「一人で大変だっただろう？よく頑張ったな。あんまり無茶はしないでくれよ？」　なでなで

「ありがとうございます…。」

「さて、なのは。どうせ家族には黙って出てきたんだろう？連絡してやるからちゃんと謝るんだぞ？」

「うぅ…なんかお兄ちゃんみたいなの…」

もうお母様が連絡済みだけどな。俺には女の子をこっそり自分の部屋に上げるなんてことはできない。どう考えてもバレるし。

「ところで俺のその魔力？ってどんなもんなのさ？」

「ボクの念話が聞こえなかったってことは多分ボクよりも少ないとは思うけど検査しないとはっきりとはわからないなぁ。なのはは圧倒的に多かったけど。」

ですよねー。ひょっとしたらなのは並みに魔力がある！？なんて都合のいいことあるわけないよねー。まぁないよりはマシかもしれないけどさ…。

「あと、なのはにユーノ。魔法のことちゃんと家族に言えよ？」

「で、でも魔法のことは…」

「言ったら、きっとお手伝いできなくなっちゃよ…。」

「どうするにしたって危険は出てくるんだ。いくら魔法のことを広めたらいけないってルールがあっても筋は通さなきゃいけない。それになのは。家族はきっとわかってくれる。もっと信頼してやれ。」

原作ではA' s終了まで秘密にしてたが知らない。原作ブレイクだろうと親は気が気じゃないと思うわけですよ。ここまできた以上俺のルールで進めさせてもらう。

「そう…だね。勝手な事情で巻き込んじゃったんだもんね…。」

「わかった。ちゃんとお話してわかってもらうよ！」

浩樹ー、なのはちゃんのご家族の方が見えたわよ～。というお母様の声がしたようなのでなのはとユーノを連れ立って玄関まで行くと迎えに来てたのはお兄さんの恭也さんのようだ。

「なのは、心配したんだぞ。こんな遅くに飛び出していくんだから。」

「うん、お兄ちゃん心配かけてごめんなさい。」

「柳くんも済まなかった。わざわざ連絡してもらってありがとう。ってどうした？」

「い、いえ…親以外からちゃんと”名前”で呼んでもらえたのがうれしくて…ぐす」

「うぅ…」

あぁ、例え苗字だけでも名前で呼んでもらえるってすばらしい。若干なのはへあてつけをこめて名前を強調する。しかも緑川ボイスで呼んでもらえるなんて…今度いろいろお願いしてみよう。

「そ、そうか。ご両親には家の店のお菓子を渡しておいたからよかったら食べてくれ。」

「あ、もしかしてそれで遅れたんですか？」

「ああ、場所もわかったし、なのはを保護してくれたんだから手ぶらはどうかとみんなで話してね。」

なるほど。てっきりすっとんで来るかと思っていたのに時間がかかったのにはそういう理由があったからか。なんか無駄に信用されてるような気がするがきっときちんとした大人がいて、なおかつそれが知り合いだったからだろう。

「それじゃあ、なのはフェレットのこととかまた明日聞かせてくれ。」

「うん！えーくん、また明日ね！」

さっきのあてつけには結果的に意味をなさなかったようだ。それにしても…俺にリンカーコアねぇ…。ユーノって確かAランクくらいだったか？それより低いとなると…戦闘ではたいして活躍できないな。わかってたけどさ。関わった以上サポートはするんだけど…クロノ登場あたりかな？前世にいろんな二次創作を読んだおかげで

頭脳的なサポートくらいならなんとかなるだろう。

翌日、俺はユーノとジュエルシードの対処に関して相談していた。介入自体は予想外だったが念話のおかげでようやく退屈な授業の暇つぶしができる。なのはには説明をすでに終えているらしく、レイジングハートを介して戦闘シュミレーションを行っているらしい。

（魔力に関しては仕方ない。どうしようもないし、やっぱりデバイスなしでもサポート魔法を最低でも１つくらいは覚えられないか？）

（うん、１つくらいだったらなんとかなると思うよ。浩樹どういうわけかなのはよりもずいぶん数学的知識があるようだし、術式の構成を理論的に覚えられると思うから。）

そりゃ前世じゃ２０歳超えてたし。さすがに小学生より数学ができなけりゃ２回目の死を迎えたくなる。それにしても簡単な理論は聞かせてもらったけど、やっぱり魔法っていうより科学的な印象のほうが強いな。

（指南書でもあれば俺も一人である程度はできそうだけど、ないものはしょうがない。魔法は何を覚えるのがいいんだろう？）

（そうだね。ボクもまだ魔力回復できてないし、捕縛系の魔法かな？結界は比較的なのはと一緒にいられる僕が適任だろうし。）

捕縛系か…チェーンバインドとかだろうか？あれだったら使い方次第で攻撃にも利用できると思うんだけど…。その辺はできるよう

になってからユーノと相談かな。

「それにしてもなのはが居眠りなんてめずらしいわね。」

「なのはちゃん、何かあったの？」

いつの間にか俺がここにいるのは最早どうでもいいけど、シュミレーションのせいで先生に居眠りと勘違いされてしまったなのははアリサたちに心配されている。余程夢中になっていたらしい。

「にゃはは、バスの中でもちょっと話したけどフェレットさんのことでちょっと夜更かしをしてしまいまして。」

「なるほどね。ていうかそんなに気になってたわけ？」

「それは仕方ないよ、アリサちゃん。私も心配だったし。それにアリサちゃんもでしょ？」

「そ、そりゃあ私だってちょっとは気にしてたけど…」

「おお、アリサのツンデレだ。」

「誰がツンデレよ！」

「べ、別にアリサをツンデレって思ってるわけじゃないんだからね！」

「何よそれ！」

「アリサっぽく工夫してみた。」

「私はそんなバカっぽいしゃべり方しないわよ！」

「うふふ。」

「あはは。」

「すずかもなのはも笑ってないで否定しなさいよー！！！」

その気配を感じたのは放課後、自転車でなのはの家に向かっているときだった。俺は自転車で通学していたし、落ち着いてユーノを交えて話そうってことでこのとき別行動をしていた。

（浩樹！ジュエルシードが発動しちゃったみたいだ！）

すぐさまユーノかた念話が飛んでくる。

（わかってる。場所は？）

（えーくん、神社のほうだよ！）

なのはからも念話が飛んでくる。

（わかった。俺もすぐに向かう。現地で合流しよう！）

俺が神社に着いたとき、まさしくジュエルシードを取り込んだ生物がなのはに襲い掛かろうとしていた。なのはは俺よりもだいぶ神社に近い位置にいたようだ。原作ではケガをするような場面じゃなかったはずだけど…。

ったく！俺には特殊な力なんてないんだから、こんな面倒な場面に登場させるなよ！ぶっつけ本番だけどしかたない…。

術式…構成…展開…発動！

「捕縛、一式！」

なのはｓｉｄｅ

正直にいって私は腰が引けていた。恐かった。ユーノくんに起動パスワードを！って言われたけど、あんな長い言葉一度じゃ覚えられない。私は祈るようにギュッと目を瞑ってしまった。

「捕縛、一式！」

唐突にえーくんの声が聞こえて私はおそるおそる目を開くとそこには光の紐に縛られたさっきの凶悪そうな生物がいた。そしてその光の日もの先にはあーくんがいた。

「なのは！変身でも何でもいいから早くしてくれ！長くは持たない…クッ」

「そんな、まだ基本的なことしか教えてないのに…ってそうだ。なのは、今のうちにバリアジャケットを！」

「ええと、ええと…」

どうしよう、どうしようと焦ってしまってどうすればいいかわからなかった。すると、ユーノくんにもらった赤い宝石、レイジングハートが光りだした。

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．　Ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔ　ｕｐ』

「パスワードなしでレイジングハートを起動させた！？」

私は呆然としながら昨日の杖になったレイジングハートを見ていた。そのせいで忘れてしまっていた。えーくんが時間を稼いでくれていることに。

「すまん、なのは…もう限界…」

『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ．』

その犬のような生物はえーくんの紐を引きちぎり私に再び向かってきたが、レイジングハートのおかげでたすかったみたい。いつの間にか服も変わってるし。そしてまた、それは私に向かって飛び込んでいました。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』

「守ってくれたんだね、ありがとう。」

レイジングハートが光の盾でまた、私を守ってくれました。その盾にはじかれた犬さんがダメージを受けたように見えた私は無我夢中で体当たりをするように犬さんに突っ込みました。

「ええい！！」

Ｓｉｄｅｏｕｔ

なんだろう、あれは。なのはは防御魔法を維持しながら体当たりしようとしている。そして避けられる。これをさっきから繰り返している。

「なぁ、ユーノ。攻撃魔法を教えてないのは仕方ないにしても、何か違くない？それともあれって正しいの？」

「いや、ただの防御魔法…なんだけど…」

あ、当たった。しかも効いてるっぽい。

「もう！２人とも見てないで助けてよ！」

っとあまりにシュールな光景だったもんだからすっかり忘れていた。俺とユーノに限っては緊張感なんてどっかにいってたし。

「ユーノ、とりあえず、なのはの攻撃？が当たれば大丈夫だよな？」

「多分大丈夫だと思うけど…。」

俺はさっき成功した捕縛魔法を今度は落ち着いて再び仕掛ける。

「捕縛、一式！」

目の前に展開された魔方陣から対象を捕縛するための紐が飛び出す。それはそのまま犬を再度縛り上げた。

「よーし、今度こそ！えーい！」

「ウガァァァ！！」

「ふぅ、やっとまともに当たったよ。」

最初に怯えていたのが嘘のようなやりとげた表情のなのはだった。

「レイジングハート、封印お願い。」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．　Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ．　Ｓｅｔ　ｕｐ』

「リリカル・マジカル　ジュエルシードシリアル１６　封印！」

なのはは呪文を唱えて、ようやく封印が完了した。

「お疲れ様、なのは。」

「お疲れ。っていうかなのは、今日の授業中に戦闘シュミレーショ

ンしてたんじゃなかったのか？」

「むぅ…あ、慌ててたんだもん！とっても恐かったの！」

…だよな。なんだかんだ言ってもなのははまだ小学3年生。あんな凶暴なバケモノの襲われたら怯えて当然だ。俺もちょっと反省しないとな。

「悪かった。よく頑張ったな。すごかったよ。」

なでなで

「えへへ。」

う～ん、機会を見てなでなでしてるんだが、未だにポッと頬が赤くなる様子がない。うれしそうに撫でられてるだけだ。

あ、今回写真撮るの忘れてた…。

第3話　戦闘の基本、それはたいあたりである。（後書き）

さぁ、ストックが切れた。続きを書かねば。感想などあれば遠慮なくどうぞ。

第４話　できることからやっていきましょう！（前書き）

オリジナル設定と魔法が出てきます。

第４話　できることからやっていきましょう！

無事ジュエルシードも回収し、俺はなのはとユーノと一緒に自転車を押しながら帰っていた。２人乗りしないのかって？この海鳴市の人たちって良識的な人が多いけどこういうことには厳しいんだよ。だからこそともいえるわけだけど。それに多少運動してるとはいえ９歳ですよ？そんなことしたらなのはがケガをしちゃうかもしれないじゃないか。

「それにしてもえーくん、よく魔法使えたね？デバイスがないと難しいんでしょ？」

「あ～あれな、念話で基本的な構成に関しては教えてもらったんだ。んでもってユーノ、お前から見て俺の使った魔法に点数をつけるとしたらどれくらい？」

「うん、ぶっつけ本番でできたことには驚いたけど５０点くらいかな。」

「でもちゃんと魔法できてたよ？」

「なのはにも少し説明したけど、ボクたちが魔法を使うには基本的に４つの工程が必要なんだ。」

「うんうん。」

「術式、構成、展開、発動がその４つの工程になるわけなんだけど、これらを演算処理して最後にそのトリガーを引くことで起動するんだ。だから厳密にいえば６つの工程になるわけだね。」

「魔法のプログラムに関してそこまでは聞いたがなのはみたいにデバイスを使うとどうなるんだ？」

「その場合は構成と展開の過程が省略できるんだ。レイジングハートみたいなＡ・Ｉを持つインテリジェントデバイスだと自律発動が可能なんだけど、その自律処理の演算を超えるような魔法は使えないんだ。」

「基本的にデバイスは魔法術式を簡略化するためのものってことか？」

「一概にそういえるわけでもないんだけど、その認識でも問題ないと思うよ。」

「へぇ～レイジングハートってすごいんだね～。」

「話を戻すと浩樹の魔法が５０点だったのは構成と展開が甘く粗があったからなんだ。２回目のときは展開のほうだけ比較的よくなってたけどね。」

やっぱりそう簡単にはいかないもんだな。当然といえば当然なんだけど。俺が欲張って介入したんだから、できる限りのサポートしていかないと罪悪感が…。

というわけでユーノの魔法講座でした。

そして翠屋にとうちゃ～く。

「お母さん、ただいま～。」

「あら、なのは。おかえり～。浩樹くんと一緒だったの？」

「桃子さん、こんばんは。娘さんを返しにきました。それと士郎さんか恭也さんに聞きたいことが。」

俺はなのはの母である高町桃子さんを桃子さんと呼んでいる。だってこんな人おばさんだなんて呼べないもの。それにしても綺麗な人である。口説き落とせる自信なんてかけらもないが、それでも声をかけてみたいくらいだ。士郎さんがうらやましい。このお方も渋みのかかったイケメンである。桃子さんと同様に士郎さんと呼んでいる。美男美女のラブラブ夫婦とかすごぉ～～～～くうらやましい…。俺は特徴のあまりないノーマルな男だというのに。

「はい、コーヒー。」

士郎さんがコーヒーを持ってこちらにきてくれた。

「あの…お金とか持ってきてないんですけど。」

「サービスだよ。なのはの助けになってくれてるようだからね。」

この言葉から察するにちゃんと許可をもらえたようだ。にしてもよく許可したよね？危険だってことはユーノも説明してるはずなのに。

「俺が言うのも変ですけど、止めなかったんですか？危険なことか

もしれないのに。」

「そうだね。なのはが自分から言い出したってこともあるし、何より魔法相手だと俺たちは無力みたいだしね。自分の手でなのはを助けてあげられないのは悔しいけど。」

「そうですよね。」

「おいおい、君が暗くなってどうするんだい？そんなんじゃなのはの助けにはなれないぞ？」

「ですね。気合入りましたよ。」

「それはよかった。ところで俺に聞きたいことってなんだい？」

「そうでした。俺くらいの年齢の子どもが体を鍛えるのに簡単なメニューを組んでほしいんです。」

「それはいいけど、こういうのはすぐに成果が出るものではないよ。」

「わかってます。ただ、咄嗟のときに動けるようにしておきたくて…。」

俺の場合、今だと遠距離攻撃は実際に見てないからわからないけど、近接戦闘になればおそらくアウト。あれだけの才能を持ってしても最初はフェイトに勝てないし、アルフはユーノでも苦戦を強いられる。となれば俺は一撃、ワンパンで退場してしまいかねない。

「確かにそれなら、しないよりもやっておいたほうがいいかもしれ

ない。」

「あと、恭也さんたちの訓練も時々でもいいから見学させてほしいんですけど。」

「ああ、構わないよ。いつでもおいで。」

「ありがとうございます。コーヒーご馳走様でした。」

（なのは、ユーノ。俺はそろそろ帰るよ。）

士郎さんにお礼を言い、ユーノと魔法の勉強中だったなのはに念話で帰ることを告げて、俺は翠屋を後にした。

それから数日。俺はユーノに魔法の実地訓練をしてもらっていた。今日、なのははアリサたちと遊んでいる。ユーノもだいぶ魔力が回復してきたようでジュエルシードが発動して最悪、なのはが出遅れても時間はかせげる。相手次第では封印も可能かもしれない。君たちの日常をできるだけ壊したくないと言ったのはユーノだった。最初は渋っていたなのはもユーノの意見に俺も賛成したことによりそれに従った。

「そう、集中して。そして強くイメージするんだ。もう演算は問題ないから、あとはしっかりと作り上げて。」

「……捕縛…二式！」

俺の作った魔法陣から青い光の鎖が飛び出し、木に巻きついた。この捕縛二式はようするにユーノのチェーンバインドの俺バージョンである。一式との違いはあれから改良し、単体の相手を捕縛するものになった。二式は複数の相手を拘束することができる。一式にメリットがないように見えるが相手が単体であることから発動が早く、上達すれば気づかれずに使うことができるらしい。

「うん、これなら合格点かな。なのはとは方向性が違うけど浩樹もけっこう才能あるんじゃない？」

「ははは、まさか。単に俺が数学的な知識が人より多かっただけだ。」

そっかぁ、ユーノからしたら前世の知識があるってだけでチートだもんな。教えてないけど。

「そのなのはのほうはどうよ？」

「うん、正直にいって天才って言えるかもね。彼女の魔法の組み上げ方は独自のものだと思う。」

「俺はまた防御魔法すらできてないのにな。」

「そういえば浩樹はなんで捕縛・拘束系の魔法から覚えようと思ったの？」

「ああ、初心者の防御魔法より使い方の幅が広いからだ。」

「というと？」

「今の俺が防御魔法使ったものおそらくたいしたものにならない。同じように攻撃もな。そしてジュエルシードはいつ発動するかわからない。だったら罠としても利用できて、なのはのサポートをしやすい魔法がいいんじゃないかと思ってね。」

「なるほど。魔法に対して先入観がない分、使い方はボクより上手かも。何か面白い使い方を思いついたら教えてね。ボクも斬新な発想を試してみたいし。」

正直フェイトやアルフに攻撃なんてしたくない。それにしてもこの捕縛魔法って女性に使うのってちょっとドキドキしないかい？いや、特に深い意味はないんだけど…。

とまぁ、そんな夕暮れ時の会話だったとさ。土曜だったからいつもより練習に時間を割けた。幸いジュエルシードも発動しなかったみたいだし。にしてもそろそろ、飛行魔法を覚えねば…。フェイトとなのはが戦うころまでには習得しないと写真が！

柳由利ｓｉｄｅ

息子の浩樹が最近帰りが遅くなった。おかげで息子とのスキンシップが足りていないように感じる。

「まぁ、友達がいるのはいいことなんだけど…。」

妙に大人びた考えをする子だったためかあまり友達がおらず、学校が終わるとすぐに家に帰ってきていた。そこが少し心配だったが、

あの子があんなこと言い出したときには安心して、そして驚いた。

「それにしても魔法…ねぇ～。本当にそんなものがあるなんて思わなかったわ。」

なんでも海鳴市周辺に魔法のエネルギー結晶体というものが事故で落ちてきたらしい。息子と高町さんの娘さん、なのはちゃんのはその魔法の素質があるらしく、危険が及ばないように協力してそれを回収したいというのだ。それも”友達”と一緒に。

「お母さんは応援してるからね。でももうちょっとお母さんに構ってほしいな。」

明日は夫も仕事だし…。遠出ってほどでもないけどお母さんとの時間を作ってもらうためにもちょっとお出かけでもしてみましょう。

「ただいま～。」

あの子も帰ってきたみたい。早速話してみましょう。お友達もいいけどお母さんも大切にね？

第４話　できることからやっていきましょう！（後書き）

説明回でした。う～ん、主人公の力のさじ加減が難しい…。

第5話　別に撮ってしまっても構わんのだろう？（前書き）

前半、趣味入ります。

第5話　別に撮ってしまっても構わんのだろう？

昨日、俺が家に帰り唐突にお母様に告げられた。

「浩樹！明日の午前中はお母さんとツーリングに行きましょう！」

何故午前中だけなのかというと海鳴市周辺を軽く走るだけらしい。海沿いの町だけあって走り抜ける感覚はとてもいいものである。まぁ俺は後ろに乗ってるだけだけど。

「それじゃあ、朝ごはんも食べたことだし行きましょうか？」

皮のライダースジャケットにヒザパット入りの皮パンツを着込んだお母様とガレージに向かいバイクを選ぶ。

「今日はどれで行く？ってその格好だと…」

「ええ、今日はＳＳ（スーパースポーツ）で行くわよ！」

家には現在5台のバイクがある。両親それぞれのＳＳにネイキッドも2台、そしてハーレー。お母様はハーレーには乗らない。よって親父の専用車だ。ちなみに車は一台。中型はネイキッド一台だが、俺が乗れる年齢になるころにはおそらく入れ替わってるだろう。

「ちょっと責めるわよ。いつも以上にしっかりつかまりなさい。」

うん、わかってた。ヒザパット入りの時点で…。でもお母様、手加減してね？タンデムでウィーリーとかジャックナイフとかやめてね？

「私の前を走ることは許さないわ！」

「私のライディングを見て出直してきなさい！」

「私は浩樹と風になのよぉぉぉぉ！！！」

お母様はハイテンションで無双していた。たまにはっちゃけたくなるらしい。いつもはもっと落ち着いた美しいお母様ですよ？

そしてちょっと早めのお昼でうどんを食べることに。ここのうどんは隠れた名店…だと思っていたら、いつの間にかネットでわりと評判になっていたお店である。そのため海鳴に訪れたライダーはここに寄ることが多いようで駐車、駐輪場にはバイクも多く停まっていた。

「ほぉ、息子さんとタンデムツーリングですか。いいですね～。」

「ええ、主人もバイクが好きなもので。休みが合えば一緒に来られたんですけどね。」

「一家で共通の趣味なんてうらやましい限りですよ。私は家内に内緒でバイクを買ったんですが、すぐにバレまして、かなり怒鳴られてしまいました。」

「ちゃんと奥さんに相談してからにしないと…そちらのワンちゃん

も不安になりますよ？」

「おじさん！この犬と一緒に写真撮ってもいい？」

「そうしますよ。もちろんだ、なんだったらおじさんのバイクに跨っていいぞ。」

犬と一緒にツーリングに来ていたおじさんに撮影許可をもらい、バイクに跨りながら犬を抱いた写真を撮ってもらった。愛犬と一緒にツーリングかぁ。こういう人もいるんだな～。パシャ

「では、私はそろそろ行きます。またどこかでお会いしましょう。」

そういっておじさんはバイクのエンジンをかけた。彼の犬もタンデムシートに付けられた箱から顔を出し、尻尾を振っている。ん？顔を出し？

ブォンブォン、ブォーーーン

「お、おじさん！犬！犬ぅぅぅぅ！！！」

と、俺は犬を心配したのだが、おじさんの後ろでその犬はしっかりとバランスを取ったままおじさんと走り抜けていった。す、すごい人（犬含め）もいるんだなぁ…。

こういう出会いもツーリングの醍醐味である。そして帰り道…

「お、お母様！倒れる、倒れるって！」

「ふふふ。ちょっと膝すりしてくらいで恐がらないの。」

お母様はタンデムの乗り方を俺にしっかり教え込んでいるため、わざと俺にこんないじわるをする。みんなも誰かとタンデムツーリングするときは乗り方を勉強しておこうね。変なバランスの取り方をしてるとこけちゃうぞ♪

「はい、着いたわよ。高町さんたちに迷惑かけないようにするのよ？」

お母様とのツーリングも終わり、俺はプールに来ていた。なんでもなのははアリサやすずかたちとここに遊びにきているらしい。行く予定はなかったのだが美由紀さんやすずかのお姉さんも来ているらしく、そこに釣られて俺も遅れて参加することにした。メールしてみると、まだ来てからあまり時間は経ってないらしい。

さて、水着もレンタルで借りることができたし、携帯も準備バッチリだ。

「あ、やっときたわね。遅いわよ。」

「えーくん、いらっしゃ～い。」

「こんにちは。お母さんとのお出かけは楽しかった？」

3人娘に出迎えられた。上からアリサ、なのは、すずかである。うむ。実にかわいらしい水着姿である。この調子でどんどん綺麗になっていってほしいね。パシャ

「あ！またアンタは勝手に写真撮って！ちゃんと許可をとりなさいよ！」

「無断撮影は感心しないな？せめて一声かけないと。」

「はっはー！不意打ちだから面白い写真が撮れるんじゃないか！」

「ずるいよ、えーくん！」

そんなことを言いながらも俺はパシャパシャ写真を撮っていく。すずかが若干恐いが、そのうち貢物を献上してご機嫌を取ろう。アリサは不機嫌そうな顔をしながらもさりげなく？ポーズをとっているあたり問題はないだろう。ちょっと照れたその様子が子どもらしくてかわいく見える。

ここで解説しよう！俺の持ってるこの携帯、実は完全防水な上に昨今のデジカメ並みによく撮れるカメラ機能を搭載しているのだ！勝手な改造なのだが、これには協力者がいる。

「すずかたちばかり撮ってないでお姉さんたちも撮ってみない？」

「被写体もたまには変えてみるものだよ？」

お姉さん，ｓの美由紀さんとそして改造携帯の協力者ことすずかのお姉さんの忍さんが登場した。私、美女は大好物である。

「やだなぁ、好物は後からって決まってるじゃないですか～。良い水着です。ドキドキしています。」

「あら、じゃあもっとサービスしてあげよっか？」

「恭也さんに殺されかねないので、え、遠慮します。（ドキドキ」

「あはは、いくら恭也でも子ども相手にそんなことするわけないじゃない。」

そうかもしれないが、創作での恭也さんを見てると…ガクガクブルブル。撮りたいのは山々なんですけどね。

「え～、恭ちゃん結構容赦ないよ？私もちょっとからかっただけなのに訓練倍とかされるし！」パシャ

「私はダメなのに美由紀ちゃんは撮っちゃうんだ？」

うん、山々だったんだよ。ちょっとむくれた美由紀さんが可愛かったんだ。仕方ないじゃないか！え？水着関係ないって？それも含めてに決まってるじゃん。

ひ、一人だけ仲間はずれになんてできないからもうし、仕方ないよね？恭也さんに写真献上しればきっと許してくれるよ！決して！けぇ～っして！免罪符にしたわけではない。

「で、では撮らせていただきます。（ドキドキ」

俺も顔を若干赤くしながら2人にも携帯のカメラを向け写真を撮っていく。　パシャ　…ん？すずかが俺に携帯を向けている。

「えへ、仕返しだよ♪」

…つまりお姉さんたちにちょっとドキドキした俺の表情が撮られてしまった…と？まさかすずかの携帯も改造済みなのか？

「あ～、えーくんちょっとエッチな顔になってるぅ～。」

「すずか、私の携帯に送っておいてね。」

なのはが俺を笑いながらからかい、アリサは意地の悪い笑みを浮かべてすずかにお願いしている。チィ！人を呪わば、穴二つとはこのことか！俺がスーパーイケメンオリ主だったら嫉妬してくれるところなのに…。あはは～忘れてた。俺って男子生徒Ａだったっけ。

「すずかさん？そのデータ消去していただくわけには…」

「だぁ～め♪」

心底楽しそうな表情で断られた…。

俺がパシャパシャやったり、すずかと美由紀さんがガチで競泳勝負したり、アリサがなのはに泳ぎを教えたりして楽しい時間を過ごした。そして女性陣がキャッキャやってる様を写真に撮っている中それは起こった。

（浩樹！もうプールにきてる！？）

急なユーノからの念話。それはそうだろう目の前でこんなことに

なってるんだから。

「「「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」」」

プールの水がうねうねを動き、巨大なスライムみたいなのが現れた。女性を狙っているのかスライムが出した触手のようなものに絡め取られている。パシャパシャ

「えーくん！こんなときになにやってるの！？」

「あ、いや、ゴメン…つい…。」

すでにバリアジャケット姿のなのはに怒られてしまった。触手はなんとか防いだらしい。掴まった一般の女性たちはあのスライムの力なのかショックを受けてしまったのか全員気絶している。

「2人とも平気？」

ユーノが息を切らしながら走ってきた。パシャってた俺とは大違いである。そしてすぐに戦闘がはじまった。

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅ．』

「シュート！」

なのはは空を飛び、魔法で光の玉を生成し、攻撃をしかける。俺が練習してる間に随分上達したようだ。しかし、コントロールや威力は十分なのだろうが、相性が悪くスライムは攻撃が当たってもすぐに再生する。

対抗策として思いつくのは…再生速度が追いつかないほどの弾幕攻撃、広範囲の魔法攻撃による殲滅、バインドでギチギチに拘束して封印のみを狙った一点突破。まだ掴まってる人がいる以上前２つは却下だな。となると――

「浩樹！バインドで相手の動きを止めよう！」

ユーノも同じ考えに至ったらしく、相手の動きを止めるように提案してくる。

「りょ～かいっと。捕縛、二式！」「チェーンバインド！」

俺とユーノが繰り出した青と緑の無数の鎖で魔力をもって縛り上げる。ガチガチに拘束するとなのははすぐさま、封印に移行した。

「レイジングハート！」

『対象検索…発見。封印します。Ｓｅａｌｉｎｇ ｍｏｄｅ． Ｓｅｔ ｕｐ．』

「リリカルマジカル・ジュエルシード シリアル３、封印！」パシャ

『Ｒｅｃｅｉｐｔ． ＮＯ．３』

なんとか封印を完了させることに成功した。ユーノと共同ではあるが、実践での魔法が成功して安心した。

「ユーノくんから聞いてはいたけど、えーくんもちゃんと魔法使えるようになったね。前よりも全然すごいよ！」

「なのはのほうが全然すごかっただろうが。今回は相性が悪かっただけだし。んで、はいチーズ。」パシャ

「んにゃ！？いきなり何！？」

「どうだ？よく撮れてるだろう？写真の題名は魔法少女リリカルなのはだ。」

「そんな恥ずかしい題名はやめて～～！」

「浩樹はマイペースだね…。」

ともかく、これでジュエルシードは合計４個集まった。さて、そろそろだとは思うんだけどフェイトが出てくるのっていつだったっけ？

「あれ……私…ん？」パシャ

「あ、おはようアリサ。」

「……私、どうしたんだっけ？え？」パシャ

「すずかもおはようさん。」

ユーノが結界をといた後、つかまれていた全員をプールサイドに運んでそのまま寝かせた。俺たちのメンツでは美由紀さんと忍さん

はすぐに目を覚ました。そこで俺は思いついた。寝顔（気絶）が撮れるじゃないか！と。そして俺は実行に移したというわけさ。

ん？なのはは止めなかったのかって？そんなの「自分ばっかり撮られて不公平だと思わないか？」と強引に納得させたよ。

……ゴメン、嘘。それじゃあ止まらなかったから面白がったお姉さん，ｓが抑えてくれたんです。

「アンタ、何してたわけ？」「えーくん、何してたのかな？」

後ろにゴゴゴッ！って聞こえてきそうな雰囲気だが今回の俺には通用しないぜ！

「美由紀さーん、忍さーん！助けて～！」

「……」

「……」

「あ、あれ？おかしいな…。あの２人どうしたんだろうね～？」

「「覚悟は…いい？」」

「ひぃぃぃ！こうなったら、すたこらさっさだぜぃ！」

ひろきはにげだした。

しかし、すずかにあしばらいをかけられた。

ひろきはころんでしまった。

せなかにありさがのしかかった。

「あ、謝るから！お願い許して！そ、そこだけは……アッ―！」

このときお姉ちゃん，ｓは笑いながらお仕置きを受けてる俺の写真を撮っていたらしい。あ、悪魔め…。

帰りは月村邸の車。そこでもお仕置きは続いた。判明してしまった俺の弱点、わき腹を3人娘がトゥントゥンしてきたのだ。家に着くとようやく解放されたが、容赦のない娘さんたちだった。

「ただいまー。」

玄関を開け、声をかけたところで気がついた。おや？見慣れない靴があるな。お客さん？

「浩樹お帰り。プールは楽しかった？」

「それは楽しかったけど…。誰か来てるの？」

「それが、あなたをプールまで連れて行って、その帰りに今にも倒れそうな女の子が家の近くにいたものだから介抱してあげてるのよ。」

「あれま、大丈夫なの？」

「随分落ち着いたみたい。寝てると思うけどちょっと様子を見てきてくれる？」

「うい、了解です。」

俺は客間に向かうと静かにドアを開けた。そしてゆっくりと室内に入り、寝ている女の子の様子を見るために顔をかく…に…ん…した。

えーと…そ、そうだ、とりあえず……パシャ……ふぅ

俺は小さく驚きの声を上げた。

「ななななな、なんでフェイトがウチに！？」

そこには金髪の美少女が眠っていたのだった。

第5話　別に撮ってしまっても構わんのだろう？（後書き）

調子に乗ってフェイトを出してしまった…ｏｒｚ

でも、このまま進みます。

第6話　”柳”、初ニコポで大活躍！（前書き）

なかなか話が進まない…。

第6話　”柳”、初ニコポで大活躍！

フェイトｓｉｄｅ

「ねぇ、フェイトぉ…そんな体じゃ無理だって！熱だってあるんだし、家に戻ろうよ、ね？」

「ハァ、ハァ。ゴメン…ね？それでも母さんに早く母さんに持っていってあげないと…。」

アルフは私の体を本気で心配してくれてるのはわかる。それでも母さんは急いでジュエルシードを集めてきてほしいと私にお願いしてくれた。私を頼ってくれたんだ。その”期待”に応えるためにもこれくらいじゃ休んでなんていられない。

「母さん…待っててね。私が母さんのために…頑張るから…。」

今の状態じゃ広域探査はできないし、アルフに何度も自分は大丈夫だからと言って別の場所を探索してもらおうとしたけど、その度に「今のフェイトに一人で探させるなんてできない。」と言って、私に付き添っている。こんなときに回収を進められないこの体にもどかしさを覚える。

「その子、かなり辛そうに歩いてるけど大丈夫？それとも病院に向かってる最中かしら？」

唐突に聞き覚えのない声が聞こえた。しゃがみこんで私に視線を合わせてくる。

「大…丈夫…で「――薬か何か持ってないかい！？風邪みたいなんだけど、どうすればいいかわかんないんだよ！」……アル…フ？」

アルフが私の声を遮るように声をかけてきた女性に話しかける。やめて、余計なことを――。

「何か事情でもあるのかしら。それだったら家で休んでいきなさいな。ここからすぐのところなの。」

「フェイト、そうさせてもらおう？少しくらい休んでも平気だって。あの鬼バ、じゃなかった。プレシアだってフェイトがそんな状態だったら心配するよ！」

「ダ、メ…」

アルフの提案を断ろうとしたが、私の意識はそこで途切れた。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ由利

私は倒れこんできた目の前の少女を抱きとめた。するとすぐわかるほどの熱が体から伝わってくる。どんな理由かはわからなかったけど、たいぶ無茶をしたようだ。

「っと、う～ん、やっぱり結構、熱があるみたいね。さっき言ったように家で看病してあげたいんだけどかまわないかしら？」

「むしろ、こっちからお願いするよ。すぐ無茶する子なんだ。」

「頑張り屋さんなのね。私は柳由利っていうの。あなたたちのお名前は？」

「あたしはアルフ、でこっちの子がフェイト。」

「アルフちゃんとフェイトちゃんね。よろしくね。それじゃ、ちょっとバイク取ってくるから待っててもらえる？」

「ああ、すまないね。わざわざ…。」

「ふふ、気にしないで。」

申し訳なさそうに言う、アルフちゃんに苦笑しつつ、私はすぐ傍に停めてあったバイクを押してくる。ん…押して歩くにはちょっと重いけど、本当にすぐだし、大丈夫だろう。

「あ、あの…重そうだし、あたしがそっちを運ぼうか？」

「あら、アルフちゃんはやさしいのね。でも、これ結構重いわよ？」

私のバイクはこれでも２００ｋｇ弱の重さがある。成人男性でもちょっとした重さだ。

「これでも力にはちょいと自信があるんだよ。」

そういってフェイトちゃんを背負いながら得意げに力瘤をみせる彼女はとってもかわいいわね。フェイトちゃんもかわいい子よね。息子もいいけど、娘もほしくなっちゃう。

「それじゃあ、お願いしちゃおうかな？」

「ああ、任せとくれよ。んじゃフェイトを。」

代わりに私がフェイトちゃんを背負い、アルフちゃんが私のバイクを押して、彼女たちを自宅まで案内した。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

どうしようどうしよう…俺は混乱している。とっても混乱している。え？え？なんでお母様と？そうだ、こういうときは選択肢を出せばいいんだ。

ええと、今俺がすべきことは…

1、フェイトとにゃんにゃんする。

2、フェイトとチョメチョメする。

3、フェイトとい・い・こ・と☆する。

……ダメだ。頭が沸いてるとしか思えない。大人フェイトならともかく、少女だぞ？そんなことしたいならロリコンになって出直して来い！よ、よし、落ち着いて考えよう。大丈夫、俺は混乱してるだけだ。

ええと、俺が今すべきことは…

1、とりあえず、逃げる。

2、ここから避難する。

3、戦略的撤退

っておいいぃぃぃ！逃げてどうする！頑張れ、俺！そう、俺はやればできる子だ！お母様もそう言ってた。俺はできる男子生徒Ａだ！

ええと、今俺がすべきことは…

1、フェイトにトゥントゥォンする。

2、フェイトにふにふにする。

3、フェイトにパシャパシャする。

…いい加減にしろよ、俺。何がしたいんだ。最後のやつとかもうやっただろ。いや、そういう問題じゃない。

思わず自分の低脳さに頭を抱えてしまう。バカだろ、俺…。

「あ、あれ？私…いったい…ってここは！？」

「おぉ？」

「あなたはだ、誰ですか！」

「え？えぇ？」

「そういえば、アルフもいない…。アルフをどうしたんですか！」

「ど、どうしたとかいわれても…」

やばい、混乱してる状態でさらに混乱してきた。まずは状況を整理してみよう。

俺、家に帰る　↓　お母様に保護した女の子の様子を確認してくるように言われる　↓　その女の子はフェイトだった　↓　混乱しているとフェイトは目を覚ました　↓　何か知らんが怒鳴られる

うん、わけがわからない。俺の混乱が深まる中、救いの神が現れた。

「浩樹～、フェイトちゃんの様子は…って起きてたのね。気分はどう？」

「もう、大丈…あれ？」

立ち上がろうとして、バランスを崩し、ベッドに倒れこむ。

「もう、無理しちゃだめよ。」

気遣うように、またフェイトを寝かせるお母様。この場で状況を理解しているのはお母様だけのようである。

「あ、あの！アルフはどこに？」

「ああ、アルフちゃんならちょっと薬を買いに行ってもらってるわ。ウチにも常備薬はあるけど、苦いのしか置いてなくって。」

「そう…だったんですか。」

そうだったのか…。

「あんまりアルフちゃんに心配かけすぎないようにね？あなたが倒れたときすごく心配そうにしてたんだから。彼女が大切な人ならなおさら、ね？」

「は、はい…。（ポッ」

な！？原作キャラに初めてニコポさせたのがお母様だとぉ！？さ、さすがはお母様だ。まさかニコポスキルを持ってるなんて思わなかった。これに親父も惚れたのか？

「フェイト～、調子はどうだい？ってあれ？あんたは誰だい？」

薬を買ってもどってきたらしいアルフが俺に尋ねた。

「俺は柳浩樹。そっちはえっと…アルフでいいの？」

「私の可愛い息子よ♪」

お母様がそう補足してくれた。

「なんで知って…ってそうか、由利に聞いたんだね。そうだよ。んで、そっちがフェイト。」

「ふぇ、フェイトです。えっとヒロキ？さっきはゴメンね。なんだか勘違いしちゃったみたいで。」

「誤解が解けてよかった。ちょっと？混乱しちゃったから。もう気にしなくていいよ。（ニコッ」

「ありがとう。」

うん、やっぱりダメだ。ノーマルな反応だ。今度お母様にニコポのコツを教えてもらおう。

「あと、ヒロキのお母さんもご迷惑をかけてすみませんでした。」

「あら、礼儀正しい子ね。でも、私はすみませんよりもありがとうのほうがほしいな。あと、私の名前は由利よ。」

「あ、ありがとうございます。ユリさん。」

「よろしい。それで食欲はあるかしら？卵粥を作ってきたんだけど。」

「はい。大丈夫です。」

「よかったわ。あ、私が食べさせてあげましょうか？」

「自分で食べれるので…。」

「ふふふ、そう？足りなくなったら言ってね。アルフちゃんはどうする？大丈夫だったら夕飯用意してあげるけど。」

「いいのかい？そこまでしてもらって。」

「遠慮しないの。これでも料理にはちょっと自信があるのよ？」

「ホントに恩にきるよ。フェイトを助けてもらった上に食事までもらえるなんて。」

「どういたしまして。それじゃ、もう少しでできるから待っててね。」

上機嫌でお母様はキッチンに戻っていった。なんか俺、めっちゃ空気じゃね？正直、俺、いらない子？考えたらちょっと切なくなってきちゃった。おいしそうにおかゆをはふはふ言いながら食べてるフェイトみて和むとしよう。パシャ

「え、何？」

カメラの音に気づいたフェイトが驚いて顔を上げた。

「なんか、おいしそうに食べてるフェイトがかわいらしくて。」

「だろう？ウチのフェイトは本当にかわいいんだから！」

使い魔さんのほうが食いついてきた。本当にご主人様大好きなんだなぁ。

「よし、一緒に撮ってあげよう、って思うんだけどどうだろう？」

「写真、かな？それくらいだったら。」

「あたしはフェイトに従うよ。」

「はい、チーズ。」

あ、なんかこうやって写真撮ったのって家族を除けば初めてかもしれない。撮った写真を確認してみると、お～いいねぇ。ノリノリの笑顔でピースしてるアルフにちょっと恥ずかしそうな表情のフェイト。うん、初々しいくて大変よろしい。

「ありがとう。俺も自室に戻るからゆっくりしててね。」

早速パソコンにこのデータを入れねば！

それから夕飯は客間で取った。フェイトのことはいいのか、と聞いたら今一人にするのは寂しいと思うからとのお母様からの返答。泊まっていければよかったんだろうけど、用事があるとのことでお母様も無理には引き止めなかった。

食事中はアルフがあんたはいい母親持ったねぇとしきりに言っていた。料理も口に合ったらしく、アルフに加えフェイトの中でお母様株急上昇してるみたいだった。俺の話？出るわけないじゃないか、ハッハッハ。

食事のあと、少し休憩してフェイトの体調はだいぶよくなり、２人がそろそろ帰ると言い出した。

「ごめんなさいね、車があれば送ってあげたかったんだけど。」

「いえ、ここまでしてくれただけで十分です。本当にありがとうございました。」

「フェイトの言うとおりだよ。これ以上されちゃったらホントに申し訳ないって。」

恐縮しきって感謝するフェイトとアルフ。さて、超空気だった俺もちょっと存在感を出しておこう。

「2人ともこれ、持ってってくれ。」

そういって俺は数枚の写真を取り出す。それは食事前に撮った写真だった。2人と会話せずに自室に戻ったのは写真プリントのインクを探すためだったのだ。タイミング悪く、インクが切れてて予備を探すのに若干苦労してしまった。

「わぁ…。ありがとうヒロキ。」

「さすが由利の子どもだね。感謝するよ。」

「あらあら。フェイトちゃん、アルフちゃん、また何かあったら頼っていいからね？」

「「はい」」

ペコリと頭を下げて2人は帰っていった。

「いい子たちだったわねぇ～。お母さん、娘がほしくなってきたわ。」

ウチのお母様、大活躍であったとさ。

第6話　”柳”、初ニコポで大活躍！（後書き）

こんな主人公で大丈夫…か？

第7話　俺にもカッコつけさせてください。（前書き）

楽しんでくだせぇ。

第7話　俺にもカッコつけさせてください。

ツーリングにプール、そしてフェイトたちの初対面という目まぐるしい日から数日。その間、なのはとユーノはジュエルシードを1つ手に入れていた。

何故、俺が入ってないのかって？いいかい、お前さんたち。勘違いしちゃあいけねぇ。俺はオリ主じゃないんだ。

よく考えるんだ。オリ主ってのは自分の力でたいていなんとかしちゃうだろう？ああ、わかってる。なのはやフェイトとしっかり知り合ったじゃんと言いたいんだな？よし、わかった。時間があるなら聞いてくれ俺の言い訳だ。

1、転生しちゃった♪　↓　持っていたのはうろ覚えな原作知識に申し訳程度の魔力

2、なのはとお友達　↓　いかにもついで

3、ユーノと出会った　↓　目的は魔法少女の写真

4、フェイトと出会った　↓　帰ったら家にいた

どうだ？コレがこの世界における俺だ。そして俺は考えた。じゃあ俺はなんなのか。悩み、苦しみ、俺は葛藤した。そして俺は気づいてしまった。俺はという存在に…。

俺は”モブ主”だ！

聞いたことあるか？モブ主！…あったらゴメンなさい。俺はその程度の人間なのさ…。身の程をわきまえてるんだぁぁぁぁぁぁ！！！

あ、お母様。ちょっとニコポのコツ教えてくんない？

「士郎さんが監督してるサッカーチームの試合ですか？」

俺の戯言をおいといて、高町家の道場で”回避”の練習を終えた俺になのはの父、士郎さんは娘も見学するみたいだから来てみないか、との誘いを受けた。

「どうだろう？最近話してて改めて思ったんだが、君は年齢以上にリスク管理に重きをおいて動いているようだからね。俺のチームを見たらどう思うかちょっと興味が出たんだ。」

「そう感じました？」

「まぁ、決定的なのは今の練習だね。キミの年頃というか若い人というのは攻撃する技術を覚えたがる。それに対し、キミは回避だけここで練習している。それは何故だい？」

「俺みたいな子どもは弱いですから。なのはは魔法で硬い守りを作

れますが、俺は全然だめなんで攻撃を受けるわけにはいかないんです。当たらないためにはかわすことが必要だと思ったからですけど。」

それに加え、速さに定評のあるフェイトを相手にする可能性だってある。速さに慣れるためには恭也さんは非常にいい教材なのだ。

「そう、キミの考えるリスク管理は武道はもちろん、スポーツにおいても重要なんだ。だからこそなんだよ。時間があればで構わないよ。」

「まぁ、考えておきます。」

そして翌日。俺が試合を見にきてみると、思ってたより見に来た人が多いようだ。特に女の子。

「ういーっす。今、どんなかんじ？」

「えーくん、えっとね、まだ同点だよ。」

俺の問いかけになのはがすぐさま答えてくれた。3人とも見に来ているが気になるやつでもいるのだろうか？

「えーくんは写真撮らないの？」

「小学生の、しかも男の写真なんて撮ってもなぁ。気になるあの子の写真がほしいって言えば撮らないこともないけど？」

「そんな写真より私はえーくんの困ってる姿の写真がもっとほしいかな。ね、アリサちゃん？」

「そうね、プールの写真はホントに笑ったわ。私も忍さんに頼んで携帯のカメラ性能上げてもらおうかしら。」

「そ、そういう写真よくないよぉ～。」

「でもなのはもほしいんじゃないの？」

「えぇ！？そんそことは…でもえーくん、私たちの変な写真ばっかり撮るし…」

「ククク、ようやく君たちも俺の魅力に気づいてしまったようだな。」

「それはない。」「その冗談はあんまりおもしろくないかな。」「おもしろいってこと？」

なのはの純真さが心に染み渡るぜ…。どうかそのままのキミでいてくれ。おいちゃん、応援してるから。

「あ、えーくん。これお姉ちゃんが渡してって言ってたんだけど。」

そういってすずかはとある箱を差し出してきた。

こ、これは！？もしかしてあれがもうできたのか！さっすが忍さん職人は仕事が早いぜ！よし、忍さん。鍛錬中の恭也さんを連れて行って好きなだけ食っていいぞ。これが手に入れば、俺の心も一気

に回復するってもんだ。

「今度は何頼んだのよ。」

「それは秘密さ♪」

アリサが俺にさらに追求しようとしたところでピピィー！というホイッスルの音が鳴り響いた。グラウンドに目を向けてみると負傷者がでたようだ。負傷者の周りに士郎さん含め、チームメイトが駆け寄る。そして士郎さんはキョロキョロと視線をめぐらし、その視線をこちらでピタリと止めた。そのままこっちに駆け寄ってくる。

ふっ、仕方がないな。俺の出番か。さすがに小学生相手に負ける俺じゃないぜ。

「すずかちゃん、ちょっと代わりに試合に出てみないかい？」

ってすずかぁぁぁぁ！？

ここって俺の出番じゃないの？ほら、ここで俺が華麗に活躍してさ……ゴメン、なんでもないよ。スズカー、ガンバッテー。くすん

「あの、私、女の子なんですけど。」

「もちろんそれはわかってるんだけどね。あの子たちがすずかちゃんを指名してね。」

あーそっか。すずか体育で大活躍してるもんな。それに器用だし。アリサや本人の雰囲気もあってか、あまり昼休みにやるスポーツには誘われてないけど。

「それに敵さんのチームも認めてくれてるんだよ。」

「わかりました。やってみます。」

「すずか、敵に目にものをみせてやりなさい！」

「すずかちゃん、頑張ってね。」

ま、まぁいいさ。俺って、アレだ。秘密兵器って感じじゃん？きっと俺は存在を明らかにするわけにはいかないんだよ。ピンチのときにこそ出番っていうか。…あぁ、そうさ強がってみただけさ。悪いか？

（浩樹、ちょっと出たかったでしょ？）

（い、いいえ？全く以ってそんなことございませんが？）

なのはの肩で一緒に試合を見ていたユーノが俺に念話を飛ばしてくる。

（わかりやすい反応だね、浩樹は。それにしてもみんな必死なのに楽しそうだね。活気もあるし。）

（ユーノの見てきた世界にもこういうスポーツあっただろ？だったら…）

（あるにはあるけど、魔法を使った競技がやっぱり流行ってるかな。派手さもあるからね。）

そうだったのか。ちょっと意外だった。魔法を使えない人はこういう競技に目がいくものだと思ってたし。

（それにそこで活躍した人には管理局からスカウトとかきたりするからね。かなり高待遇で。）

それで競技人口が減るっていうわけか。そう聞けば納得だ。確か管理局って慢性的な人手不足みたいだし、スポーツやらせるくらいならこっちで働けってことだろう。そういう点に関しては否定的感情を持たざるを得ないな。いろいろ理由はあるんだろうけど釈然としない。

俺がユーノと会話してる間にも、試合に出たすずかの活躍は凄まじかった。技術はちょっとうまいくらいなのだが、スピードが違う。このくらいのレベルだったら割とスピードだけでもなんとかなるもので実際にゴールも決めていた。パシャ

「すずかー、その調子ー！！」パシャ

「すずかちゃん、すごいすごい。」パシャ

サッカーを頑張ってるすずかもいいけど、応援しているアリサとなのはもいい被写体である。何より表情がいい。

ピピーッ！

試合終了のホイッスルが鳴り、見事、翠屋ＪＦＣが勝利したよう

だ。試合結果は３－０。大勝利といってもいい結果だろう。

それから翠屋で祝勝会をすることになった。俺も翠屋のスイーツがタダで食べられることもあって、喜んで参加した。

「「「「「カンパーイ！！」」」」」

今回のＭＶＰはキーパーの奴らしい。みんなにもてはやされてはしゃいでいる。となりに女の子を座らせながら。

しかもピタリとくっついている。その子たちの会話を聞いていみると――

「すごくカッコよかったよ！やっぱりすごいなぁ～。」

「調子がよかっただけだって。俺だけで勝ったわけじゃないし。」

「そうかもしれないけど、私にとってはキミが一番活躍してたの！」

「そ、そう？照れるなぁ。」

おのれ、キーパー。俺は前世でも今世でもそんな会話したことないぞ！何が照れるなぁだよ！けっ

そんな感じで俺が無責任に嫉妬していると突然わき腹をつつかれた。

「うひゃう！ってなのは？いきなりわき腹はビックリするんだけど。」

「ご、ごめん、ちょっと気になることが…」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ、ちょっと…」

（2人とも思念通話で話せばいいじゃないか。）

（あ、忘れてた。えへへ、そうだった。念話があったよね。）

（で、気になることって？）

（うん、あのキーパーの男の子なんだけど、なんか変な感じがするんだ。）

（おぉ…ついになのはにも恋の季節が？）

（違うの！そうじゃなくって、ええとなんていえばいいんだろう。ユーノくんは何か感じない？）

（ボクは何も感じないけど…浩樹はどう？）

（俺は…女の子にちやほやされてるあいつがうらやましい！）

（真面目に聞いてよ！）

なのはに怒られちった。

（すまんすまん。俺も何も感じないけど…気になるんだったら、ちょっと様子をみてみるか。）

（で、でも…私の勘違いかもしれないし。）

（だったら何事もなくて余計に問題ないじゃないか。後をつけながらでもジュエルシードは探せるんだし。）

（そうだね。なのはだから感じる何かかもしれないし。）

というわけで俺たちはそのキーパーの後をつけることにした。

習い事があるらしいアリサたちと別れ、俺たちは女連れの、お・ん・な・づ・れ、のキーパーの後を追っていた。

「小学生のくせに生意気な。その子にお姉さんとかいたら俺に紹介しろよ。」

「あの子じゃなくて？」

「可愛らしいが子どもじゃないか。俺はもっと大人がいい。」

「えーくんって結構えっちだよね。」

「言わないで…なのはに言われたらちょっと凹む…。」

そしてなのはの予感が正しかったことが証明された。

「浩樹！馬鹿なことといってないで、ジュエルシードが発動したよ！」

「ああ、わかってる！…ってデカぁ！！？」
「まずい、生成スピードが速すぎる！」
「レイジングハート！」
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．　Ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔ　ｕｐ．』
なのははすぐにバリアジャケットを展開し、空に飛び上がった。
「えーくん、まだ飛べないんだよね？私に捕まって！」
「俺のことはいいから、先に行ってろ！」
「でも、それじゃあえーくんが！」
「時間かけてたら被害が大きくなるだけだろうが！対処法はあるから、お前たちはジュエルシードに集中しろ！」
「でも…」
「なのは、ここは浩樹を信じよう。彼が言うんだ、きっと自分のことはなんとかするはずだ。」
「ケガとかしちゃだめだよ？」
「わかってる。行ってこい。」
心配そうな表情をしながらもなのははユーノをつれて空へ舞い上がっていった。

「さて、あいつらに教えてやる。バインドの応用ってやつをな！」

なのはｓｉｄｅ

私は凄まじい速度で木の枝を伸ばす大きな樹木を一番よく見える位置、この海鳴で一際高いビルに来ていた。

「えーくん、大丈夫かな…。」

「きっとね。それよりなのは、せっかく早く対処できるんだ。封印を急ごう。」

「うん、そうだよね。それよりどうしたらいいかな、あの木すごく大きいよ。」

「なのはのおかげでジュエルシードの位置はわかってる。あとはそこを叩けばいいんだけど。」

「レイジングハート、できる？」

『問題ありません。Ｓｈｏｏｔｉｎｇ ｍｏｄｅ． Ｓｅｔ ｕｐ．』

レイジングハートが遠距離攻撃に適した形状に変形する。それが終わると私は構えなおす。

「行って、レイジングハート！」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．』

ジュエルシードの位置をレイジングハートが正確に割り出し、そこに向けて桜色の光を放った。

――シュ、パァン！

しかし、それは太い木の枝によって防がれてしまった。

「えぇ！？なんでぇ！？」

練習でもかなりの威力があったのにも関わらず防がれてしまった。

『どうやら共鳴反応によって力が増したようです。』

「共鳴ってジュエルシードは一つしか…ってそうか！一緒にいた女の子だ！」

「ユーノくんどういうこと？」

「あの男の子の気持ちに反応して発動したジュエルシードが男の子のパスを通って女の子の方にも伝わっちゃったんだよ。」

「どうしよう…。」

「レイジングハート、何かわからない？」

『どうやら防御は伸びてきた部分だけのようで、本体だけなら突破可能です。』

「追加された力は枝の部分ってことか…ってことはあの枝をどうにかできればいいんだけど…。」

そんな時、正面からいきなりえーくんが飛び出してきました。

「にゃぁあぁぁ、ビックリした〜。」

「どうやってここに？」

「お待たせっと。二式をちょっと改造してな。リターン機能を入れてみたんだよ。んでそのバインド機能で引っ張りあげてもらったんだ。チェーンバインド応用編だな。気分はターザンだった。」

「いつの間に…。」

「えーくん、すごいね。」

「って、今どうなってるんだ？」

ユーノくんが現状を説明してくれました。うぅ、せっかくえーくんが先に行かせてくれたのに。

「なるほどな。よし、ユーノ。やるぞ。」

「やりたいことはわかるけど、強度が…。多分引きちぎられるよ？」

「一瞬でいいんだ。あの盾を一瞬でもどかせば、その間になのはが攻撃をぶちこむ。できるか？」

「うん！」

「そうだね。やってみるしかないか。」

えーくんの試すような問いかけに私は力強く頷いた。

「いくよ、浩樹！チェーンバインド！」

「応よ！捕縛、二式！」

ユーノくんとえーくんのバインドが本体を守ってた枝を縛り上げ、それぞれ反対の方向へと引き離していた。

「今度こそいくよ！」

『了解しました。Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．』

「ディバイーン、バスターーー！！！」

今度こそジュエルシードを捉えた！今なら封印できる！

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．　Ｒｅａｄｙ．』

「リリカルマジカル・ジュエルシード　シリアル１０　封印！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ．　Ｒｅｃｅｉｐｔ．　Ｎｏ．１０．』

「なんとか封印できたな。」

「うん、でも…せっかく気づけたのに…。」

「それでもなのはは気づいてくれたよ！そもそも、ボクがジュエルシードなんて発掘したりしなければ。」

「それは仕方ないことだよ！お仕事だったんだもん。」

「なのはを巻き込んだのもボクのせいなんだし。」

人の力によって発動したジュエルシードはこの町に大きな爪跡を残した。もっと早く、直接あの男の子に頼んでみたりしてジュエルシードを渡してもらえばよかった。そうすれば…

「せめてもっと早く、封印できてればこんなに迷惑かけなかったのに。」

「ボクも力不足だったよ。」

「ったく、お前らは。」

えーくんが呆れたような声を出した。町がこんなことになちゃったのに、なんとも思わないの！？

「誰のせいとかいう責任はおいておくとして、確かに原因の一端かもな。なのはもユーノも。そして俺も。」

私とユーノくんは黙って聞いた。きっととても大切な話だと思ったから。

「起きてしまったことだからしょうがない、責任の追及なんてやってもキリがない。それをいえば、ジュエルシードを手にしたあの

キーパーも同じだ。たとえ知らなくても。」

確かにそうかもしれない。そんなことを一つ一つ挙げていけば数え切れない。

「今回はこうなってしまったけど、そのおかげで俺たちは学んだ。ジュエルシードの力を。」

私はユーノくんから聞いてはいたけどここまで危険なものだとは思ってなかった。

「責任を感じるんだったら、次からはこうしないようにしていくしかないさ。だから、挽回していこうな？」

「うん、もうお手伝いじゃいられない。私自身が危険なことにならないためにジュエルシードを集めるよ！」

「うじうじ悩んでても解決しないしね。頑張ろう、なのは！」

「そうだね、ユーノくん！」

「うん、いい表情だ。写真を撮ってあげよう。パシャっとな。」

「あーー！！また勝手に写真撮ったぁー！」

「ちゃんと言ったじゃん、写真とってあげようって！」

むぅ、でも今回は許してあげようかな。さっきの話のおかげでいろいろ気づけたし。

「なぁ、さっきの俺ってメチャクチャかっこよくなかった？」

「そうかも知れないけど、その功績はゼロに戻ったね。」

「な、マジで！？やり直しちゃダメ？」

さっきまですごくどんよりした空気だったのにえーくんがアホなことを言い出したせいかいつもの空気に戻りました。

「えーくん、起きてしまったことはしょうがないよ。ふふふっ。」

「これで浩樹も学んだね。本来の自分を。（ニヤニヤ」

「せっかく、決まったなオレ！とか思ってたのに…。てめーら、ニヤニヤ笑ってんじゃねぇー！！」

「「あはははは。」」

Ｓｉｄｅｏｕｔ

第7話　俺にもカッコつけさせてください。（後書き）

さぁ、次は巨大ネコか。

…フェイトどうしよう。

第8話　オリ主は動物に好かれ、モブ主はネコに嫌われる。（前書き）

初の対人戦。うまく書けてる気が全くしない。

第8話　オリ主は動物に好かれ、モブ主はネコに嫌われる。

本日、月村邸でお茶会である。実は俺、すずかの家にはあまり行ったことがない。1年生のころから友達なんだからそれなりに行っているでのはと思うかもしれないが、それには原因があるんだ。

にゃんこたちがなついてくれないんだよ…

動物にくらい好かれるスキルがあってもいいと思わない？にゃんこ抱いてなでなでさせてくれないんだ。逃げられるんだ。初めてすずかの家に行ったときにサーっとにゃんこたちが俺から離れていったときはかなりショックだった。なのですずかの家に行ったときは眺めるだけになってしまった。3人娘がにゃんこと戯れる様はそれはそれでいいのだが、うらやましそうな視線を向けるとアリサがニヤニヤしながら俺に見せつけてきたときはどうしてくれようかと思った。

「ようこそいらっしゃいました、A様。」

「…なぁ、ノエルさん。俺、そろそろ怒ってもいいと思うんだけど。」

インターホンを押し、俺を出迎えてくれたメイドのノエルさん。初対面から言っているのだが、わざとなのか直してくれない。美人相手でもお、お仕置きとかしちゃうよ？メイドにお仕置き…ちょっとドキドキしてきた。よし、忍さんにお願いしてみようか。ノエルさんくださいって。

「冗談でございます。さぁ、どうぞ。アリサお嬢様となのはお嬢様、恭也様はもういらっしゃってます。」

そして通された先にはアリサになのは、すずかの3人娘に加え、恭也さんと忍さんも一緒にいた。さらにはすずかの専属メイドのファリンちゃんが傍に控えていて、高町家を除くと彼女たちが本気でお嬢様なのがわかる。

「すずか…さっそくで悪いんだが、奴はどこに？」

「もう。えーくん、挨拶くらいはしないと、だよ？」

「あ、ども。みなさんおはよう。で、どこにいるんだ？」

「待ちきれないんだね。ファリン、お願いできる？」

「かしこまりました、お嬢様。」

そう、俺が今日ここに来たのは他でもない。なんと新しいにゃんこがやってきたからだ！今度こそきっとこの手に抱いてなでなでしてくれる。そのために秘密兵器も用意したからな！

「まったく、アンタはホントにネコが好きね～。」

「にゃはは、なつかれてないのが残念そうだけど。」

「それじゃあ、揃ったみたいだし、私は恭也と部屋に戻らせてもらうわね？」

「そうだな。」

どうやら、このリア充カップルは俺を待っていてくれたらしい。
「あんまりギシギシやると俺も参戦しますからね？あと、ノエルさんくれませんか？」
「大丈夫よ、きっちり防音できてるから。それとノエルがほしかったら恭也に勝てたらいいわよ？」
メイドさんいらっしゃ～いは諦めないといけないようだ。勝てるわけないじゃん。ただでさえカッコいいのに、さらに元主人公補正がついてるんだぜ？俺が勝てるのは写真の枚数くらいなものだ。
「し、忍！」
「恭也ったら照れちゃって♪」
忍さんは恭也さんをからかいながら、その腕を取って自室へと向かっていった。
「べ、別にうらやましくなんかないんだからね！」
「でもホントラブラブよね。あの2人。」
「お姉ちゃん、恭也さんと一緒になってから本当に毎日が楽しそう。」
「お兄ちゃんもちょっとやさくしなったよ。」
このお嬢さんたちはネタに対するスルースキルを習得したようだ。

おいちゃん、ちょっと寂しい。

「お嬢様～、つれてきましたよ～。」

「よくやった！ファリンちゃん！ご褒美にすずかに膝枕してらってもいいぞ！」

「ふふっ、ファリンおいで？」

「やった～。えへへ、すずかお嬢様ぁ～。」

ファリンちゃんは抱いていたネコをおろし、すずかに膝枕してもらいにいった。ってそんなことはどうでもいい！ち、近づいても逃げられないかな？

「にゃんこ～、こっちにおいで～」

俺はしゃがんで、チッチッと舌を鳴らし、にゃんこを呼んでみる。今までのにゃんこはプイッとそっぽを向いて離れていったり、近づきすぎると引っかいてくることもあるが…

「つつつつ、ついににゃんこが俺のところにいいいい！！！」

なんとそのにゃんこはにゃ♪と鳴いて近づいてきただけでなく、なでて～といわんばかりに頭を寄せてきたのだ。

「う、嘘っ！？」

「よかったね、えーくん。」

「私にもまだあまりなついてくれてないのに…。」

はぁ～、幸せだぁ～。もふもふ気持ちいい。はじめて俺になついてくれたにゃんこ。俺はキミを大切にするよ。わかるか？この感動が！オリ主のように動物に好かれるスキルを持ってない俺が大好きなにゃんこ嫌われてたこの悲しみが！

「きゅ、きゅうーーーーー！！！」（ひ、浩樹！助けて！）

「よしよし、もっとなでてやろう。」

「きゅうぅぅぅーーーーー！！」（浩樹ーーー！！！）

なんかユーノがネコに追いかけられてるみたいだけど、俺の邪魔をするんじゃない。お前は気が済むまで他のにゃんこと追いかけっこしてろ！

「ああ、ユーノくん！？」

ネコの追撃から必死に逃げるユーノ、それを助けようと追いかけるなのは、手伝おうとしたのか一緒に追いかけ始めるアリサ、ファリンちゃんに膝枕してるために参戦できないすずか。なんかカオスな状態になってきたな。なのはもユーノを自分のところに呼べばいいのに。でも、教えない。むしろ俺はネコへブンに浸りつつ、写真を撮る！

「ユーノくん～。」パシャ

「ちょっと、ユーノはあんたのエサじゃないわよ～。」パシャ

「ユーノくんも災難だね…。（なでなで」パシャ

逃げる、逃げる、逃げる！ユーノ逃げまくる。そしてユーノはフアリンを伝ってすずかを飛び越えようとしたところ…

――パシッ

なんとすずかがユーノをキャッチ！パシャ

「ちゃんと安全なところにいないとダメだよ？ウチはネコが多いんだから。」

「ありがとう、すずかちゃん。」

「っていうか、いまさら思ったんだけど、ユーノは賢いんだからなのはが呼べば助けられたんじゃない？」

「慌ててたもので…。」

「きゅう…。」（た、助かった～。）

その様子を見てたせいか、俺のひざの上でごろごろしてたネコがすっと降りて林のほうに駆け出していった。

「俺のにゃんこが！？」

「アンタのじゃないでしょ。」

「まあまあ、アリサちゃん。きっとえーくんはしゃいでるんだよ。」

「俺、ちょっと追いかけてくる！」

俺はやっとなついてくれたネコを追いかけていった。

俺がようやく追いつくとあのにゃんこはとてつもない変貌を遂げていた。その様に唖然としてしまった。

「にゃ、にゃんこ？お前は成長期なのか？」

現実逃避のために俺は無理やり常識の枠に当てはめようとしていた。いや、ネコにそんな成長期があるかどうかは全く知らないが。

どうやらこのにゃんこ、ジュエルシードを取り込んでしまったらしい。どうしよう…このままじゃ魔力ダメージとはいえ、にゃんこが傷ついてしまう。

「うわぁ…おっきなネコさんだぁ～。」

ふと後ろからなのはの声が聞こえてきた。

「浩樹ジュエルシードは…ってどう考えてもあれだね。」

ジュエルシードは現時点では願いを叶えるエネルギー結晶体だとユーノから聞いている。

「なぁ、にゃんこ…お前はおっきくなりたかったのか？」

「おっきくって…えぇ！？あのネコさん、えーくんになついてたネコさんなの！？」

「ああ。なのはできるだけやさしく封印してやってくれ。幸いにもあのにゃんこ、おとなしいみたいだから。」

「うん、もちろんだよ！レイジングハート！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．　Ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔ　ｕｐ．』

『Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ．　Ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ．』

レイジングハートとは別の機械音声が聞こえてきたその時、黄色い魔力弾が飛んできてにゃんこに被弾した。

「にゃんこ！」「そんな、まさか魔導師！？」

「任せて！」

『Ｆｉｒｅ　ｆｉｎ．』

なのはは飛行魔法を使って飛び上がるとにゃんこに向かっていき、防御壁を展開した。

「同系の魔導師？」

「どうしてこんなことするの！？誰かは知らないけどネコさんいじめたらダメだよ！」

フェイトｓｉｄｅ

私のバルディッシュと同じインテリジェントデバイスを持った女の子が私の前に立ちふさがった。もちろん私だってネコをいじめたくてこんなことをやっているわけじゃない。

「それでも私はジュエルシードを集めなきゃいけないんだ。」

『Ｓｃｙｔｈｅ ｆｏｒｍ． Ｓｅｔ ｕｐ．』

「アークセイバー！」

バルディッシュの形状を鎌へと変化させ、攻撃を放った。

母さんのためにもっと急がないといけないのにこんなときに魔導師が出てくるなんて。

「ねぇ、教えて！なんでこんなことするの？」

白いバリアジャケットを着た同い年くらいの女の子が私にそう問いかけてきたけど、この子には関係ない。人と争うなんて避けたかったけど、背に腹はかえられない。立ちふさがるのなら無力化するだけだ。

「申し訳ないけど、譲るわけにはいかない。頂いていきます。」

私はバルディッシュで切りかかるが、白い魔導師はそれをかわし、

空に飛び上がった。私も飛び上がり、再度彼女に攻撃をしかける。

ガキィン

「くぅ…。」

パシャ

「……」

おそらく魔力量からいってそれなりに才能はあるんだろうけど、私に勝つにはまだ早い。

「ふぅ、とりあえず、にゃんこは元に戻ったな。ごめんな、にゃんこ。」

「仕方ないよ、浩樹。一度取り込んだ以上ある程度魔力ダメージを与えないと封印できないんだから。」

聞き覚えのある声に視線を向けると…

「ジュエルシード！」

その声にも顔にも見覚えがある気はしたけど、すでにジュエルシードはむき出しになっていた。このままじゃ先に取られちゃう！

「えーくん！」

「バルディッシュ！」

『Ｂｌｉｔｚ　ａｃｔｉｏｎ．』

あれ、あの男の子ってもしかしてヒロキ？って今はそんなこと気にしてる場合じゃない。今はジュエルシードを！

Ｓｉｄｅｏｕｔ

今日がなのはとフェイトが出会う日だったか。すっかり忘れてた。まぁにゃんこに夢中だったってのも理由の一つだけども。フェイトがにゃんこに攻撃したときはさすがにイラついたが、冷静に考えれば仕方のないことだ。

ユーノと俺でできるだけやさしくにゃんこを弱らせて、ジュエルシードを取り出したと思ったら、目の前をフェイトが高速で飛んできてジュエルシードを持っていってしまった。

「ふぇ、フェイト！？」「しまった！」

「ゴメン、ヒロキ。悪いけどジュエルシードはもらっていく。」

あっという間にフェイトはジュエルシードを封印しバルディッシュに収めると飛び去っていった。

「悪い、油断した。」

「それはボクも同じだよ…。」

「私もゴメンね。あの子すっごく速かったから。」

3人そろって落ち込んでても仕方がない。というか俺はそこまで落ち込んでない。どちらかというとにゃんこの方が心配だ。

「今回は仕方ない。ジュエルシードはとられたけど、大きな被害はなかったんだからそれでよしとしようや。」

「それもそうだね。ネコのほうも身体的ダメージはないみたいだし。」

「そうだけど、今後はあの子と戦いことになるかもしれないんだね…。」

「かもな。まぁ、なのはも負けないように頑張ればいいだけの話だ。」

「うん、私頑張るよ！」

「ボクにはもうなのはに教えられることはもうほとんどないけどね。」

「なのはなら大丈夫だろ。さて、すずかのところに「ちょっと待って」…ん？なのは？」

「えーくん、なんであの子の名前…知ってたのかな？それにあの子もえーくんの名前知ってたみたいだし。」

「気のせいじゃないか？俺の名前は知ってたっていうよりも聞いてわかったとかだと思うんだけど。」

とりあえず誤魔化しておこう。この先どうなるかはわからないけど無難に黙っておいたほうがいいかもしれない。

「そうかなぁ？知り合いのようにも見えたんだけど。」

「第一魔法使いの知り合いなんかお前ら意外にいるはずがないだろ？」

「それはそうかもしれないけど…嘘じゃない？」

「ああ、あの美少女”魔導師”と会ったのは今日が初めてだ。」

うん、これなら嘘じゃないよね？前にフェイトとあったときは魔法全く関係なかったし。なぁに、バレなければいいのさ。ハッハッハ。

「それより浩樹。あのネコに使ったバインドっていつもと違った気がしたんだけど？」

「えーくん、ネコさんにバインド使ったの？」

「ああ、ちょっと開発中のやつが未完成でな。試したかったんだ。うまくいけば傷つけずに相手を無力化できるはずなんだ。」

「でも、なんか変な感じに拘束してたよね？」

「どんななの？」

「なんていうか…」

「ま、まぁ、いいじゃないか。完成したら見せるから。それまでのお楽しみってことで。」

面白半分で組んだ魔法なんだけど…さすがにあれを見せるのは抵抗がある。わからないとは思うけどそれはそれでインモラルな感じがするし。でも、ちょっと使ってみたい…そんな欲望からできた魔法。

余裕があれば写真撮れたんだか、残念だ。初戦闘の写真が…一枚だけなんて！

すずかたちのところに戻るころにはにゃんこは目を覚ましていた。

「すずかちゃん、何してるの？」

「ネコたちの食事の時間なの。」

そうか、食事…ん？なにか忘れてるような気が…。ポケットをがさごそ。

出てきたのはポケット猫にゃんフード（特上）！

「んにゃ！」

――パシッ

「あ。」

抱いていたにゃんこが俺の取り出した猫にゃんフード（特上）をつかみ、サササーっと持って言って袋を破ろうとガジガジやっている。

「もしかして…」

「えーくんがそのネコさんに好かれてたのって…」

「それを持ってたから？」

そそ、そんなバカな。ちょっとお腹がすいてただけだよな？ほら、俺が食べさせてやるからこっちおいで～。

「にゃ！（プイッ」

嘘だぁぁぁぁぁぁ。にゃんこ…君のこと信じていたのに…ｏｒｚ

第８話　オリ主は動物に好かれ、モブ主はネコに嫌われる。（後書き）

こんな感じにしてみました。戦闘描写って難しい。

ご意見、感想等ありましたらお願いします。

ｐ．ｓ．　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　１ｓｔ発売おめでとう＾＾そして

２ｎｄ製作決定おめでとう！

第9話　エッチなのはいけないと思います！（前書き）

趣味（バイク）入りま～す。

第9話　エッチなのはいけないと思います！

どうもこんにちは。柳浩樹です。ただいま、絶賛落ち込み中です。慰めてください。美女や美少女に癒してもらいたいと思う今日このごろです。

あ～あのにゃんこ可愛かったなぁ、もふもふだったなぁ。

「ははははは。んで、そのネコは最後まで相手にしてくれなかったのか。バッカだなぁお前は。」

美女、美少女に癒してもらいたいと思う今日このごろです。

「やっとなついてくれたと思ったネコはエサ目当てでした？面白すぎるだろお前、はっはっは。」

美女、美少女に癒してもらいたいと思う今日このごろです。

「これがお前が前に言ってた世の中の理不尽ってやつか。いや～ホントに理不尽だな？」

美女、美少女に――

「っていい加減にしろやぁぁぁぁ、このクソ親父が！俺は美女か美少女に慰めてほしいんだよ！それがなんでむっさいおっさんなんだよ！」

「美女か美少女だぁ！？夢見るのもたいがいにしろバカ息子！身の程をわきまえろ。」

こんな時くらい夢みてもいいって思わない？にゃんこあんなフラレ方したんだからさ。わかってるんだ。ネコっていうのは気まぐれって。

「アナタもいい加減にしなさい。息子が落ち込んでるのにそれを面白がるなんて父親のすること？」

「だってコイツがあまりに面白いもんだから。」

救いの神、お母様が現れた。もっと言ってやれ！

「それより今度の休日は休み取れるのよね？」

「ああ、はじめは出るつもりだったんだが、部下にたまには家族サービスも必要だといわれてしまってな。その言葉に甘えることにしたんだ。」

「まぁ、素敵な部下さんじゃない。」

「親父みたいな上司を持ってそんな素敵な部下さんがいるなんて。世の中不思議だ。」

「浩樹、あなたも口が過ぎるわよ？」

俺も怒られてしまった。でも本当にそう思う。親父の部下が言ったことは自分たちが親父に代わって仕事をやるといっているのだ。そんな気遣いができる部下をもてるのは本当にいいことだと思う。

「だったら、その連休は泊りがけでツーリングにでもいきましょう

か。この前は浩樹と2人だけで時間も短かったし、どう？」

「それはいいな。浩樹、友達と約束があったりは…ってないな。そもそもお前友達いるのか？」

自覚してはいるがその質問はさすがにどうかと思う。

「あら、最近は高町さんのところのなのはちゃんと遊んでるみたいよ？」

「女の子か？だったら家にもつれてきなさい。お父さんなぁ、女の子がほしかったんだ。」

「連れてこられればね。」

さっきはあんなこと言ったがぶっちゃけ無理だろ。俺だぞ？女友達を自宅に連れてくるなんてできるわけないじゃん。

というわけで連休はツーリングを兼ねた旅行に行くことになった。

そして連休を迎えたわけだが…

「なんで喫茶翠屋に？」

「あのあと高町さんも都合がつけばどうですかって誘ったら向こうも温泉旅行に行くらしくてね。月村さんとかバニングスさんの娘さんも一緒だから逆にどうかって誘われちゃったわ。」

朝、支度を終えて、俺はいつものようにお母様の後ろに乗って出発したのだが。向かった先がこの翠屋だったのだ。どうやらアリサがニヤニヤしてたのはこれを隠してたからしい。

「おはよう、えーくん。」

「なのは、知ってたな？」

「だ、だって…アリサちゃんが内緒にしときましょって。」

「ちょっとしたサプライズよ。女の子と一緒に温泉旅行なんて行けるんだから元気だしなさい。」

「ウチでの一件でだいぶ落ち込んでたみたいだからアリサちゃんが提案したんだよ？」

とすずかが教えてくれた。おや？お母様が言っていたのとちょっと違うような？そう思って聞いてみると。

「にゃはは、こっちから誘うつもりだったんだけどね。ちょうどその時にえーくんのお母さんから電話があったもんだから。」

なるほどな。それにしてもアリサがそんなことを…おいちゃん、うれしくて涙が…ぐすっ

「アリサ…ありがとうな。俺、そんな提案をしてくれたなんてホントにうれしいよ。」

「べ、別にアンタのためだけってわけはないわよ！それに私もバイクって乗ってみたかったのよね。」

いつもならここでツンデレだーってからかってるところだけど、さすがに自重した。だって本当にうれしかったし。女の子がどうこうってわけじゃなく、友人としての気遣いが。

「お、柳さん一家ももう来ていたのか。」

子ども同士で話していたところ高町夫妻もご登場。メンバーはこれでそろったらしい。高町一家に月村姉妹、ノエルさんとファリンちゃんのメイドさん、そしてアリサというわけだ。

「高町さん、今日はお誘い頂きありがとうございます。」

「いえいえ、娘たちも誘うつもりでいたみたいですし。」

「でも、私たちも車でなくてよかったんですか？だいぶ大人数になったようですけど。」

「そこは気になさらないでください。浩樹くんに聞けば一家揃ってバイクが趣味だとか。それに娘たちも乗ってみたいと言っておりますので。」

士郎さんと親父がそんな会話をしている。そして桃子さんとお母様も。

「ウチは一人息子ですから、女の子がいなくてさみしかったんですよ。」

「ウチも恭也は大きくなって最近は可愛げもなくなってきましたから、なのはと年頃の男の子がほしかったんですよ。」

なんて会話をしている。お母様は女の子もほしいと言っていた生まれてきたのが俺なんかで申し訳ない。

「それじゃあ出発しようか。」

タンデムは子どもが交代で乗ることになった。ちなみに今回のバイクは親父がハーレー、お母様がネイキッドである。まずは俺となのは。ツーリングようのインカムがないが、俺となのは念話があるので道中の会話が非常に楽である。

（わぁ～、バイクってこんな感じなんだね。気持ちいいなぁ。）

（そいつは何より。俺も早く自分で乗れるようになりたいよ。）

（私は自分で運転するのはちょっと恐いかも。）

そして休憩を挟んでアリサとすずかに交代し、士郎さんが運転する車に乗り込む。

「なのはどうだった？楽しかったかい？」

「うん。なんていうかね、風が気持ちよかったよ！」

「あら、なのはよかったわね～。」

「いい天気だし、本当に気持ちよさそうだね。」

ユーノも会話に入ってきた。現在車中にいるのは恭也さんを除いた高町一家と俺だけなのですでに魔法のことを話しているから問題はない。

「ユーノくんもフェレットじゃなかったら乗れたのにね～。」

「念のために改めて言っておくけど、ボク本当は人間だからね。」

「そうだったわね。ところでユーノくんって年はいくつくらいなのかしら？」

「あ、えと、なのはさんと同じくらいです。」

「あら、そうなの？人のほうの姿も見たいわ。フェレットの姿もかわいいけど。」

「あはは、戻れるようになったらお見せします。」

そんな会話をしてるうちに到着。場所は海鳴温泉。宿帳に記入を済ませ、それぞれ部屋に向かった。部屋割りは子ども組４人で１部屋、高町夫婦と柳夫婦でまた１部屋、そして恭也さん忍さんカップルと美由紀さんとメイドさんコンビで１部屋の計３部屋だ。

俺たちは部屋に荷物を置くとすぐに温泉に向かった。親父たちと士郎さんたちは散歩しにいった。

「きゅ、きゅうーー！！」（浩樹、助けて！このままじゃ女湯に連れて行かれちゃう！）

「し、仕方ないな…それじゃ俺も女湯に…」

「きゅうーー！」（それじゃあ何の解決にもならないよ！）

「アンタはあっち。」

「ですよねー。」（というわけでユーノ。救出は不可能のようだ。）

「きゅうきゅう！」（というわけで、じゃないよ！）

俺も女湯に入りたいのは山々だが、いくら俺が体は子ども頭脳は大人状態でもさすがに罪悪感というものがある。

良い子のみんな！たとえ俺と同じような状態になってもそんなことしちゃダメだぞ☆おいちゃんとの約束だ！

「あら、みんなで一緒に入ればいいじゃない、アリサちゃん。」

忍さんがそんなことを言い出した。いくら俺でもそんな簡単なエサに食いついたりしな――

「ままま、マジですか！？真剣と書いてマジですか！？」

おいおい、みんなして俺を責めるなよ。わかるだろ？俺の気持ち。

「残念。今の反応で冗談と書いてマジって変換されたわ♪」

まぁ、頭ではわかってたから俺はそのまま恭也さんと男湯に向かった。

すまん、ユーノ。今日はあんまりアリサにおいたするわけにはいかないんだ。今のうちに女体パラダイスでも味わってくれ。大人になるとな、できないことが増えるんだ。

「きゅうーーー！！」（裏切りものーーーー！！）

そして男湯

「うわ～、さすが恭也さん。すごい体ですね。」

「これでも結構鍛えてるからな。見学したりしてるキミからみてどうだ？」

「凄まじいですね。同じ人間か疑いたくほどに。」

「昔は無茶したりもしたからな。その結果として今があるわけだけど。」

「無茶ですか…。」

精神的な年齢として俺は恭也さんよりも年上になるわけだが、人生経験の濃さが比較にならないほど違うようだ。俺は前世で平凡な人生を過ごしてきた。絶望するほどの出来事もなかったし、壮絶な体験などもなかった。いわゆる普通の人の範疇に納まる。

「なのはのこと聞いたよ。俺も力になってやりたかったが無力のようだし。」

「それは違いますよ。実質的な力になれなくても家族として支えてあげることができればそれで十分だと思います。」

「そうだな。力になれるキミとユーノにお願いする。妹を頼む。」

「わかりました。」

「だけど妹は簡単にはやれないよ？」

そういって恭也さんは笑った。

ちくしょう、なんてカッコイイんだろうこの男は。とはいえ、もう完全に引き返せないところまできたな。まぁ、できるだけのことはやってみますか。俺なんかができることなんてたかが知れてるが今更何もしないよりは全然いいだろう。

風呂から上がると何やらなのはたちが知らないおねーさんにからまれているようだ。ってあれは…。

「アルフ何やってんの？」

「ん？ってヒロキじゃないか。アンタこそ何やってんのさ？」

「いや、俺は温泉にきただけなんだが…」

あぁ、そういえばここにもジュエルシードあるんだっけ。フェイトも探しに来てた気がする。

「えーくん、知り合いなの？」

「前にちょっとね。で、何でなのはたちにからんでるんだ？」

「いや～人違いだったみたいでさ。アンタたちもすまなかったね。私はもう一度温泉にでも入ってくれよ。」

そのままアルフは温泉のほうに向かっていった。

「あ”～もう！何なわけ！？昼間っから酔っ払ってるんじゃないわよ！」

「まぁまぁ、人違いだったんだから気にするなよ。」

（それがそういうわけでもないみたいなんだ。）

（どういうことだ？）

ユーノからの念話に知っているが一応聞き返す。じゃないとおかしいし。

（何の忠告か知らないけど念話を使ってきたよ。この前の魔導師の関係者かもしれない。）

（そうか。今はどうしようもないし、気にすることないだろ。）

（それはそうだけど。）

「それよりお嬢さん方～。ハイ、チーズ。」パシャ

「ふぇ？」　「あ…」　「キャッ」

湯上りでほんのり頬が赤い3人娘の写真を撮らせてもらったぜ。

「もう、急に写真はダメって言ったでしょ？」

「許可取れっていったでしょうが！」

「ビックリしたよ～。」

「これくらいならいいだろ？変な写真でもないし。」

あとでちゃんと送ってくれるならＯＫということでなんとか許してもらえた。しかし、そろそろ正面から突然パシャるのはそろそろ限界か。こりゃあいつの出番も近いか。おっとそれが何にせよ、エッチなのはなしだ。ほら有名なセリフがあったろ？

エッチなのはいけないと思います！

っていうのがさ。

第9話　エッチなのはいけないと思います！（後書き）

恭也のキャラがうまくつかめません。違っていたらすみません。

次回フェイト戦です。うまく書ける自信がない…ｏｒｚ

第１０話　俺は今まで魔導師には負けたことがないんだぜ？

――カコンッ

ここは海鳴温泉にある卓球場。ここでは手に汗にぎる熱い戦いが繰り広げられていた。

「ちょっと！アンタのせいでまたポイントとられちゃったじゃない！いい加減にしなさいよ！」

「アリサこそ、俺の邪魔ばっかしてるじゃん！もういいからおとなしくしてろよ！」

そう俺とアリサの…ね。

あのあと、俺たちは温泉にきたらやっぱり卓球でしょう！ということで卓球場にきた。はじめは１対１でやっていたがなのはのダメっぷり、すずかの無双により早々に取りやめになった。そこでせっかく４人いることだしダブルスにしようということになった。最初に組んだのが俺となのはでアリサとすずかとの対決となった。

慣れてきたこともあってか、ここでようやくなのはは比較的まともになった。負けはしたがそれでも全員が楽しめる試合だった。そう、よかったのはここまでだった。

「男子生徒Ａなんだからモブらしく端っこで私がこぼしたボールでも取ってなさいよ！」

「な！？自虐ネタは自分で言うからいいのであって他人が言うとい

じめなんだぞ！」

俺とアリサのダブルスの相性は最悪だった。本来卓球におけるダブルスというのはチームで交互にレシーブしなければならないが遊びというのとダブルスのルールを知らなかったのもあってか、好きにレシーブしていいことになっていた。それも原因の一旦だと思われるが。

っていうかアリサが言ったように俺はこぼしたボールを拾うのに徹してたはずなんだが。

「アリサちゃん、さすがに男子生徒Aは言いすぎだよ。」

「私もさすがにひどいと思うの。」

すずか、なのはの順でアリサにそう言ってくれるが…Aくんって呼んでる時点でたいしてかわらないからな？

「わ、悪かったわよ、A。言い過ぎたわ。そこに関してはゴメンなさい。」

今更だがアリサは俺をAと呼ぶ。なのはやすずかにつられた形ではあるが自分だけ違う呼び方というのがお気に召さないらしい。呼びにくくはないのだろうか？

「まぁ、卓球に関してはプレイスタイルの違いってことでいいだろ。」

「悔しい気はするけど、遊びだしね。今回はこれで勘弁してあげるわ。」

微妙にペア同士の会話ではない気がする。

そんなちょっとした口論もあった晩、揃って夕食となった。場所は親父たちの部屋。

「ここの料理はうまいぞ～。特に海鮮料理は磨きぬかれた料理人の技、新鮮な魚介類によって極上のものへと仕上がっている。ボリュームも満点でそれでいて飽きさせることのない味を――」

――パシッ

「あ、何するんだよ。」

「ここのパンフ読み上げてるだけじゃないの。そんなのいいから早く食べましょ。」

もうちょっとからんでほしったよ、アリサ…。

さて、おいしい料理をいただきながら、パシャっと。おっほろ酔い姿のお姉さん，ｓいただきます。パシャっと。ん？いつの間にお酒が投入されたんだ？まぁ、俺得なんで構わないけどな！

「にゃはははは、えーくんまた写真撮ってる～。」

「すずかぁ、行っちゃやだぁ～。」

「ふぅ…おいし。」

…おい。誰だ、この小学生たちにお酒飲ませたのは。ちょっとこいつらの状態を説明してみようか。

なのは　↓　笑い上戸

アリサ　↓　甘えん坊

すずか　↓　おいしくお酒を飲んでらっしゃる（しかも何気に色っぽい）

ちょっと最後、おかしいよ。なのはは軽く飲んだだけみたいだが、アリサは壊れ気味だが予想できる範囲内だ。だけど、すずか。キミの飲み方おかしくないかい？

「えーくんは飲まないのかな？私がお酌してあげるよ？」

何かからんできた。

「私、未成年ですので…」

「私のお酒が飲めないのかな？」

しかもなんか面倒な絡み方してきやがった！そんな怪しい目で誘うように見てきてもダメだよ。たた、確かに色っぽいけども！

「で、でも…」

「ふふふ、何、どもってるの？いいから飲もう？」

「いただきます！！」

べ、別にすずかの色香に負けたわけじゃないんだからね！軽く飲めばそれで解決するんだよ、きっと！

「ゴクゴク…っぷはぁ！」

「ささ、もう一杯。」

「ゴクゴク…」

「ささ…」

「ゴクゴク…」

「もっといってみようか。」

「ゴク…はれ？目が…」

そこが俺の限界だった。倒れる前に見たのはお酒のビンを持って次のターゲットへと向かうすずかの姿だった。

おのれ…すずか、お前は潰し魔だったのか…。ガクッ

（浩樹、浩樹、起きてよ！ジュエルシードが発動したみたいなんだ！）

ユーノが俺をゆさぶって起こそうとしている。

そうか、発動したのか。それなら俺も行かないとな。

俺はムクっと起き上がり自分の状態を確認した。何故だろう、すごく気分がいい。体がまだ熱い。立ち上がってぼうっとしたまま鏡をみると、自分がイケメンだということを認識した。よし…

「いくぜぇぇぇぇ、ユーノぉぉぉぉ！」

（え、ちょっと浩樹どうしたのさ！）

誰でもかかって来い。今の俺は誰にも負ける気がしない。

到着した場所でなのはとフェイトがセットアップした状態で向かい合っていた。アルフもすでに構えを取っている。

「やっぱりヒロキも関係者だったんだね。」

「チッ、当たってほしくなかった予想が当たっちまったみたいだね。」

「え？やっぱりえーくん、この人たちと知り合いだったの？」

「なのは…封印はもう終わってるのか？」

「うん、あの子たちがもう終わらせたみたい。そこでお互いのジュエルシードを賭けて勝負しようってなって。」

「ジュエルシードは渡せない。」

「うん、いくよ。」

2人は魔法で飛び上がり、戦闘がはじまった。

「なのは！」

「おっと、アンタたちの相手は私さ。」

ユーノがなのはの方へ行こうとしたがアルフに遮られてしまう。

「いいのか？お前1人で…。」

「フェイトも私も負けないよ！」

「そうか。だったら覚悟しな。俺は今まで魔導師には負けたことがないんだぜ？」

戦ったことないからな！

「やっかいだね…。」

「チートがあろうとなかろうと、決めたことは貫き通す！それが俺の漢道！俺を誰だと…くぼあぁぁぁ！」

「何やってんのさ、浩樹！」

「あ、ゴメン。なんかつい手がでちゃったよ。」

「ここ、こういうときは相手がセリフを言い終わるまで待つもんだ

ろう！？」

せっかく、熱い兄貴っぽいセリフで決めようと思ったのに！

「っていうか浩樹なんかいつもと違わない？」

ユーノがなにか訳のわからないことを言ってるな。俺はいつも通りだ。いつものカッコよくて強い俺じゃないか。さっきはちょっと油断したがな。

「ふ、なかなかいいパンチ持ってるじゃねぇか。」

「鼻血出しながら言われても…」

俺はさっと後ろを向いて鼻血をぬぐった。

「ふ、なかなかいいパンチ持ってるじゃねぇか。」

「……」「……」

今の状態の俺でもこの沈黙は痛かった…。

「あーもう！ごちゃごちゃうるさいよ！」

アルフはオオカミ形態になり再び向かってきた。

「クッ、やっぱり使い魔だったか。浩樹、下がって！今のキミじゃなんか危ない！」

何故かユーノに庇われた。おかしいな。これがいつもの俺のはず

なんだが…。

ユーノｓｉｄｅ

浩樹の様子がおかしかった。いつもならもっと考えてしゃべるし、動く。敵の使い魔の攻撃をなんとか防ぎながらボクは考えた。

お酒だ！

酔っ払ってたからあんな状態だったのか。こんなときに戦力にならないなんて。

「よくわからないけど、相手にしにくかったから助かったよ！」

「どういうことだ！」

相手も妙なことを言い出した。相手にしにくいとはどういうことだろうか。

「ちょいとあいつの関係者に恩があってね！」

魔導師のほうも浩樹を知ってるみたいだった。それにすずかさんのところでもあの魔導師の名前を知ってたようだし。浩樹は誤魔化してたけど。

それにしても恩？それは浩樹とどんな関係があるんだろう？

「チェーンバインド！」

「当たらないよ！」

浩樹のほうに視線を向けてみると何故か頭をかかえている。

あの人は何をしているんだ！

「そろそろ、終わらせるよ。ハァッ！！」

しまった。今までは防御魔法でなんとか耐えていたが、フェイントに引っかかってしまった。ボクにはもう全範囲の防御は張れない。やられるっ！

「捕縛、二式。」

今まさにやられそうなときに青色の鎖が敵を縛りあげた。

「なんとか正気に戻った。ユーノすまん。だからお願い、さっきまでのことは忘れてください。」

Ｓｉｄｅｏｕｔ

フェイトｓｉｄｅ

この前よりも魔法の使い方がうまくなってる。

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｓｈｏｏｔｅｒ．』

「シュート！」

パ　　シャ

かわしづらい攻撃を多用してくる。今、この戦ってる間にもその成長がみられる。うかうかしていたらこっちがやられてしまう。

『Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ．』

「ファイア！」

パ　　シャ

なんとかかわしながら私は生成したスフィアで迎撃する。

正直なところヒロキの知り合いならば余計に戦いたくないけれど…ダメだ。今は戦いに集中しなければ！

「あなた、名前は？」

「フェイト。フェイト・テスタロッサ」

「私は高町なのはだよ。ねぇフェイトちゃん、どうしてジュエルシードを集めるの？それにえーくんのことを知ってるの？」

私はその問いに攻撃で応えた。

「キャッ！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』

いいデバイスを持ってる。才能のある魔導師に優秀なデバイス。
うまく信頼し合えているようにみえる。でも、それは私も同じこと。
私とバルディッシュは負けない。

「バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ．　Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ．』

バルディッシュを鎌の形状へと変化させ、私は接近戦に移った。
これまでの攻撃を見る限り、あの白い魔導師は接近戦が苦手のはず。
遠距離では互角だったが、こちらの土俵に持ち込めば！

「ハァッ！」

――ガキィン

「なんでそんな目で戦ってるの？」

そんな目？どういうことだろう？

『Ａｃｃｅｌ　ｆｉｎ．』

その発言に気を取られてしまい、高速魔法で距離をとられてしまった。

「教えてくれるまで諦めないから！」

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ．』

「ディバイーン…バスター！！」

「言葉だけじゃ伝わらない。だから、行動で示していくしかないんだ！」

母さんに認めてもらうためには結果を出さないといけない。ただ甘えさせてなんて言うだけじゃ母さんには伝わらない。勝ってジュエルシードを母さんに届けないと認めてもらいないんだ！

「サンダーレイジィィーーー！！！」

Ｓｉｄｅｏｕｔ

「なのは…もうここまで…。」

「でも甘いね。あれじゃあフェイトには勝てない。」

ユーノと俺の魔法で縛られたままのアルフが２人の戦いを見てそう声をもらす。２回目にして戦い方が随分うまくなっているなのは見ればユーノの気持ちもわかる。俺がいる分負けられないという気持ちが強かったのだろう。

それにしてもアルフが人型じゃなかったのが残念だ。人型だったらいいしばｒ…ゲフンゲフン。まぁ、まだあっちは完成してないから仕方ないか。おっといいシーンだ。パシャ

「発動はなのはのほうが早い。これなら！」

「ユーノ、ちょい待ち。そんなことをフェイトが気づいてないと思

うか？」

「あ、そうか。ってことはあの魔法は…。」

「おとりで本命は別…ってところかな。」

魔力が多いのはわかってると思う。なら、あんな真正面からの攻撃をそのまま受けるわけがない。なのはがもっと戦い慣れしてればそっちの対策も立ててるだろうけど。

そして砲撃は拮抗したが、桜色の光が押し勝った。しかし、なのはの後ろにはサイズフォームのバルディッシュの鎌を突きつけているフェイトがいた。

『Ｐｕｔ　ｏｕｔ』

「主人想いのいいデバイスだ。この子を守ろうとしたんだね。」

レイジングハートはなのはに傷を付けさせないために降参し、ジュエルシードを差し出した。

「にしてもヒロキはよくわかったね。アンタ、魔法使いはじめたばかりなんだろ？」

「岡目八目ってやつでね。外から見てた方がわかることもあるんだよ。」

なのはが負けたということはこちらの負けだ。俺はアルフのバインドを解いた。

「さて、ヒロキ。次はこんな風にはいかないよ。」
「好きにしなさいな。俺はともかくなのははもっと手強くなるぞ。」
「私的にはアンタもやっかいなんだけどね。心情的に。」
フェイトもこっちにやってきて俺に言った。
「ヒロキ、ゴメンね。」
そしてアルフとともに去っていった。
「ごめん、ユーノくん。負けちゃった。」
「次あったら取り返そうよ。あの人たちはきっとまた戦うことになるから。」
「そうだ。次頑張ろう～。」
いいよね、次から頑張る。明日から本気出す、の次くらいに好きな言葉だ。
「さて、じゃあ部屋に戻ろうか。」
「ちょっと待って。」
なのはに引きとめられた。はて、なんだろう？
「まだ、フェイトちゃんと知り合ってたこと…聞いてないよ？」

「そ、それはだなぁ…」

「しかも嘘ついたよね。知り合いじゃないって。」

「嘘はついてないよ！？ほら魔導師ってことは知らなかったわけだしさ！」

「そんな言葉遊びはどうでもいいの。ちょっとなのはとお話しよ？」

チャキっとデバイスを構えながらそんなことを言い出すなのは。

それは１０年後まで取っておこうよ！力でいうことをきかせるなんて間違ってる！（俺の都合的に）

「ユーノ、助けて！」

「ボクもちょっと気になってたし。それに自業自得でしょ？」

「裏切り者！」

「昼間のボクのセリフだね。」

フェレットくんにも見捨てられてしまった…。

「それじゃ…逝こうか？」

「あ、あ、あ……説明しますから、デバイスをお納めに…」

俺のお願いになのはは笑って答えた。

「だぁ〜め♪」

第１０話　俺は今まで魔導師には負けたことがないんだぜ？（後書き）

こんな感じになってしまった。いかがでしょうか？

第１１話　危険物は説明書を読んでから使いましょう。

いや～、あの夜のなのはは恐かった。俺が説明してる間、スフィアが俺の周りをふわふわと漂ってるんだよ？あれはまさしく尋問だった。それも拷問付き。外で正座とかもう…。なんていうかいろんな意味で成長が早い気がする。

と俺がぼーっとしながら回想していると

「いい加減にしなさいよ！」

アリサが叫んでいた。

「ごごご、ごめんなさい！！……ってあれ？」

どうやら俺ではなかったらしい。回想していた内容が内容だったものだから過剰な反応をしてしまった。声のしたほうに視線をやるとなのはが怒られてるみたいだ。

「ごめん、アリサちゃん…。」

「ごめんじゃないわよ！」

心配そうになのはを見るすずかを伴ってそのまま教室から出て行ってしまった。

何が起こった？

「なのは、何でアリサに怒られてたんだ？」

「にゃはは…、フェイトちゃんのことが気になっちゃって。でも魔法のことは話せないし。」

そっか。話せない内容に合わせてフェイトのことも話せなくてやきもきしたアリサが怒鳴ったってわけか。それに加えて「うーん、でも…やっぱり…」みたいな焦らしかたされたらイライラするしな。見てないが。というか…

「話せばいいじゃん。」

「えぇ!?だってユーノくんは秘密にしないとだめだって…。」

大体、魔法少女なのを秘密にするのってバレると大変なことになるからだろ?ほら、カエルになったり、オコジョになったり…ってもうオコジョいるじゃん。

「よし、ユーノに聞いてみよう。」

(というわけなんだけど話してもいい?)

(何がというわけなのかわからないんだけど…)

(魔法のことってどの程度まで話していいの?)

(厳密に決まってるってわけじゃないけど、話さないほうがいいのは確かだと思う。)

(なのはがフェイトのことで悩んでるのをアリサたちに感づかれてさ。ケンカちゃったんだよ。)

（そっか。ゴメンね、なのは。ボクのせいで…）

（ユーノくんのせいじゃないよ！もう私は自分の意思で決めたんだよ。）

（ありがとう。なのは…アリサさんたちに話しても大丈夫だよ。責任はボクが取るから。）

やだ、このユーノカッコイイんですけど。

（で、でも…）

（どう言いつくろっても巻き込んだのは事実だしね。気にしないでよ。）

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴ってアリサたちも戻ってきた。念話を使ってるんだし、授業中でも話は続けられる。

（今はユーノの言葉に甘えておけ。アリサたちは大切な親友なんだろう？）

（うん…）

どうやらまだ釈然としない様子のなのは。やっぱユーノに迷惑かけてるのが気になるのかね？お互い様だと割り切れてないみたいだ。俺が勝手に話してもいいんだけど、やっぱりこういうのって本人同士で話すのが一番だからなぁ。

そしてその日の夕方。ジュエルシードの探索。すでに日は落ちて暗くなっていた。

結局、なのははアリサたちに魔法のことを話さなかった。というよりまだ話すべきか悩んでいるようだ。探索中もどこか上の空で話しかけてもあまり反応がない。

「なのはそろそろ帰ったほうがいいじゃないの？」

そんな中ユーノがなのはに声をかけた。

「……え？あ、まだ大丈夫だよ。帰りが遅いときは魔法関係ってみんなわかってるから。」

「余計な心配かけないほうがいいと思うけどな。」

――キィン

若干どんよりとした空気の中ジュエルシードが発動した…がその空気はいつもと異なっていた。

「ユーノ、これは？」

「たぶんあの子達が強制発動させちゃったんじゃないかな。こんな街中なのに。ボクは結界を張るから浩樹はなのはと先に行ってて！」

「わかった。」

なのはと俺はユーノの言葉に従いジュエルシードの発生地点に向かった。

「レイジングハート、お願い！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ.　Ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔ　ｕｐ.』

ここで参考までに説明しておこう。何故俺がなのはの変身シーンの写真を取っていないかについてだ。期待した人も多いことと思う。

お、俺は違うけどな！

コホン、んでその理由なんだけど変身の際は全身が光に包まれて外からは見えないんだよ。それに加えて一度組んだ術式っていうのはプログラムとして保存したような状態になるから二度目以降の起動は早くなってしまうんだ。テスト起動してればそれも関係なくなるってわけさ。

「フェイトちゃん！」

そして俺たちはたどり着いた場所でフェイトたちと対峙した。

なのはｓｉｄｅ

ユーノくんはああ言ってくれたけど、私はまだ悩んでいた。そのせいでアリサちゃんたちを怒らせてしまった。えーくんもいろいろ助言してくれたけど…。どうすればいいんだろう。私はみんなに笑

っていてほしいだけなのに。

「フェイトちゃん！」

「やっぱりアンタたちも来たんだね。」

フェイトちゃんは前にあった時と同じ目をしていた。

ああ、あの目は知ってる。あの子も何か寂しがってる。その何かは今はわからない。でも、私はその何かを知りたい！

「もう一度自己紹介させてもらうね。私は高町なのは。聖祥小学校の3年生。」

よかった。フェイトちゃんは耳を傾けてくれてる。

「ジュエルシードのせいで関係ない人たちが傷つくのがイヤだから。だからジュエルシードを集めてる。これが私の理由！フェイトちゃんは？」

「私は…」

「フェイト！言わなくていい！」

フェイトちゃんが何かを言うとしたところで使い魔のオオカミさんが私に襲い掛かってきた。

「おっと、ここは本人たちにやらせてあげような？」

えーくんが光の鎖でオオカミさんを止めてくれました。

「ヒロキ…。容赦はしないよ。」

「て、手加減くらいしてもおいちゃん、バチは当たらないと思うなぁ～。」

なんだかえーくん、腰が引けてるけど…。でもこれでフェイトちゃんと一対一だ！

「お話聞かせて。」

私はレイジングハートを構えた。

「必要だから、としか言えない。」

フェイトちゃんも同じように構える。

「いくよ！」

私は今度は負けない、という思いでフェイトちゃんに向かっていった。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

「や、ちょ、手加減してって言ったじゃん！」

「聞けないね！いろいろ思うところはあるけどフェイトの足かせになるわけにはいかないんだよ！」

俺は泣きそうな声をあげて必死にアルフの攻撃をよけていた。嘘です。たまに当たってます。直撃じゃないおかげでなんとか持ってると言っていいくらいだけど。変な避け方をしてるせでもあるが。

（ユーノぉぉぉぉ、早く来てくれぇぇぇ！）

（浩樹、戦況は？）

（俺が必死で逃げてる！）

（……とりあえず、もう着くから。）

動きは士郎さんたちのおかげで見えてはいるけどやっぱり体がついてこない。一瞬、一瞬でいい。それでアルフは捕縛できる。けどその一瞬が足りない。

「アンタもなんであんな甘ったれの味方なんかしてるんだい？」

「いいじゃん、甘ったれ。甘ったれにも意地ってのがあるんだよ…ってあぶなっ！」

やばいぞ～。本格的にやばくなってきた。

「浩樹！」

ナイスなタイミングだ！ご都合上等。あとでなのはの写真を進呈する！

「チッ、あのときのフェレットかい。」

2対1となったことでアルフが一歩引いた。よっしゃ、条件は整った。

「浩樹、平気？」

「ああ、あんなんちょろいぜ。」

「急に態度がでかくなったね。」「あんなに必死にボクを呼んでたくせに…。」

2人が同時にツッコミを入れてきた。

「ええい、うるさい！かかってこいやぁ！」

「たかがネズミ一匹増えたからって強がるんじゃないよ！」

アルフが大きく口を開けて飛び掛ってきた。

はぁ～い、飛び込んでいらっしゃいました～。

「設置型二式、発動。」

「な！？」

必死に逃げながらおいてきた二式を起動させたことでアルフはその四肢を拘束された。

「言ったろ？甘ったれにも意地があるってさ。」

助かった。設置したまではいいけど起動タイミングが掴めなかったんだよな。

「あんな必死だったのによくこんな作戦思いついたね。」

「思いついたっていうか…俺、これしかできないし。そのための準備しかしてなかったからな。」

「アタシを拘束するためだけに逃げてたってことかい。にしたってもっと正面からこれないのかい？」

「バッカだなぁ～。アルフにたかが小学生の攻撃が効くわけないじゃないか。」

魔力だってたいしたことないんだ。しかも相手はあのフェイトの使い魔。できることってのは自然と限られる。

「でもおかげでこっちはなんとかなったね。なのはのほうはどうなったかな？」

「はん、フェイトが負けるはずないよ。」

俺たちがなのはとフェイトの方向を見てみると2人の戦いはまだ続いていた。…ジュエルシードを放置したまま。

「な、なのは！ジュエルシード！」

「バカちん！なんで封印してないの！」

ジュエルシードはなんかやばい光を放ち始めていた。そしてそれ

に反応するように2人は同時にジュエルシードに向かっていった。

あれ？そういえばここで何か問題が起きたような…。

――ガキンッ

別々の方向から直接ジュエルシードにデバイスをたたきつけたことによってさらに大きなエネルギーを放出し、2人を吹き飛ばした。

「なのは、大丈夫！？」

ユーノがすぐになのはのもとに向かって駆け出し、その安否を確認した。

「私は大丈夫。でもレイジングハートが…。」

レイジングハートはあちこちにヒビが入り、だいぶダメージを受けたようだ。そしてフェイトのほうは――

「フェイト！？」

すぐに飛び上がってジュエルシードを鷲掴みして強引に止めようとしていた。

「止まれ、止まれ、止まれ、止まれ！」

あ～もう！あの子頑張りすぎだ！見ててすんごい痛々しいわ。……仕方ない、俺はサポーターだ。それはなのはだけのじゃない。

俺は意を決してフェイトに向かって駆け出した。そしてその手を

重ねた。

「ひ、ヒロキ？」

「頑張るのはいいけど、無茶はほどほどにしときなさいな。」

なんて格好をつけたのはいいけど…これメッチャ痛い！なんでフェイト我慢できてるの！？手の皮を剥がされてるかのような痛みだよ！

女の子の手を包み込むタイミングってここじゃないでしょ！ほら、冬とかに寒そうにしてる子にしてあげるとかさ。んで、頬を染めながら「あったかいね」なんて言ったりして。俺はそういうのが理想だったよ！

「「止まれぇぇぇぇぇ！！！！」」

ようやくジュエルシードの暴走は止まったようでエネルギー放出は止んだ。

「ふぅ…フェイト、平気か？」

「なんとか…一人じゃちょっときつかったから。」

ちょっとなんてもんじゃないだろう。少なくとも俺はもう経験したくない。

「ひ、ヒロキ、ジュエルシードなんだけど…」

俺としてはどっちでもいいんだけど…

「持って行きなさいな。頑張ったで賞だ。それに、あっちのオオカミさんが黙ってないみたいだし。」

グルルルと威嚇してるし、アルフ。俺がジュエルシードを取ろうもんなら襲い掛かってきそうだ。

「うん、ゴメンね。アルフ行くよ。」

ジュエルシードをレイジングハートと同じように傷ついたバルディッシュに収めて2人は去っていった。

「浩樹、大丈夫？」

「えーくん、ゴメンね。」

「メッチャ痛いです。ユーノ治療できるか？」

「うん、治癒魔法でできるところまで治すよ。」

「あ～生き返るわ～。なのはは気にするな。あれは事故みたいなもんだし。それとユーノ悪い、ジュエルシード。」

「仕方ないよ。浩樹はできることをやったんだから。」

なんとか痛みが引いてきた。本当に痛かったから助かった。今日はユーノに助けられっぱなしだ。

「えーくん、手はもう平気？」

「ああ、だいぶマシになった。傷は残りそうだけど。で、フェイトと話はできたのか？」

「ううん。話してもらえないって寂しいんだね。アリサちゃんの気持ち、わかった気がする。」

「そうか。どうするんだ？フェイトのこともアリサのことも。」

「まずはフェイトちゃんにお話を聞かせてもらう！それが終わったらアリサちゃんに説明しようと思う。中途半端にはしたくないから。」

「それをアリサさんたちに言ってみたらどうかな？それだけでも安心できると思うよ。」

ユーノもなのはにそう提案した。ユーノはユーノでそのことを心配してたようだ。

「うん！そうしてみるね。」

なのはは笑顔でその提案を受け入れた。

そして翌日の昼休み。なのはは話があると言ってアリサとすずかを屋上へと誘った。俺も関係者ってことで着いてきてと言われたのでそれに従った。

「今は詳しく言えないんだけど、寂しそうにしてる子がいるの。いろいろやろうとしてるんだけどうまくいかなくて…。それで悩んで

たんだ。」

「そうならそうと言ってくれればいいのよ。別になのはの秘密を暴こうとしたわけじゃないんだから。」

「でもアリサちゃんうれしそうだね。」

「ちょっとすずか！変なこと言わないでよ！」

「ありがとう、アリサちゃん。全部終わったらちゃんと話せると思うから。2人ともそれまで待っててもらえる…かな？」

最後だけ不安そうにアリサとすずかの顔を上目遣いで機嫌をうかがうように見た。

「当然じゃない。私たちはアンタの親友なのよ！」

「うん、そこは信用してほしいな。」

「アリサちゃん、すずかちゃんありがとう〜〜。」

感激してなのははアリサとすずかに抱きついた。

うんうん。いいねぇ〜。思わず目頭が熱くなる光景だ。パシャっと。

「A、アンタもちゃんとなのはを支えて…ってまた撮ったわね！」

「いや、これは撮らずにはいられなかったんだ。見てくれよ。」

美しい友情の光景を写真に収めて何が悪い！とばかりに俺はそのデータを見せ付けた。

「わぁ～、ねぇもちろん、私の携帯にも送ってくれるよね？」

３人に送る約束をして俺たちは教室へと戻った。

いや～めでたし、めでたしだな。

…俺の手以外。まだちょいと痛みます。

第１１話　危険物は説明書を読んでから使いましょう。（後書き）

１ｓｔのＤＶＤ特典の座談会面白かったっす＾＾

第１２話　現実は予想の斜め上をいくものである。

ちくしょう！ようやくここまで追い詰めたのに！

「最早アナタもここまでね。楽に死ねるように一瞬で殺してあげるわ。」

「クッ、俺は…俺は絶対諦めないからな。プレシア…テメェは絶対俺が倒してみせる！」

「あら、そんな状態からどうやって？あれほどあった魔力ももう尽きているのに？」

何か…何かあるはずだ。みんなを救う方法が。

「さぁ…アリシアの糧となって死んでしまいなさい。」

絶体絶命の状況なそんなとき、あいつらの声が聞こえてきた…。

（えーくん！あきらめないで！）

（浩樹、キミはこんなところで終わる男じゃないだろう！）

（ヒロキ…頑張って。）

（それでも男かい！？男を魅せな！）

なのは、ユーノ、フェイト、アルフ…。そうか、俺はこんなにも支えられていたんだな。だったら俺も覚悟を決めなきゃ締まらねぇ

よな！

「リミット、ブレイク…『〇〇の〇〇』」

「な！？こんな力をどこに隠し持っていたというの！」

力が…力があふれ出す。あいつらの想い、確かに受け取った！

「さぁ、ラストバトルといこうか。」

「ふん。所詮は死に損なった子どもの悪あがき。この大魔導師の力には及ばないわ！」

見てろよ、みんな。俺は勝つぜ。

そして俺たちの最終決戦がはじまった。

まぁ、嘘だけどな！

ああ、君たちの言いたいことはわかっている。ハイハイ、厨二病乙って言いたいんだな？でもさ、こういう展開って憧れない？ほら、みんなの力で最後の力を振り絞ってボスに挑む、みたいなさ。

……いいじゃん！こういうのに憧れても！だって、俺の今の戦い方って　逃げる→バインド　だぞ！？　なのはやフェイトが目の前でバスター！とかスマッシャー！みたいなのやられたら自分もやりたいって思っても仕方ないよ！

カッコつけたいよ！男の子だもん！

「浩樹はさっきから何やってるの？」

「アルフ対策としてちょっと細工を…」

いや、なんであんな妄想をしてたか、というとだな。ちまちまと罠を作ってる自分が情けなくなってくるのよ。なんていうか誰も引っかかるどころか気づきもしない落とし穴掘ってるような気分なんだ。

「そこに引き込むんだね。もっと用意したほうがいいんじゃない？」

「うんにゃ、空飛ばれたら俺終了しちゃうし。ちょっと複雑な術式だから今のところ一つが限界。」

前回の戦闘で破損してしまったレイジングハートはそのダメージから自己修復完了までに半日かかった。そして迎えた本日の夕方。なのはの魔力に対する感覚がかなり鋭くなってきているようで発動しそうなジュエルシードが近くにあることがわかった。

ジュエルシードにかなり近い位置にはいるようだがまだ発見できておらず、現在なのはが探知魔法を使いながら探している。

俺はというとなのはがあれだけ察知できるならフェイトも来るだろうことを予想し、お試しを兼ねてようやく組み上げた捕縛三式を設置しているのである。

「前々から思ってたんだけど、浩樹のバインド、どうしてあんな名前なの？」

「正直いえば、魔法の技名を声高らかに叫ぶのが恥ずかしかったんだ。」

「だから、1，2，3なの？」

「そういうこと。」

妄想ではどんな技名でもわりとシラフでいられるけど、それが現実ってなると恥ずかしくなることってあるよね？

――キィン

「封時結界、展開！」

「えーくん、見つけた瞬間に発動しちゃったよ！」

「わかったからさっさと封印しなさい。」

なのはがレイジングハートを構えたと同時に黄色の魔力弾が飛んできた。――が発動してしまったジュエルシードを取り込んだ樹木はバリアを張ってそれを防いだ。

なのはは空へと上がり、フェイトは離れた位置でそれぞれデバイ

スを構えた。

「レイジングハート！」

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ．』

「バルディッシュ。」

『Ａｒｋ　ｓａｂｅｒ．』

「ディバイン…バスター！」パシャ

「アークセイバー！」パシャ

フェイトの飛来する鎌が敵のバリアを破り、その上からなのはの砲撃が直撃した。

ん？俺は何もしないのかって？どう考えても俺は邪魔だろ。ＡＡＡだっけか、その魔導師が２人もいれば俺は足手まといにしかならないし。

それにしてもこれだけ離れてしまうとやっぱり改造携帯の写真じゃもう限界だ。

てれれれってれ～♪忍さん印、パシャリーノ～。

「浩樹、そのカードケースみたいなのって何？」

「説明しよう！パシャリーノとは目に映る範囲内ならばどんな距離だろうと撮影が可能になるのだ！」

遠距離専用だがな！しかし、忍さん次第では近距離に対応させることもそう遠い未来ではないはずだ。

「そ、そうなんだ…。なのはに怒られても知らないよ？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「その芝居がかった口調は気になるけど、なんで？」

「もう覚悟はしてるからさ！」

と、くだらない会話をしているうちに封印は終わったらしい。

「ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ。」

「うん、昨夜みたいになっちゃったらレイジングハートもその子もかわいそうだし。」

なのはの発言に驚いたような表情を浮かべるフェイトだったがすぐに切り替え、バルディッシュを構えた。

「でも、譲れないから。今回ももらっていく。」

「私もユーノくんにこれ以上情けない姿は見せられない。」

ねぇ…俺は？

「それに私はフェイトちゃんのこと聞かせてもらいたいし、私のことも聞いてもらいたい。」

２人はそうしてお互いのデバイスを振りかざし、戦闘がはじまるその瞬間。

「スト――…」

「あああぁぁぁぁぁ！？忍さん、これ写真撮れてないよ！これじゃあただの望遠鏡じゃん！」

「え？」

「な、何！？」

まさに戦闘を始めようとしていたため、２人はデバイスを振り下ろすところだった。そして俺の叫び声に揃って気を取られ、その軌道がずれた。おそらくそのせいだろう。

――ゴンッ！

間に入った黒い人が２人の攻撃を止められず頭で受けてしまったのは…。

「くぅ～…す、ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！ボクは時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらうぞ！」

…うん、若干怒気が篭ってるのは気のせいだ。きっとそうだよ。ほ、ほらバタフライ効果ってこういうこと言うんじゃない？だから俺のせいじゃない…と思います。

「管理局の執務官だって？」
「あれ？ユーノ連絡してたんでしょ？」
「結構エリート役職の人だから。もっと下の人が来ると思ってた。」
「なるほどね。ところでアレって俺のせいじゃないよね？」
「緊張感なく写真なんか撮ろうとするからだよ。」
「庇ってくれるよね！？」
ちょっと冷たい感じのユーノです。キミとは友達だと思っていたのに！
「君たちの話も聞かせてもう。」
ちょっと頭を痛そうに押さえながらこちらに向かってくるクロノ。しかし、それはアルフによって遮られた。
「フェイト、撤退するよ！」
それでもジュエルシードは持っていこうとフェイトは向かっていくが、クロノがそうはさせまいと魔力弾を放った。そして落下したフェイトに追撃をかけようとしたところ――
「撃たないで！」
なのはがフェイトを庇うようにクロノの前に立ちふさがった。

「フェイト、しっかり掴まって。」

フェイトを背中に乗せてアルフは逃げていった。

「まぁ、仕方がない。片方の魔導師とロストロギアを回収できただけでよしとするか。」

ジュエルシードを回収し、クロノは”とある位置”に着地した。

「それで…ってうわぁぁぁぁ！」

クロノは突然発生した魔法に驚きながらも拘束されていく。両手が後ろで拘束され、両足も同じように固定されてエビ反りになった。そして胸部と股にも青い光の紐が現れ、締め上げた。

「……お、俺のせいじゃ……ない、よ？」

「これに関して言えばその通りなんだけど…。」

「え、え？なんでこの人縛っちゃったの！？」

だって、だって、俺だってこんなの予想してなかったよ！だ、誰が好き好んで男なんかにこんな縛り方なんてしなきゃいけないんだよ！

「わざとじゃないんだ！」

パシャ

「いいから早く解いてくれ！ボクだってこんな格好でいたくない！」

「つ、罪とかにしたりしない？」

「しないから早く解くんだ！」

よし、これで大丈夫。あぁ、よかった。これで逮捕する！なんて言われたらどうしようかと思った。

『あの、早く解いてあげてくれないからしら？そ、その亀甲縛りを。』

目の前にモニターが現れ、そこに少し頬を赤く染めた一人の女性が映し出されていた。

…ってちょっと待て。あなたは何故この拘束の名前を知っている！？

「きっこうしばり？えーくん、そういう名前なの？」

やめて！そんな可愛らしく首をかしげてそんなこと聞かないで！とと、とりあえずこのバインドを解かねば…。

「ようやく解放された…。艦長、すみません。一人逃がしてしまいました。」

『それはいいんだけど、クロノ大丈夫？変な趣味に目覚めたりしてない？』

「してません！」

『それはよかったわ。それであなたたちなんだけど。先ほどの件も詳しく聞かせてもらいたいからこちらにきてくれないかしら？』

ん？……あぁ、この人がリンディさんか！すっかり忘れてた。

「だが断る！」

「いい加減にしてくれ…。」

「浩樹、おわびも兼ねて行こうよ。管理局ならどの道、説明しないわけにはいかないし。」

「ゴメン、１回言ってみたかったんだ。」

「えーくん、まじめなお話なんだよ？」

なのはのちょっと呆れたような表情が俺の心に刺さっていた。

そしてやってきました。アースラ！宇宙船ってなんかこうわくわくするものがあるね。

「いつまでもバリアジャケットままじゃ窮屈だろう？デバイスも解除しても大丈夫だよ。」

「なんか、その発言って服着たままじゃ邪魔だから脱げみたいに聞こえない？」

「そんなこと言っていない！」

クロノってからかうと面白いなぁ～。

「ねぇ、コング先輩って呼んでもいい？」

「頼むから普通にしててくれ。」

疲れたような表情でクロノはそう言った。さっきのバインドがよほど堪えたらしい。

「えーくん、冗談ばっかり言うんだから。ちょっとえっちだし。」

「あのクロノ執務官、浩樹のいうことは適当に流すくらいでちょうどいいんで。」

「クロノで構わないよ。そうか。助言、感謝する。キミも元の姿に戻るといい。」

「あ、そうですね。ずっとこの姿だったから忘れてました。」

魔法陣を展開し、ユーノの体が光に包まれて人の姿へと変わった。

おぉ、なかなかの美少年だ。フツメンの俺とは大違いだな。なのはを見るとユーノを指差しながら口をパクパクさせてる。ちょっとおもろい顔なんで…パシャっと。

「ふ、ふえぇぇぇぇ！？ゆゆゆ、ユーノくんが人間になったぁぁ！！？？」

「あ、あれ？初めてあったときってこの姿じゃなかったっけ？」

「違うよぉぉ！！」

「君たちの間で何か見解の相違でもあったのか？」

「それがな、なのははようやくフェレットと愛を育む覚悟を決めたのに人だったと知って混乱してるんだよ。」

「えーくん！変な嘘教えないでよ！」

「さっきの発言の意味がよくわかったよ。」

「わかってくれましたか。」

なんか知らないがユーノとクロノが友情を深めていた。コラ、仲良くため息なんてつくもんじゃないぞ！

「艦長を待たせてるんだ。ふざけてないで行くぞ。」

もうちょっと乗ってくれてもいいと思うんだ。お前さんたちもそう思わないか？

第１３話　宇宙船には秘密がいっぱいだ。

旅行をしたことはあるかい？自分の住んでいるところとは別の…そう、海外なんかがいい。まるで違う文化の場所に行くときの話だ。きっと移動中なんかはわくわくしていることだろう。それは何故か、自分の日常とは違う何かを見たりすることができるという理由は大きな割合を占めると思う。

おっとすまない。何故、俺がこんな問いかけをしたかというとだな。

「ようこそ、時空管理局・巡航Ｌ級８番艦アースラへ。３人とも楽にしてくれて平気よ。」

宇宙船の中でいかにも茶会を始めます、みたいなセットがあって俺のわくわく感がなくなってしまったからだ。

それからユーノによる事情の説明が始まった。

「というわけで、ボクが発掘の責任者でもあったのでその回収を現地の協力者と一緒に行っていました。」

「そう、立派だわ。」

「だけど同時に無謀でもある。」

ん？ちょっと待て。確かユーノは管理局へ連絡をしてたんだよな。

少し言葉きつくない？

「じゃあなんでこっちに来るまでに時間かかったの？」

「何を言っている。ボクたちは次元震をこのアースラで感知したからその調査に来たんだが。」

「そんな。ボクは現地入りする前にちゃんと管理局への連絡はしていたはずなんですけど。」

「あら、それはおかしいわね。エイミィ、本局への問い合わせをお願いできる？」

『了解しましたぁ！ん～と……調査員の選定、そして回収をする人材を探すのに時間がかかってたみたいです。本来の回収担当の局員は負傷したらしくて。』

「わかったわ。報告ありがとうね、エイミィ。」

『いえいえ、それでは仕事に戻ります。』

そういうことか。調査団を組むのにも時間はかかるだろうし、多少の危険はあっても管理外の世界となれば滅多なことは起きないと思って危機感は減ってしまうのかもしれない。

「すまない、少し言葉が厳しかったみたいだ。」

クロノが素直に謝罪する。少し悔しそうなのは上の危機感の少なさからだろう。

「逆に感謝するわ。あなたの行動が早かったから被害はかなり抑えられたみたいだし。」

「あ、あの！ロストロギアって何なんですか？」

話についていけなくなりそうに感じたのか。なのはが質問した。

「実は自動車のパーツの一部なんだ。ロストロって部分のギアってこと。」

「嘘だよ！っていうかえーくんも知らないでしょ！」

ゴメン、真面目な空気って苦手なんだ。

「ふふふ、あなたたちにもわかりやすく説明すると進化しすぎた技術の遺産といったところかしら。」

「失われた危険な技術や魔法などを総称してボクたちはロストロギアと呼んでいる。使用法がわからないものは多いが一歩間違えば世界どころか次元空間さえ滅ぼしかねない危険なものだ。」

「対処を間違えばそれほどの危険があるもの。だから私たちはそういったものを管理してるの。特に今回のジュエルシードは特定の条件化で発動するエネルギー結晶体。」

「君たちも見たんじゃないのか？1つですら小規模とはいえ次元震を起こしているんだから。」

あ…となのはは声を漏らした。フェイトとぶつかった時の事を思い出したようだ。

それからもジュエルシードおよび次元震の危険さを細かく説明された。平行世界が滅んだとか言ってるけどなのははそれがわかるのか微妙だ。若干誰に説明してるのかわからなくなってくる。

そんなシリアスな空気の中リンディは抹茶？に角砂糖をいれた。

え、これってツッコミ入れろってサイン？いや、知ってはいたけれども…。なのはも信じられないような顔をしてるし。っていうか苦いのがダメだったら飲むなよ。

「これよりロストロギア、ジュエルシードに関しては時空管理局が全権を持ちます。」

「君たちは今回の件は忘れて元通りの生活に戻るといい。」

「で、でも！私にも力が！」

なのはが抗議しようとするが、

「次元干渉に関わる問題だ。民間人が介入できるレベルの事件じゃない。」

と厳しい口調でクロノはなのはの抗議を却下した。

だろうな。殺人事件で自分は弱くないから協力させろなんて言って通じるわけがない。無論なのはがそう言ってるわけじゃないが。

「こんなことといきなり言われても気持ちの整理がつかないだろうし、一旦気持ちを整理してまた話さないかしら？」

諦めきれなさそうだし、改めて説得しようとしてるんだろうけどさ。

「いや、大丈夫ですよ。なのははこっちで説得しときます。」

「えーくん？」

「ただ、管理局の対応が遅れるようだったらさすがに止めに入ってもいいですよね？」

正直ジュエルシードだけなら管理局だけでなんとかなるかもしれないけどその対応が海鳴の町を巻き込まないとは言えない。きっとリスクのあるベストよりリスクの少ないベターを求めるだろうから。

「ボクたちが信用できないってことか？」

「信用できないっていうか信頼できる基準がないってことかな。他世界の文化というか組織だし。」

「そう考えるのも無理はないわね。魔法文化がない世界だと私たちと係わり合いになるなんてほとんどないんだし。」

（というわけで俺たちを手元に置くというのはどうでしょう？）

俺はそう念話でリンディに話しかけた。

（あら、さっきのはやっぱり建前だったのね？）

よくわかってらっしゃる。

（なのはを止められる自信がないもので。）

（できないこともないんでしょう？）

（俺は魔法使われたら瞬殺される自信があります。）

俺に何を求めてるんだ？止めようとしたところで…えーくんどいて！→バスター！ではい終了。壁にもなれない。

（ずいぶん後ろむきな自信ね。）

（俺は自分大好きですからね。というわけでどうですか？勝手にされるよりはマシかと。）

（そうね。こちらとしても立場上、協力を頼むってわけにはいかないから。）

「クロノ、好きに動かれても困るし一時的な協力体制を取ることにしましょうか。」

「艦長！相手は民間人でさらに子どもですよ！？」

うん、その指摘は実に正しい。俺の常識でいえばお前も十分子どもと言える年齢だけどな。

「安全面も考えてのことよ。管理外の世界とはいえ私たちの管轄事件で民間人を放置して怪我させるわけにもいかないの。」

勝手に動いてケガしてもそれはこっちの責任だけどね。

「艦長がそう言うのであれば…。ただし！君たちはちゃんとこちらの指示に従ってもらうぞ！」

「はい、わかりました。」

「わかりました！」

「そしてここで断ってみる。」

「なんでだ！」

「クロノ、さっきも言ったように真面目に相手にしないほうが…。」

「そ、そうだったな。ボクとしたことが感情的になってしまった。」

スルースキルを会得される前になんとかしないといけないけど、さすがにそろそろ時間が…。

「にぎやかになるわね。今日はもう遅いから詳しい話は明日にしましょう。ご家族との話もあるでしょう。」

というわけで解散となったが俺は言わずにはいられなかった。

「リンディさん…。」

「あら何かしら？」

「リンディさんみたいな人でもエッチな本とか読むんですか？」

だってどう考えても他世界には無さそうな縛りなのに知ってたんだもん。こっちの世界の本なり見ててもおかしくないと思う。そしてこんな美人にこういう質問するのはドキドキする。

「ちち、違うのよ？あれはね、そ、そう！アレは管理外の世界の文化を勉強してて、たまたま！たまたま混じってたのよ！」

「たまたまですか～。」

「そ、そうなのよ。全く困ったものね～。」

やだこの未亡人かわいい。しかも誤魔化し方がエロ本を見つけられた思春期の少年みたいだ。

「母さん…。」

落ち込むことはない、クロノ。きっと出来心だったんだよ。

「コホン！あとは明日話しましょう、ね？ね？」

「わかりました。ではまた明日。」

「すみません、浩樹が…。」

ユーノが申し訳無さそうに謝って俺たちは海鳴へと戻った。

「…えーくん、魔法でえっちなことしようとしてたんだね。」

「違うって、偶然なんだよ。たまたまあんな形になっただけで。」
「えーくんってちょっとえっちな人だと思ってたけど変態さんだったんだ。」
「浩樹って変態だったんだね。」
「そ、そんな目で俺を見ないで！俺は変態じゃないよ！」
ユーノがこの年だから男ならわかるよな、なんて言えないし…。ってそうだ！
「ユーノだって人間なのに女湯に入ってたじゃないか！あれだって変態じゃないの？」
「浩樹が見捨てたんじゃないか！」
「だからと言って男が女湯に入ったという事実は変わらないな。や～い淫獣～。」
そこ、悪口がガキっぽいとか言わない。
「くそ、変態のクセになんて言い草なんだ。」
「2人ともあとでなのはとじっくりお話するの…。」
「「だってコイツが！」」
なのはは素敵な笑顔でこう言った。

「2人ともってなのはは言ったよ？」

なのはが魔王だっていうのはギャグの類。そう思っていた時期が俺にもありました。

「というわけでしばらく宇宙船にお泊りすると思う。」

我が両親に説明中です。時間ができたらリンディさんも事情説明に来ると言っていたが魔法のことも含めて改めて話した。

「宇宙船まで出てくるとは壮大な話になったなぁ。」

「私も乗ってみたいわ。」

「船の中の一角が何故か和式だったけどさすが宇宙船って感じだったよ。」

魔法よりもアースラの話で盛り上がった。使えない魔法より乗れるかもしれない宇宙船というわけだ。

「何とか頼んで乗せてもらえないのか？」

「頼んでみるのはいいけど向こうも仕事だからどうだろ？」

「お前は口だけは達者なんだからなんとかしろ。」

「口だけとはなんだ、俺だって魔法使えるんだぞ！」

「ほう、どんな魔法を使えるんだ？」

「あ、相手を縛る魔法…」

「あはははは、それ魔法じゃなくてもいいだろうが。お前はしょぼいなぁ。」

「あら、魔法が使えるだけでも素敵なことよ？そのうちお母さんにも見せてね。」

「うん、母さんの言う通りだ。俺にも今度見せるんだぞ。」

切り替え早すぎだろ親父…。

翌日の朝、クロノと出会った公園でなのはと待ち合わせた。

「おはよう、なのは。士郎さんたちにちゃんと説明したか？」

「うん。ユーノくんも一緒にいたし、わかってもらえたと思う。」

「2人ともゴメンね。管理局が来るまでってことだったのに。」

申し訳無さそうにユーノがそう言うが俺となのはからすればそれはもう関係ない。

「ユーノくん、これは私が自分で選んだの。それにもうお手伝いじゃないって言ったよ？」

「そういうこと。不謹慎かもしれないけど、俺はちょっとわくわくしてるんだ。」

「わくわく？」

「普通に暮らしてたら味わえなかった非日常って状況にな。」

「それは私もそうかも…。」

俺は正直ここまで刺激が強いとは思っていなかった。多くないとはいえ魔力もあり、それを行使できる。想像以上の感覚。なのはも俺もきっとその感覚に酔ってしまっている。だからこそ、より安全に魔法を行使できる環境ができるのは助かる。

「待たせた。それじゃあ行こうか。」

クロノも迎えにやってきて、俺たちはアースラへと向かった。

・おまけ　～あの後のアースラ～

「艦長！コレですか？さっきの子、浩樹君でしたっけ、が言ってたエッチな本というのは。」

「エイミィ！？そ、それをどこで？」

「うわ～すごいですね…。こんなことまで。」

「やめて、見ないで！」

「いいじゃないですか～。ちゃんと黙ってますから♪」

リンディは今のエイミィが止められないことを知り、膝をついてうなだれた。エイミィがキャッキャ言ってる中、クロノもそこへとやってきた。

「艦長、ちょっと確認したいことが…って何してるんですか？」

「いや～クロノくんもいつかこんなことするのかな？や～ん、クロノくん鬼畜～。」

「ななな、何を見てるんだエイミィ！！」

「おやおや？クロノくんも興味がありありかな？」

「エイミィ、あなたさっき黙ってるって！」

ハラオウン親子がエイミィにからかわれて揃って顔を真っ赤にしている。そしてエイミィはご機嫌な様子で戻っていった。

「あいつ…いつか弱みを握ってやる…。」

「クロノ、私も協力するわ。」

こうして親子の絆はある意味深まった。

（でも、母さんがあんな本を持ってるなんて…複雑だ…。）

（よかった、クロノはエイミィが騒いだおかげで私があの本を持っていたことを意識してないみたいね。）

そうでもなかったらしい。

第１３話　宇宙船には秘密がいっぱいだ。（後書き）

このままでいいのかたまに不安になります。

第１４話　タダより高いものはない。それは経験して初めて知るものである。

クロノに出迎えられ再び俺たちはアースラへとやってきた。アースラスタッフへの挨拶も済ませて部屋に案内された。出動およびジュエルシードの発動が確認されるまでは自由にしてもらって構わないとのこと。

「よっしゃ、クロノの部屋ガサ入れに行こうぜ。」

「わざわざ僕のところまで戻ってきて何を言い出すんだ！」

「年頃の男の部屋だぞ？恥ずかしい秘密のパァ～ラダイスがあるに違いない。」

「そんなものはない！大体なのはとユーノはどうしたんだ？」

「なのはは学校の勉強するってさ。ユーノはそれに付き合うんだと。」

素直な子や純情な子には嘘を教えたくならない？きっと俺だけじゃないと思う。それに俺はいろんな意味で銃魔だろう。

「キミは勉強をしなくてもいいのか？」

「クロノの秘密のほうが気になるんだ。きっと需要がある。」

「僕に秘密があったとしても需要なんてあるはずがないだろう…。」

「え？だってそこに興味深そうに聞き耳立ててる女性が約２名ほど

いるんだけど。」

「何だって！？」

クロノが驚き、音が出そうな勢いで後ろを振り返った。

「やっほ～クロノくん。いや～艦長に誘われちゃって。」

「エイミィだってノリノリだったじゃない。私は母親として息子を知る義務があるの。」

エイミィさんがさらりと上司に責任を押し付けリンディさんがそれに反論する。

「な？需要あるだろ？」

「僕は職場を変えたほうがいいのか…。」

「気を落とすなよ。俺が相談に乗ってやるから。さ、お前の部屋で話そうか。」

「そうだな…ってキミが原因だろう！しかも場所がなんで僕の部屋なんだ！」

クロノは怒って仕事に戻ってしまった。

「クロノくん怒っちゃった。それにしても浩樹くん。」

「なんでしょう？」

「キミにはクロノくんいじりの才能があるね！お姉さんは仲間が増えてうれしいよ。」

「それにクロノには年の近い男の子の友達もあまりいなかったものね。ほら、あの子頭が固いでしょう？」

なるほど。詳しい過去は聞いてないけど幼くしてエリート、子どもらしい考え方よりも大人の組織人としての考えがすでにできるから同年代には友人はできにくかったのかもしれない。きっとスカしたやつとでも思われていたんだろう。

「何を言うんですか、リンディさん。ああいうやつだから面白いんじゃないですか。」

「お、わかってるね～。これからが楽しみだよ。」

「ふふ、そうね。クロノとは局員としてよりも普通のお友達として接してもらいたいわ。」

「きっとそうなりますよ。おっとそれよりこのデータとか欲しかったりします？」

俺は昨日のクロノを縛ったデータを2人に見せた。

「これって例のクロノくんがしばられたものじゃん。よかった～。ちょうど記録取ってないところだったんだよ。」

「こんなものをいつの間に…」

そんなもの縛られてるうちに決まってる。

「で、リンディさん。コレほしいですか？」

「……なんで私にだけに聞くのかしら？」

「いや～、昨日の反応がなかなか可愛らしかったもので。」

「こ、子どもが大人をからかうものじゃないわ。私は息子のそんな写真なんていりません。」

「それじゃあ、私だけですね。あとでデータの送り先を持ってくから。」

「エイミィさん、くれぐれも他の人に渡しちゃダメですよ？さすがにクロノがかわいそうですから。」

「！？」

「あれ？リンディさん、どうかしました？」

意地が悪いとか言うな。いいじゃないか。どんな反応するか見たかったんだから。魔法で再現とはいえ実物にも興味があるんじゃないかとは思ったけどなんか釣れそうだな。

「せっかくだから私ももらっておこう、かしら。」

最初から言わないあたり誘い受けなイメージを受けてしまうんだが…。まぁ対象が息子ってとこで悩んだんだろうな。

「どうしよっかな～。」

うん、クロノのあのいじりがいは遺伝だったのか。そんなものまで遺伝するなんて人って不思議だね。

「ほら、ほしいんならって…おぉうう！」

俺は緑色のバインドにしばられてしまった。

「すみません、浩樹が迷惑かけたみたいで。さ、行くよ。」

「ちょっとユーノ！まだ、お楽しみ中！」

「そう…楽しんでたのね？」

「私、知～らないっと。」

あれ～？リンディさんのおめめが恐いですよ～？エイミィさん逃げようとしないで助けてよ。

「エイミィ、訓練室は空いてるわよね？」

「え…あ、はい！もちろんですよ。」

うん？訓練室？なんでそなんこと確認してるのかおいちゃんわかんないな～。仕方ない、昨日のネタを掘り返して誤魔化そ――

「よければ、なのはさんも一緒にどうかしら？」

なん…だと？

「えーくん…そういえば、お話がまだだったよね？」

「あの、なのは。浩樹を差し出すからボクは許してもらえないかな？」

「うん、あれはどっちかっていうと私が連れて行ったんだもんね。」

「裏切ったな、ユゥゥゥゥゥノォォォォ！！！」

それじゃボクはこれで、なんて言ってユーノは俺を置き去りにして行ってしまった。俺は訓練室というなの断罪場に連れて行かれた。

ん？そのあと、どうなったかだって？お前さんたちも知ってる通り、俺はザコだぞ。必死に頭を地につけて携帯のデータを渡したに決まってるじゃないか。その上俺の土下座写真も撮られたよ。

許してくれなかったけどな！

俺たちがアースラに乗ってからのジュエルシード回収はこれまでとは比較にならないほどスムーズに進んだ。大きな組織いる上に探知機まで手に入れたようなものだ。これで速度が変わらなかったら管理局なんて必要ない。

『リリカル・マジカルジュエルシード封印！』

「ふっ、俺が手を貸すまでもなかったな。」

「飛行魔法もできないやつが行っても邪魔なだけだからな。」

「そこまでハッキリ言わなくてもいいだろうが！」

ジュエルシード回収となったらクロノはここぞとばかりに俺を攻撃してくる。いじりすぎたかな？

「”２人とも”お疲れ様。もう戻ってもらっても大丈夫よ。」

リンディさんまで毒吐くようになっちゃって。親子でニヤニヤしてるのが憎らしい。世界はこんなはずじゃないことばっかりだよ。

俺は踵を返しそこから出て行こうとするとクロノに呼び止められた。

「どこに行くんだ？」

「訓練室にでも行ってくるよ。」

「そうか飛行魔法の練習にでも行くのか？」

「そんなところだ。」

そして訓練室に向かう途中で戻ってきたなのはとユーノに出くわした。

「浩樹、お留守番は楽しかった？」

「うるせ。何か話してたのか？」

「うん、フェイトちゃんのことで。いろいろ考えちゃって。今日も現れなかったから。」

「向こうも欲しがってるんだ。いずれぶつかる。それまでに考えをまとめとかないとな。」

「そうだね。」

「悩め悩め少年少女。大きくなるともっとくだらないことで悩むようになるから。」

ぽんぽんとなのはの頭をたたいてやる。

「そんじゃ俺は訓練室に行ってくるわ。」

「そんな必死にならなくても大丈夫だよ？ボクとなのはで対処できてるし。」

「できなくなったときのための訓練…っていうより今のままだと切ないんだよ…。」

「ご、ゴメン頑張って。手伝わなくて平気？」

「そっちの魔王様の相手でもしてろ。」

「なのは魔王とかじゃないもん！」

え、俺にあんだけお仕置きしておいて？謝った上でお仕置きしておいて？

なんて言っても無駄なので俺はそのまま訓練室に向かった。
お前何しにきたんだとか言うなよ。おいちゃん泣いちゃうだろうが。

それから数日経ってもなのはがフェイトと接触することはなかった。向こうがいくつ集めたかまではわからないがこちらは9個。慎重になりすぎているのかそれぞれ別の場所で回収するという結果になっていた。

そのおかげで俺は訓練に集中し、高速で自由に動いたりはできないがなんとか飛べるほどには魔法を完成させていた。

「キミは魔力も多くないのにスムーズに身についているな。」

「俺がそっちじゃ普通じゃないんなら環境の違いとかなんじゃないか？」

今日はクロノが空いていたようで俺の訓練に付き合ってくれていた。

「魔法がない世界なんだから関係ないと思うんだが。」

「ユーノに一番最初に習ったんだが、魔法を使う上で重要なのは組み上げるまでの演算と想像力。演算に関しては偶然だろうけど、想像力の方は俺やなのはの環境の方が適しているのかもな。」

「というと？」

「使えないほうが夢が広がるってことだよ。使える側にしたらできることとできないことの線を引きすぎるんだ。」

「可能性はあるかもしれないな。特になのははこちらの常識を無視するかのような成長ぶりだ。」

「なのはが努力してないとは言わないけど理不尽だよな？」

「全くだよ。さて、ボクはそろそろ仕事に戻る。」

「ああ、サンキュな。」

魔法もやっぱ環境要因による影響も大きいんだろうかね。なのははこれ以上ない適した人間かもな～。さて軽く飯でも食べて続きやるかな。

「お、なのはとユーノも飯？」

「えーくん、今日も魔法の練習？」

「すみませんね～。まだ空も飛べない役立たずで。」

「そういう意味で言ったんじゃないよ～。」

「浩樹はそうやってからかうのが好きだね。」

「いや、本気で今のところ俺いらない子だし…。」

なんて話しているところに艦内にエマージェンシーコールが流れた。

『海上にて大型の魔力反応を感知。至急対応を――』

俺たちはそのまま転送ポートのあるデッキに走っていった。

「フェイトちゃん…。あの、私今すぐ現場に！」

「その必要はない。」

すぐ出動しようとしたなのはをクロノは冷たい声で止めた。

「放っておけばあの子は自滅する。自滅しなかったところでたいして魔力は残っていない。僕たちはそこを叩けばいい。今のうちに捕獲の準備を頼む。」

「了解。」

「なのはさん、私たちは常に最善の選択をしなければならないの。残酷に聞こえるけどこれが現実よ。」

リンディさんも気遣いつつも厳しくそう言った。

「いやいやいや、なんでフェイトを捕まえる最善の選択とやらをしてるの！？違うでしょ！目的はジュエルシードだよね！？」

「こっちのほうが効率がいいんだ。しかも相手は使用目的はわからないがロストロギアを違法所持している。」

「だ・か・ら！危ないのは地球！俺たちの世界だよ。そっちは放置？」

ジュエルシード６個だぞ？どう考えても待ってるほうがリスク高いと思うんだが。

「それは…。って待つんだ！何を勝手に行こうとしている！」

「すみません。高町なのはは命令を指示して勝手な行動を取ります。」

ユーノがナイスアシストをしたらしい。

そうだった。ユーノがなのはを転送させるんだったな。

「海上内の結界の中へ転送！」

「ユーノ、お前も一緒に行って来い。」

「……うん、わかった。あとは任せるよ！」

そしてユーノも自分をなのはと同じ場所へと転送させた。

「何をやってるんだ！」

なのはの行動にクロノは声を荒げる。それに対しなのはは念話で応えた。

（ごめんなさい。命令無視はあとでちゃんと謝ります。でもあの子

を放っておけないの。寂しがってるあの子の気持ち、ほんの少しかもしれないけど私、わかるから。）

「ったく…。」

「まぁ、なのはの行動理由だけなら気持ちはわかるよ。」

組織としてはあんな行動されてはたまったもんじゃないだろう。

「今回は仕方ないわね。浩樹くんが言ったことを我々が失念していたことは確かなんだし。」

「そうですね…。想像以上に相手が大きいかもしれないからそっちばかり意識してしまいました。」

プレシア…か。創作上は異常なほど娘に固執してたと思うけど、実際にデータなり実物なり検証しないとなんとも言えないな。

「参考までにこっちの世界の事情を話すとなのはくらいの年齢の子どもは組織行動を厳しく躾けるなんてことはそうそうないんだよ。こういった行動を見逃せってわけじゃないけど。」

「あなたもなのはさんと同い年でしょう？でもそうね、世界事情も全く別ですものね。」

『ディバイーン…』

『サンダー…』

『バスターー！！』『レイジィーー！！』

２人同時に凄まじい魔力砲撃を放った。

「魔法陣デカッ！」

「ジュエルシード６つ、すべての封印完了しました。」

「なんて出鱈目な…。」

「でもすごいわね…。」

なんかさ、あんなん見せられたらやってられなくね？

『友達に、なりたいんだ。』

その光景を全員が見守る中、警告が発せられた。

「次元干渉！？この艦および戦闘空間に魔力攻撃きます。防御間に合いません！」

「クロノ。」

「ああ、わかっている。」

正直に言えばフェイトを庇ってやりたい状況ではあるが、それは今ではない。記憶はだいぶ薄れてはいるが、フェイトには友達になりたいと言ったなのはを待ってやってほしい。その助けはできるかぎりやるから。

直後、アースラは攻撃を受けて俺やアースラスタッフは悲鳴をあ

げた。

「艦長！ボクは至急現場に向かいます！」

クロノはすぐさまなのはたちのいる海上に向かい転送した。

『邪魔をするなぁぁぁぁぁ！！！！』

『うわぁぁぁ！』

ジュエルシードを奪おうとしたアルフの妨害に成功したがすぐに吹き飛ばされた。しかし、その場に残っていたジュエルシードは３つ。もう３つはクロノが飛ばされる直前に掴んでいたようだ。

「うわ、クロノかっこいいんだけど。」

あの状況でよく３つも確保できたな。アルフもアルフですぐに切り替えて海水を目くらましに使って逃げようとする。

「逃走するわ。補足を。」

「できません。先ほどの次元攻撃が原因で機能停止しています！機能回復まで２５秒。逃げられます。」

仕方ない状況だ。相手のバックが不確定だったんだし。

「…機能回復まで対魔力防御。次弾に備えて。」

「了解。」

「それから現場のなのはさん、ユーノくん、クロノの回収します。…まさか次元攻撃をしてくるなんてね。」

「負傷者もでなかったし、あの状況で3つ回収できたんならマシな結果でしょうよ。」

「そう考えたほうがいいわね。あとはお説教ね。」

これを機に集団行動を学ぶんだぞ、なのは。

「指示や命令を守るのは集団での行動を行うためのルールです。」

あれ？俺、なんで説教される側にいるの？

「勝手な判断、行動をすることで周囲の人も危険に巻き込んだかもしれないことはわかっていますね。」

「うん、今回は少なくとも海上付近の人を危険に巻き込むところだったね。」

「アナタは黙っていなさい。」

おかしいな。俺の意見は正しいと思うんだけど。

「本来なら厳罰に処するところですが。」

「え？危険を放置しようとしてたのに？」

「…エイミィ。」

「はぁ～い、浩樹くんはちょっと黙ってようね～。」

エイミィさんの手で口を塞がれてしまった。ねぇ、この手舐めてもいい？

「いろいろと得るところもあったので今回は特別に不問とします。ただし、2度目はありませんよ。いいですね？」

「はい。」

「すみませんでした。」

まだじゃべっちゃダメなのかな。この空気苦手なんだよ。はい、集団行動お前こそ学べと思ったキミ！いつか社会で活躍できるだろう。知らないけどな。

「問題は今後なんだけど。クロノ心当たりは？」

「はい、おそらくこの自分です。僕たちと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テスタロッサ。違法研究によって放逐後行方不明となっていた人物です。そしておそらく彼女は…。」

「そういえば、フェイトちゃんお母さんって。それに何か怯えてる感じだった。」

「親子…か。」

ペロ♪

「ひゃぁぁ！」

「はぁ…何か言いたいことでも？」

「リンディさんの所持し…うそです、うそ！今後に関してなんてやることは決まってると思うんですよ。」

全員がすごい顔で睨んできたよ。ゾクゾクなんてしてない。そう絶対に。

「決まってるっていうのは？」

「ジュエルシードを回収しなきゃいけない以上当然ながら相手に接触する必要がありますね。向こうも捜索場所が海だったことを考えても残りはプレシア・テスタロッサが持ってる可能性は高い。」

そうでもなければどう考えても1度に6つはきつい。リスクが大きい。プレシア次第で可能かもしれないけど。

「続けて。」

「相手は管理局的に見て犯罪者。今まで見つかってなくて今回も追跡できなかったことからも発見できる可能性は低い。だったらもうエサ撒くしかないんじゃないですか？」

回収は海の件でフェイトが一任してるはず。…ん？このエサにかかったフェイトと戦うときがスターライトブレイカーのお披露目だったっけか？どう転ぶかわからないし、今考えても仕方ないか。

「消去法でこれしか残らないと思うんですけど。」
「僕も同じ意見だ。それがベストだろう。艦長、どうでしょうか？」
「そうね。下手に時間をかけて持ってるジュエルシードだけで何かされたら問題だしそうしましょうか。エイミィ。放逐後のプレシア女史の情報を出せるだけお願い。」
「了解しました～。」
「さて、なのはさんとユーノくんはもういいわよ。」
あの、俺は？
「浩樹くんにはもう少しお話があるの。だから、ね？」
「わかりました。」
「浩樹もいろいろ反省しなよ。」
見捨てられてしまった。俺は悲しいよ。
「され、浩樹くん。わかってて邪魔したわね？」
そりゃ俺の話理解したにも関わらず同じこと言われれば。気づく。
「今後の行動となのはのため、ですよね？」
「そうよ。そろそろ、書類仕事でも手伝ってもらおうかしら。」

「は？」

「はじめは関係ないことはさせないようにしてたんだけど、あれだけ邪魔したり仕事の妨害されたら…ねぇ？」

支障がないように手加減したはずなのに！

「その上で施設までタダで貸してるんだし。どうかしら、クロノ？」

「非常にいいと思います。重要なものさえ省けば艦内でできることもあるでしょう。」

しまった、リンディさんの仕返しか！

「局員でない上に管理外世界の人間にそんなことやらせていいんですか？第一ミッドチルダの言語わかりませんよ。」

「管理局はどこも人手不足なんだ。しかもキミの今の立場は民間”協力者”だ。問題ない。」

「言語も一発でこっちに翻訳できるものがあるから。」

なんでそんなものが…ってあの和風の一角か！そして所持しているであろうエロ本のためにこっちの言葉を適応させた翻訳機械まであるとは…。

「でも、俺まだこんな年だし。バカだからそんな仕事なんて無理に――」

「それはさっき自分で証明したじゃない。」

「あんな考察ができれば平気だろう。」

「「それに…」」

「そ、それに？」

「できなくても押し付けるから。タダって高いのよ？」

「キミはいつも見てるだけだったからな。これくらいはしてもらわないと。」

「「ねぇ？」」

ちくしょう、こんなところでもしっかり親子しやがって…。ハモってるあたりが余計にうらめいしいわ！

「あ、俺、宿題でフェレット観察日記書かなきゃいけないんで。」

「僕の秘密よりも下だろう？そして押し付ける仕事はそれより上だ。」

「それになのはさんはやってないみたいだしね。」

なぁ、出会い系サイトの架空請求ってこんな感じなのか？おおっと、架空じゃないだろとかいうツッコミはなしだ。キミたちも時空管理局ってとこから請求がきたらビビるだろ？

…ゴメン、俺なら爆笑するよ。

ま、まぁちゃんと知っておいたほうがいいぞ。無料（何もしないこと）の危険性をな。

第１４話　タダより高いものはない。それは経験して初めて知るものである。

さて、そろそろプレシアに関して具体的に決めなくては。

第１５話　言っただろ？俺は真面目な空気が苦手なんだ。

アルフｓｉｄｅ

なんとか管理局の制止を振り切り、時の庭園に戻ったフェイトに待ち受けていたのは目の前でミスミスジュエルシード管理局に取られたことに対する折檻だった。

今も部屋の中からプレシアがムチを振りフェイトにたたきつけられる音が響いていた。それにフェイトの悲鳴も…。

「なんで、なんでなんだよ…。フェイトは頑張ってるじゃないか。」

私は耳を塞ぎながら涙をこぼした。

フェイトは自分の体を省みずあれだけ必死にジュエルシードをかき集めてきたのにその結果がコレだなんてあまりに悲しすぎるよ。」

「アル…フ…。」

ようやく解放され出てきたフェイトは私に倒れこみ気を失ってしまった。

「フェイト…。」

もう我慢できない。あの女はフェイトが何をほしがっているのかまるで分かっていない。きっといつか、そんな希望を抱いてここまできたってのにあんまりだ！

私はフェイトをベッドまで連れて行き寝かせると。すぐにプレシアの元に向かった。

「プレシアぁぁぁぁぁ！！！」

「何をしにきたというの？」

私は問答無用でプレシアに殴りかかったが、魔法障壁の阻まれてしまった。

「あんたはフェイトの母親だろう！？それなのになんであんなことをできるんだい！？」

「何もかもが手遅れで、時間がないからよ。」

「手遅れで時間がない？そんなことはどうでもいいよ！それでもフェイトは頑張ってきたんだよ！あんたに笑って欲しくて！」

「フフフ、そう。」

「何がおかしいんだよぉぉぉぉ！！！」

フェイトの頑張りを笑われたような気がして私はプレシアの胸倉を掴みあげた。

――ドン！

「がはぁ！！」

私は魔法で吹き飛ばされてしまった。

「お前は”ここ”にはもう不要よ。消えなさい。」

デバイスを取り出し、再度私に攻撃しようとしている。

逃げなきゃ、どこでもいい。誰かフェイトを助けてくれる人のところへ。

「いつまでもフェイトと一緒に踊るといいわ。」

私が転移する直前にプレシアはそう言った。私にはまたフェイトがバカにされているように聞こえた。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

やぁ。突然だが、もしキミが宇宙船に乗って少しの間旅をしたとしよう。そして旅を終えて戻ってきた。戻ってきた第一声はなんだろうか？聡い君たちならもうわかるな？

「地球よ、私は帰ってきた！」

一時的にね。

フェイト、プレシアとの接触を待つことになった俺となのはは両親への説明を兼ねて海鳴へと帰ってきた。まとめて一緒に説明したほうがいいだろうとウチの両親も翠屋に来ている。

「という感じの１０日間だったんですよ。」

「ウチのなのははご迷惑とかかけたりしませんでした？」

「それが全然。ウチのクロノにも見習わせたいくらいで。」

（えーくん。お母さんたちに魔法のこと話してるって言わなくてもいいの？）

（話してるからこの白々しいごまかしが面白いんだよ。ほら、美由紀さんとか笑いこらえてるだろ？）

（ボクはこういう嘘つかれたら多少は怒ると思ったんだけど。）

（本来は秘密にしなきゃいけないことをわかってるからだろ。）

俺となのはとユーノの念話からわかる通り、リンディさんたちには家族に事情を説明したことを言っていない。ぶっちゃけ忘れてただけなんだが。

「なのはちゃんはいい娘さんだからな～。ウチのバカは迷惑かけっぱなしでしょう？」

「いいえ、ウチのクロノと仲良くしてくれて助かってますよ。」

「まさか！どうせお宅の息子さんをからかってるんじゃないですか？」

さすが俺の親父だ。真っ向から否定しやがった。

「よかったわね、浩樹。男の子のお友達あんまりいなかったものね。

お母さんも会ってみたいわ。」

クロノ次第だな〜。仕事忙しいみたいだし。

「で、リンディさん。聞きたいことがあるんですがいいですかね？」

「あら、なんでしょう？」

親父がそろそろ我慢できなくなったみたいだ。

「その宇宙船は私たちも乗れませんか？」

「…はい？」

リンディさんのこれまでの誤魔化しはそういったものをすべて除いたものだったため親父の突然の質問に目を丸くする。

「あ、あの宇宙船…とは？」

「なんでもその宇宙船を使って探しものをしてたようで。聞いたときから乗ってみたかったんですよ。」

「私も魔法見てみたい！なのはったら見せてくれないんですよ。」

親父が話し始めたことによって美由紀さんも親父の発言に乗っかった。

うん、俺が口止めしたんだ。面白そうだったから。タイミングは任せてたからリンディさんが説明したあとってことにしたんだろうね。

「浩樹くん。何か私に言い忘れたことはありませんか？」

ピンポイントで俺に聞いてきた。

なんだよ。事情説明は全部ユーノがしたんだからそっちに聞こうとは思わないの？信頼されないって悲しい。

「リンディさん、美人だね♪」

「そういうことじゃありません！アナタ魔法のことしゃべってたでしょう！」

「うん、今リンディさんがしゃべったね。」

「あ…。」

超楽しいッス。そんな迂闊なこと普段ならいわないだろうに。自分で言っちゃうあたり俺に毒されたと言えるな。事前に俺が話してたことだし、この件で上に咎められることはないと思う。

なのでからかいます！

「リンディさん。魔法のことはそこまで秘密にしなくてはならないものなんですか？」

ここで士郎さんが真面目に聞いた。危険なことであることはユーノが説明してるし、なのはが自分からやると言ったことだったから管理局を責めはしていないが家族にも話せないほどなのかと聞いている。

「以前それが原因で問題を起こしたこともありますのでできる限り魔法技術のない世界では秘匿することになっています。とはいえ誤魔化すような真似をしてしまい申し訳ありませんでした。」

素直にリンディさんは頭を下げた。バレてる以上事情があったとはいえ嘘をついたためにけじめをつけようとしたのだろう。

「娘から言い出したことですし、頭を上げてください。そういった事情ならばこちらも責められません。」

「うむ。許してやろう。感謝するといい。」

「「「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」」」

あれ？おかしいな。みんなが俺を見つめてる。

「あの、浩樹くんを少しお借りしてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ、どうぞ。煮るなり焼くなりお好きにしてください。」

「浩樹、ちょっと反省してきなさい。」

笑顔で差し出そうとするな親父！お母様も見捨てないで！

「それならウチの道場をお使いください。」

「美由紀、道場を開けてきてくれ。」

「はぁ～い。柳くん、タイミングは考えないと。」

美由紀さん、アンタ俺に賛成だったくせに！士郎さんと恭也さんも道場貸そうとしないで！

味方がいない…。ええい、管理局がなんぼのもんじゃい！かかってこいやぁ！

「ふふふ、浩樹くん。いっぱい可愛がってあげるわ♪」

「ど、道場でプレイなんて…リンディさんマニアックですね。」

おかしくないよね？美人の未亡人に可愛がってあげるなんて言われてドキドキするのって普通だよね？

「恭也、俺たちもちょっと行こうか。」

「空気読まなくてすいませんでしたぁぁぁ！」

なんか最近の俺って頭下げすぎじゃね？これはマズイな。そのうち仕返しせなば…。

翌日の学校。1週間以上学校を休んでいればその間のことを気にする人は多いだろう。

「高町さん、用事ってなんだったの？」

「私さみしかったよ～。」

「もう普通に来られるのか？」

「ノートとかは月村とかに見せてもらうの？」

キミたちもわかってただろう？俺は学校でもモブなんだ。きっと何故俺に何も聞かないのか尋ねれば「あ、お前もいなかったんだ。」と返されるに違いない。

「で、アンタもなのはと一緒に例の用事ってわけ？」

「アリサ！俺はキミの優しさに感動した！」

俺は思わずアリサに抱きついた。

べ、別に寂しかったわけじゃないんだからね！

「わかったから、は・な・れ・な・さ・い！」

恥ずかしがるわけでもなく引き剥がされてしまった。もうちょっとかわいい反応してくれてもいいと思う。

「えーくんも久しぶりだね。元気だった？」

「再会の感激ですずかが抱きついてくれたら元気になるかも。」

「うん。十分元気みたいだね。」

「すずかたちは何か楽しいことでもあった？」

「あ、そうそう。なのはにも話したんだけどケガした犬？を拾った

のよ。立派な毛並みの大型犬なんだけどね。」

犬か。にゃんこほどではないけど好きなんだよな～。

「ついでだし、あんたも見に来る？なのはは来ることになってるんだけど。えっと…ほら、この犬よ。」

……え？アルフ？

（えーくん。これアルフさんだよね？）

（額にギャグかおしゃれか知らんが宝石がついてるし間違いないだろう。）

（もともとついてたんじゃない、かな？）

前々から思ってたけどあの額の宝石って大仏みたいじゃね？今度黒く塗ってみようか…。

というわけでやってきましたバニングス邸。ウチの学校は私立だけあってそれなりの金持ちが通ってるけどやっぱりここは格が違う。

「ほら、この子なんだけど…。」

「…プッ」

やばい、吹きだしそう。だってほら、アルフが本来の犬扱いだぞ？犬小屋（むしろ檻？）で丸くなってる姿ってのがいかにもそれっ

ぽくて笑いそうになってしまう。

「なぁ、アリサ。この犬眺めてていい？」パシャ

「それは別に構わないけど、どうしてよ？」

「この中にいるんなら逃げられることもないし。なんか珍しいからもうちょい眺めてたいんだ。」

（えーくん、私はアリサちゃんと行くからユーノくんと実況をお願いできる？）

（あいよ。どう考えても訳アリっぽいもんな。）

元々遊ぶ約束をしてたなのははそのアリサを放ってここにいるわけにもいかず遊びのほうを優先した。むしろそっちのほうが自然なことではあるけど。

（よぉ、アルフ。とうとう犬として生きる決心でもついたのか？）

（ひ、ヒロキかい？）

（ああ。ユーノも一緒だ。で、何があった？フェイトが傍にいないってことは事情があるんだろ？）

（話してもらえるかな？）

（……管理局の連中も聞いてるんだろ？）

（すまない。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。正直に話

してくれれば悪いようにはしない。）

（えっち！覗いてたのね！これはもう現地の警察に盗撮の現行犯で…）

（浩樹はもう…。）

（キミたちが事前に連絡をくれたんだろうが！）

（し、しかも使い魔とはいえ女に悪いようにはしない、なんて変態行為をしようとしてるみたいだし。）

（ああもう！話が進まない。キミは黙っててくれ。）

（話すからフェイトを助けてやってくれよ。あの子は何も悪くないんだ。）

ハブられてしまった。いじられ体質のクロノが悪い。キミたちもそう思うよな？

それからアルフはこれまでのフェイトの事情を話した。ジュエルシードの使用目的を知らされず、ただ命令されて集めていただけだということ。どれだけ頑張って集めても足りないと怒って虐待されていたこと。それらをアルフは話せるだけ話した。

（思ったとおり根が深そうな問題だ。事情はわかった。）

（それは…ひどいね。）

俺はさすがにこの辺の事情は覚えていた。しかし、俺にはそれを救えるほどの力はない。ただ、最悪の事態にならないようにサポートしていくしかないことに幾ばくかの悔しさがあった。

（アルフ…よく今まで頑張ってきたな。）

檻に手を入れてアルフの頭をなでる。

努力を認めてもらえない、結果が出ないことは誰だって辛い。そこからどうなるかはそれでも進み続けるか、立ち止まるかで決まる。

（今は俺たちに任せてゆっくり休みな。）

それでも立ち止まらずに愚直にも進み続けるバカは俺は好きだ。お前もそういうバカだよな、なのは？

（これより我々の目的はプレシア・テスタロッサの捕縛になる。まだ詳細はわからないがアースラを攻撃したというだけでも逮捕の理由となる。）

（高町なのは、それに柳浩樹。君たちはこれからどうする？）

言外にここからは任せてくれてもいいとクロノは言っている。フェイトとの衝突を考えてのことだろう。

（最後まで…やるよ。フェイトちゃんのお話まだ聞けてないもん。あの子の持ってる辛いことや悲しいことを一緒に背負ってあげたい。そのためにだったらケンカしたっていい！）

（そうか。キミほどの魔力の持ち主の協力はこちらとしても非常に助かる。で、浩樹はどうする？）

何を言ってるんだか。こんなに小さい女の子が頑張ってるんだ。そんなの決まってるじゃないか。

（戦力と役に立てそうにはないけどな。さすがに放っておけるわけないだろ。）

（キミの状況分析力はボクも見習うことは多い。あまり謙遜しないでくれ。）

（ユーノ！聞いた！？クロノが俺を褒めたよ！）

（つくづく真面目な空気が苦手なんだね、浩樹は。）

（エイミィさん、あとでクロノが俺を褒めた部分だけ抜き出した音声データください！）

サーチャーでこっちを見てるのだから一緒にエイミィさんもいるはずだ。

（オッケー。任せて！）

さすがだぜ、エイミィさん。

（エイミィ！）

（全く、浩樹は。）

（にゃはは。でもえーくんらしいね。）

さて、これで状況は整った。プレシアにフェイト。お前らの相手は全としては小さいけど個として大きい高町なのはだ。覚悟してからないと負けちゃうぞ？

第１５話　言っただろ？俺は真面目な空気が苦手なんだ。（後書き）

なかなかキャラクターが思ったとおりに動いてくれない。何故だろう？

第１６話　俺は基本的に見てるだけ。でも口は出す。

書類仕事はと非常に面倒なものだと感じたことはないだろうか？ああ、すまない。学生の場合だとレポートの提出だったり、みんなでしらべたことをまとめるといったほうがいいだろうか。こういったものはチーム作業の場合、仕事の割合が誰かしらに偏るものだ。

そう偏るのだ。仕事の早いやつ。無駄に人がいいやつ。それは様々だろう。

「アレックス、ランディ！それに加えてエイミィさん！なんで今回の件の報告書までこっちにやらせてんの！？」

「キミにはシンパシーを感じるんだ。」

「クロノ執務官もできるだけ仕事をさせとけと…。」

「できてるんだからいいじゃ～ん。艦長も問題ないって言ってたよ。」

「重要な仕事はさせないって言ったじゃん！これ重要案件じゃないの？」

うん。ようは俺に回ってきたんだ。俺の場合どれにあてはまるのやら。

それにしてもおかしい。重要な案件は省くって言ってたはずなのに。さすがにこれはダメなんじゃない？

「何のために報告書の書式まで教えたと思ってるんだ？」

クロノくんの登場です。お前の差し金か。

「清書は当然こちらでやる。君に任せているのは草案作成だ。これなら問題ないだろう？」

「もう諦めなって浩樹くん。一緒にお仕事しようよ。」

「うんうん。非戦闘員はおとなしく仕事をしよう。」

「ついでに楽をさせてもらえるとうれしいね。」

上からクロノ、エイミィ、アレックス、ランディがそんなことを言った。特に下2人は種族的に近しいものがあるのかもしれない。俺としてもこの2人とは仲良くなれると思う。

「さすがになのはの才能が恨めしく思えてくる…。」

「それは僕も同じだ。それより、プレシアに関する情報がまとまった。明日の朝に例の件を実行する。」

「そっちも俺がやったじゃん！」

記憶というものは1つでもきっかけを掴むと芋づる式に引き出されていく。そのせいで情報整理が早く、はじめは本当にお手伝いだったのに今では報告書作成班にいる。

それにしても明日か。俺という異物が混じったこの世界のフェイトとプレシアをどうなっていくのだろうか。せめて笑っていられる

結末であってほしい。

そして迎えた翌朝。場所は海鳴公園。クロノが縛られたあの公園だ。

「フェイトちゃん。出てきてもいいよ。」

根拠はわからなかったがまるでフェイトがいるのを確信しているようになのはは声をかけた。そしてフェイトはその声に応えるように姿を現した。

「フェイト、もうやめよう？これ以上あんな女の言うことなんか聞かなくてもいいよ！」

「ごめん、アルフ。それでも私は母さんの娘だから。だから…戦う！」

自分にも言い聞かせるように言って鼓舞し、フェイトはバルディッシュを構えた。

「捨てればいい、逃げればいいなんてことはないよね。だからこそ私とフェイトちゃんはぶつかってきた。これが最初で最後の真剣勝負。」

「互いのすべてのジュエルシードを賭けて。」

『『Ｐｕｔ　ｏｕｔ．』』

２人ともデバイスからジュエルシードを取り出し、決意に満ちた表情で見つめ合う。

「まだ始まってもいない物語を、自分を始めるために戦おう、フェイトちゃん。」

それぞれの決意を胸にまだ幼い少女たちの戦いが始まった。

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｓｈｏｏｔｅｒ．』

『Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ．』

まずはお互い魔法弾で牽制している。ディバインシューターは弾速こそ遅いが誘導弾であり、連射も可能だ。直射型のフォトンランサーでは射撃において分が悪い。

「シュート！」

「クッ！――ハァッ！」

『Ｒｏｕｎｄ　ｓｈｉｅｌｄ．』

案の定、なのははすぐに次弾を放ちフェイトの動きを止める。さらに一発をわざと外して正面から攻撃してきたフェイトに背後から誘導弾で反撃する。

その隙になのはは高速で移動し、フェイトの死角から攻撃しようとするが防がれた。

「……なぁ、これって９歳の女の子の戦い、だよな？」

「正直、滅多に見られるものじゃないよ。それが管理外世界ならなおさら。」

「アタシはなのはって子のほうが信じられないよ。こんな短い期間にどうやったらフェイトと互角に戦えるようになるんだい？」

どう考えたって子どもができる戦い方じゃない。フェイトはともかくなのははちょっと前までわりと普通の少女だったんだぞ？それがどうやったらここまで戦術的な戦い方ができるんだよ。

「クロノあたりが出鱈目とか言いそうだ。」

個人的にはクロノも十分その範疇にいるんだけどね。

俺たちがそんなことを言ってる間にも戦いは続いていたが、ここに至ってようやく地力の差が出始めていた。

「ハーケンセイバー！」

『Ｂｌｉｔｚ　ａｃｔｉｏｎ．』

これまでなのはの動きに合わせて戦っていたフェイトが本来のヒットアンドアウェイの戦い方に切り替えたことによってなのはを揺さぶる。スピードが持ち味のフェイトが自分の土俵になのはを誘導したのだ。

「レイジングハート！」

『Ｆｒａｓｈ　ｍｏｖｅ．』

対抗するようになのはも高速で移動するがそれがフェイトの狙い。高速戦闘に慣れてないなのはをそこで叩く。

「はぁ、はぁ、やっぱりフェイトちゃんは強いね。」

それでも防いでいくなのは。順応が早く、もうフェイトの速度に対応していた。これ以上長引かせてはまずいと感じたのかフェイトは一気に落としにかかった。

「な、何！？」

「アルタス・クルタス・エイギアス、疾風なり天神、今導きのもと撃ちかかれ…」

なのはがバインドで四肢を拘束され、フェイトは詠唱を始めた。

「ライトニングバインド…まずい、フェイトは本気だ！」

「なのは、今サポートを！」

「ダメ！これは私とフェイトちゃんの一騎打ちなの！」

「でもフェイトのそれは本気でやばいんだよ。」

「好きにさせてやれよ。」

「浩樹。でもなのはが…。」

「なのはなりの誠意なんだよ。あんな風に正面から向き合うことが。

」

フェイトとの戦いは正直ジュエルシードよりもフェイトを知ることのほうがなのはにとって重要なんだ。本人の気質か幼いゆえか不器用に正面からぶつかることしかできないなのはの精一杯の誠意。

「本気でヤバイ場合はクロノ頼んである。だから俺たちは見守ってやろう。」

そしてフェイトの詠唱が完成し、渾身の魔法が放たれた。

「フォトンランサーファランクスシフト、打ち砕け、ファイア！」

３８基からなるスフィアからの魔法弾の高速連射。それがフェイトの奥の手だった。

「止めておいてなんだが…えぐい魔法だな。」

「だ、だよね…。」

磔にした状態でマシンガンをぶっぱなしてるようなものだ。恐ろしいなんてもんじゃない。

「打ち終わるとバインドも解けるんだね。今度はこっちの番だよ。ディバイーン、バスターー！！」

「は？」

「え？」

「嘘！？」

なんであんな攻撃受けてそんだけ余裕残ってるんだ？

「あれ、フェイトの奥の手…なんだよな？」

「うん、フェイトの魔法の中でも最強の威力のはずなんだけど…。」

フェイトの魔法を受けきったなのはがすぐに反撃し、なのはにならうようにそれを食い止めるフェイト。

「あの子だって耐えたんだ。これくらい！くっうぅぅ…」

フェイトはなのはを意識しすぎてしまった。そしてそれゆえに気がつかなかった。なのはの本命に。

「はぁ、はぁ…え？」

自分の頭上から来る桜色の光に気づいたフェイト。しかしもう遅かった。

「な！バインド！？」

「受けてみて。ディバインバスターのバリエーション！使い切れなった魔力をもう一度自分の下へ…」

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．』

「これが私の全力全開！スターライトブレイカーーーーーーー！！！」パシャ

礫にしてマシンガンを放ったフェイトに対してなのはは同じように礫にして大砲をぶち込んだ。うん、俺の説明は間違ってないはずだ。そして記念に撮ってこう。

「で、誰だ。なのはにあんな魔法教えたやつは。防御５枚も張ってたの簡単にぶち破ったぞ。」

「れ、レイジングハートじゃないかな…。僕は収束魔法なんて使えないし。」

「フェイト以上にえぐいよ…。」

さすがのフェイトもなのはの大威力砲撃には耐え切れなかったらしく、気絶して海に落下した。それをなのはがすぐに助け出す。

その直後――

（浩樹！予想通り、前と同じ次元跳躍攻撃反応を感知した。）

「了解っと。」

プレシアの背景のこともあってこのことはなのはとユーノには伏せていた。余計な心配をかかえさせたくなかったから。そしてこのために俺はこっちにいたのだ。

なんといっても飛べるようになったからな！

「浩樹、聞いてないよ！？」

「あとで説明する。捕縛二式、射出！」

「えーくん？」

俺は2人をバインドで捕まえ、リターンでこちらに引き寄せる。

――バチバチバチィ、ドーン！！

直後に寸前までなのはとフェイトがいた場所に攻撃が来た。

（クロノ、相手の空間座標の探知はうまくいったか？）

（ああ、問題ない。一緒にフェイト・テスタロッサもこちらに連れてきてもらえるか？）

（わかった。）

捕まえたままだった2人を地上に降ろすと同時にバインドを解いた。

「立てるか、フェイト？」

「アタシが支えるよ。」

ダメージの抜け切ってないフェイトの足がおぼつかなかったがアルフがそれを支えた。

「浩樹、さっきのはどういうこと？」

「まだだ。ここからが本番なんだから。」

ＲＰＧで言うならボス戦だ。終わりのときは近い。

アースラに戻ってきてフェイトは拘束された。立場上仕方がないがちょいと可哀想な気もする。なのはも口を挟もうとしたが拘束されてるだけだと言って黙らせた。

「もう少し我慢してくれな、フェイト。で、今どうなってる？」

「ああ、今、敵の本陣に突入部隊を向かわせたところだ。」

「なんだって？」

「だから突入部隊を…」

「相手はオーバーＳの大魔導師だろ！？返り討ちにあうに決まってるだろうが！」

「次元跳躍攻撃のあとだもの。今なら捕縛できるはずよ。」

俺の指摘に対しリンディさんがそう答えた。なのはもスターライトブレイカーのあとはかなり消耗してたし、その理屈はわからなくもないんだけど…。

『プレシア・テスタロッサ。時空管理法違反、および次元航行船への攻撃の罪で逮捕する。』

その武装局員の言葉とともに他の局員が奥の部屋へと侵入し生体

ポッドを発見した。

フェイトと瓜二つの少女が入ったポッドを。

『なんだ、これは？』

『私のアリシアに触らないで！！』

激昂したプレシアに一人の局員が投げ飛ばされた。そして突入部隊全員に雷撃魔法を浴びせた。

「いけない、局員たちの送還を！」

「だから言ったじゃん！」

「アリ…シア？」

戸惑いを隠せない様子でフェイトがつぶやく。

『もういいわ。終わりにしましょう。アリシアの代わりの人形を娘扱いなんてもうたくさんだわ。聞いていて？フェイト、あなたのことよ。』

すまん、この空気俺が耐えられない。

「あはははは、ちょっと何ですか、その格好！？いい年した女性がコスプレ？いやいや、違うにしてもその露出度はないって！」

「「「「・・・・・・・」」」」

「あ、もしかして精神的な病気でした？すみません、無神経で。でも…ププッ」

『……せっかくアリシアの記憶を与えたのに似ていたのは見た目だけ。役立たずでお使いひとつ満足にできないお人形。』

「実は２６年前の事故でプレシア・テスタロッサは娘、アリシア・テスタロッサを亡くしているの。その後彼女が行っていた研究は使い魔を超えた人造生命体の生成。そして死者蘇生の技術。開発コードプロジェクトＦ・Ａ・Ｔ・Ｅ。」

無視されてしまった。エイミィさんまで無視して説明してるし。

『よく調べているわね。そう、私の目的はアリシアの蘇生。でもできたのはただの偽者。贋作でしかなかったわ。』

「だろうね。そら無理だわ。」

『どういうことかしら？』

あ、ようやく反応してくれた。さぁ、行くぜ。俺の超適当理論！

「魔法を使おうと生命技術を研究しようと死者の蘇生なんて不可能なんだよ。」

知らないけどね。

『そんなことないわ。アルハザードにさえたどり着ければ…。』

「世界ってのはな、例外なく法則によって成り立ってるんだよ。魔

法を使い、その上研究者だったアナタならわかると思うけど何かの現象を引き起こすためにはちゃんとルールが存在する。無から有は発生しないんだ。」

へぇ～そうなのか～。

『その年でよくお勉強してるわね。』

「それはどうも。んで記憶転写による蘇生だったっけ？えーと無理です。細胞が同じだろうと同じ人間はできません。クローン作っても双子にしかならないの。おわかり？」

『そうね。アルハザードは未知の技術世界。たとえ１％以下でも私はその可能性に賭けるの。』

あれ？挑発に乗ってこないぞ？子どもだから相手にされてないのか、本気で狂っているのか、それとも…。

「おそらく記憶転写が変な伝わり方しただけだと思うよ？天才技術者の記憶を新しい体に転写、はい不老不死って言えば事情を知らない人間はそう思うだろうし。」

『もうアナタの想像は結構よ。フェイト、アナタに伝言があるわ。』

「な、何ですか？」

しまった。やりすぎたか？

『あなたはアリシアが蘇るまでの慰めでしかなかったのよ。もう何処へなりとも行ってしまいなさい。』

「……え？」

「もうやめて！」

なのはがこれ以上傷つくフェイトを案じて止めようとするが、

『最後にもうひとつ…私はね、あなたのこと作り出してからあなたが大嫌いだったのよ！』

「あ……」

ショックでフェイトが倒れてしまった。それにしても何か引っかかるな…。

「庭園内に魔力反応！いずれもＡ反応です。５０、１００、まだ増えます！」

「プレシア・テスタロッサ！何をするつもり！」

『旅立つわ。アリシアとともにアルハザードへ。そしてすべてを取り戻すわ。』

「次元震を確認！中規模以上です。」

「チィ！僕が行く。エイミィ転送ポートを開いてくれ！」

「私も行きます！」

「僕も！」

そこになのはとユーノが加わった。
「今の状況だと頼もしいな。悪いが、頼む。」
「私も現場に出てディストーションシールドで次元震を抑えます！」
そしてリンディさんも加えた４人は転送されプレシアの時の庭園へと向かっていった。
俺？出て行っても傀儡兵とやらに踏み潰されるよ。

フェイトも心配だったのでアルフと一緒に艦内の一室にいる。
「あの子達が心配だから私も行くよ。ヒロキ、フェイトをお願いできるかい？」
「俺が出て行っても邪魔だからな。任せといて。」
「フェイト、全部終わったら自由だから。だから前みたいに優しい笑顔のフェイトに戻ってね。」
そういってアルフはフェイトの頬を軽くなでて部屋を出て行った。
フェイトはその数分後に目を覚ました。俺に気づかぬまま部屋のモニターに目を向けた。
「母さん、やっぱり私のこと嫌いだったんだ。だから最後まで微笑

んでくれなかった。」

「寝起きのフェイトちゃん、はいチーズ！」パシャ

「ひ、ヒロキ！？みんなと一緒に行ったんじゃなかったの？」

「俺のスペックわかってて言ってる？」

「あはは、はは、は…」

「どうした？」

「ねぇ、私、お人形なんだって。わ、私ね、母さんに笑ってほしくて頑張ってたんだ。」

「そうか。」

さすがにここで余計な口は挟まない。俺は相槌を打って続きを促した。

「そのためだけに頑張ってきたのに、いらないって。どこにでも行けって。大嫌いだって言われちゃった。」

悟ったかのような口調で淡々とフェイトは話した。

「どうしよっか。偽者なんかに生きてる価値なんてあるのかな…。」

「面白い話をしようか。」

「ヒロキ？」

本当は話すつもりなんてなかったんだけどな。９歳が生きてる価値なんて言い出されては適わない。

「俺には前世の記憶ってやつがあってな――」

俺は前世でも冴えないやつだった。普通の大学に入り、大したこともなく卒業して。就職難で定職につけず、仕事を探してバイト。その繰り返しの日々を送った。

女性と付き合ったこともあったが長続きせず、すぐにフられて。引きこもりにまではならなかったが楽しいことといえば漫画にアニメに小説などの創作の物語だった。

つまらない日常を忘れてその世界に入り込むのはとても楽しかった。だがそれだけ。感情が麻痺してしまっていた。現実はつまらないなんてことを考えてしまっていた。

それがイヤになり、足にしか使ってなかったバイクで気分を晴らそうと思った。漫画で楽しそうにバイクで走る主人公に影響されて。

それでちょっと格好つけようと思ったのが悪かった。走ってる途中に談笑してる女子高生を見かけたのでバイクを思いっきり倒して猛スピードで曲がろうとしたんだ。

その結果、俺は曲がりきれずにオーバーラン。反対車線に飛び出してバスと正面衝突。バスとバイクどちらが吹っ飛ぶかは想像に難くない。そこから記憶がない。

「――と、そんなバカは死んだ。死亡原因、女の子にかっこつけよ

うとした。面白くない？」

「ふふ、そうだね。ヒロキはバカだったんだ？」

「でも本当にかわいい女の子だったんだよ。」

「それでヒロキはその、てんせい？をやって新しい自分を始めたんだね。」

「……」

「そっか。私はまだ自分を始めてなかったもんね。まだ、やれることがる。そうだよね、バルディッシュ。」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ．　Ｇｅｔ　ｓｅｔ．』

フェイトは立ち上がりバルディッシュを起動した。

「何ができるかわからない。でも、このままじゃ手遅れになる。だから始めよう本当の自分を。」

『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ．』

自己修復機能でバルディッシュを直した。

「行くのか？」

「うん。捨てればいいってわけじゃない。逃げればいいってわけじゃもっとない。アリシア・テスタロッサじゃなくてフェイト・テスタロッサを始めるために私は行くよ。」

「そうか。出て行く前にハイ、チーズ！」

「え、え、えっと…こう、かな？」

戸惑いつつもしっかりポーズを取ってくれたフェイト。パシャっと。

「それじゃ、行ってくれるね。」

「晩御飯までには帰ってくるのよ～。」

「んもう、ヒロキは…。」

「それとな、今のフェイトものすごくカッコイイぞ。頑張って来い。」

あんな少女にカッコイイとこ見せられたらおいちゃんも頑張ろうって気になるね。ちょっと気になることもあるし、この予想が当たっていれば笑える結末になるかもしれないし。

さて、着用式の防護服があったはずだから危険承知で行ってみますか！

第１６話　俺は基本的に見てるだけ。でも口は出す。（後書き）

切りどころが微妙になってしまった。そして戦闘描写は相変わらずわからない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0667p/

サポート的な俺のリリカル介入記

2010年12月9日21時48分発行